カラコルム登山報告

SHUMARI KUNYANG CHHISH

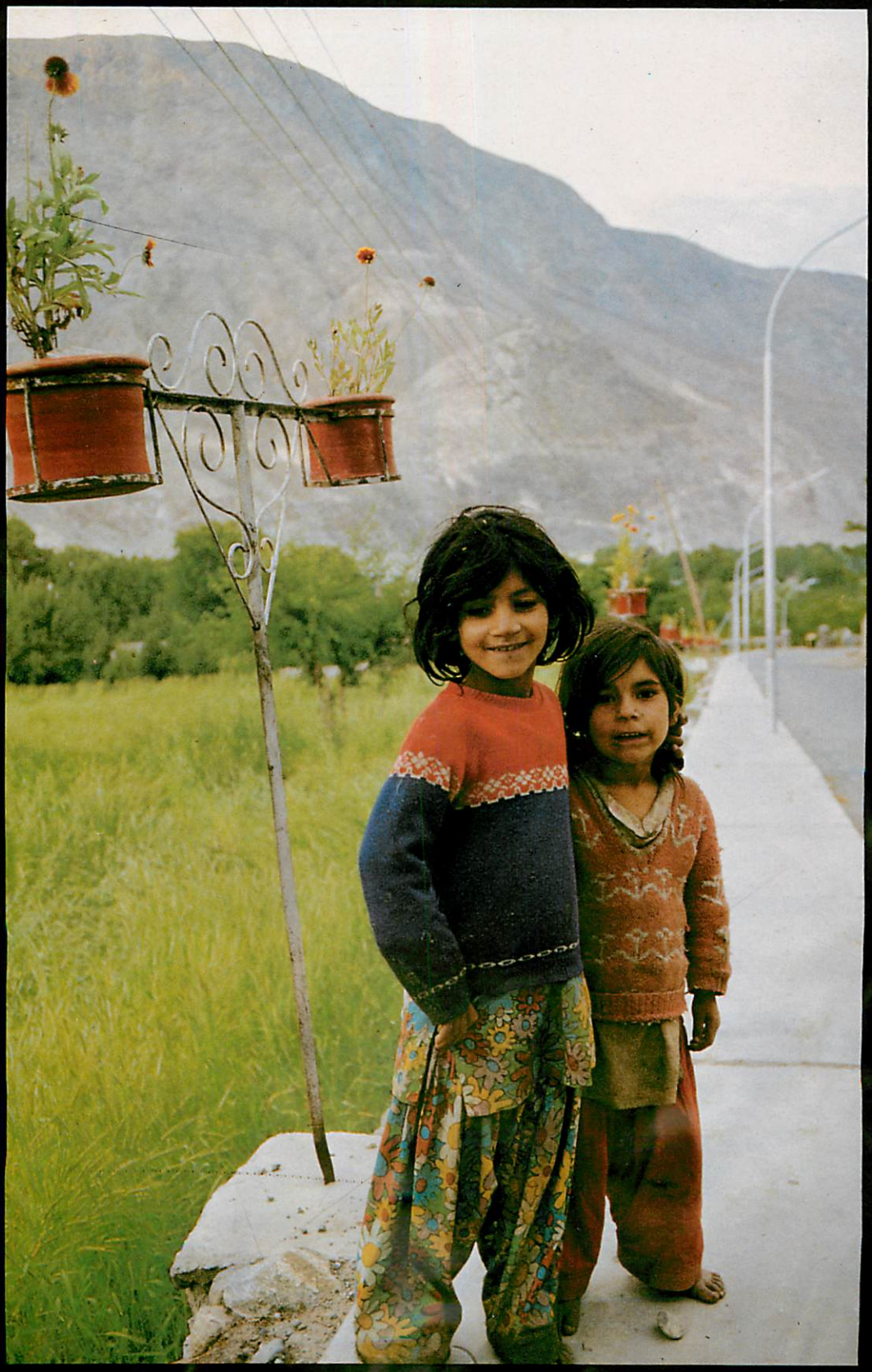
KARAKORUM EXPEDITION 1979

ACADEMIC ALPINE CLUB OF HOKKAIDO

北海道大学山岳部山の会

カラコルム登山報告

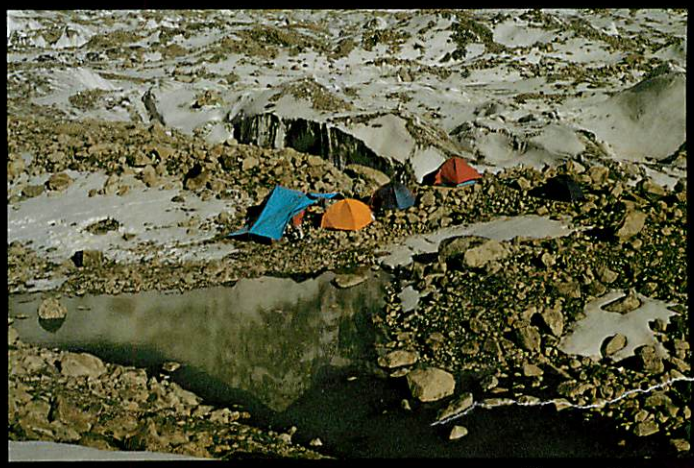
北海道大学山岳部山の会



ラワルピンディで

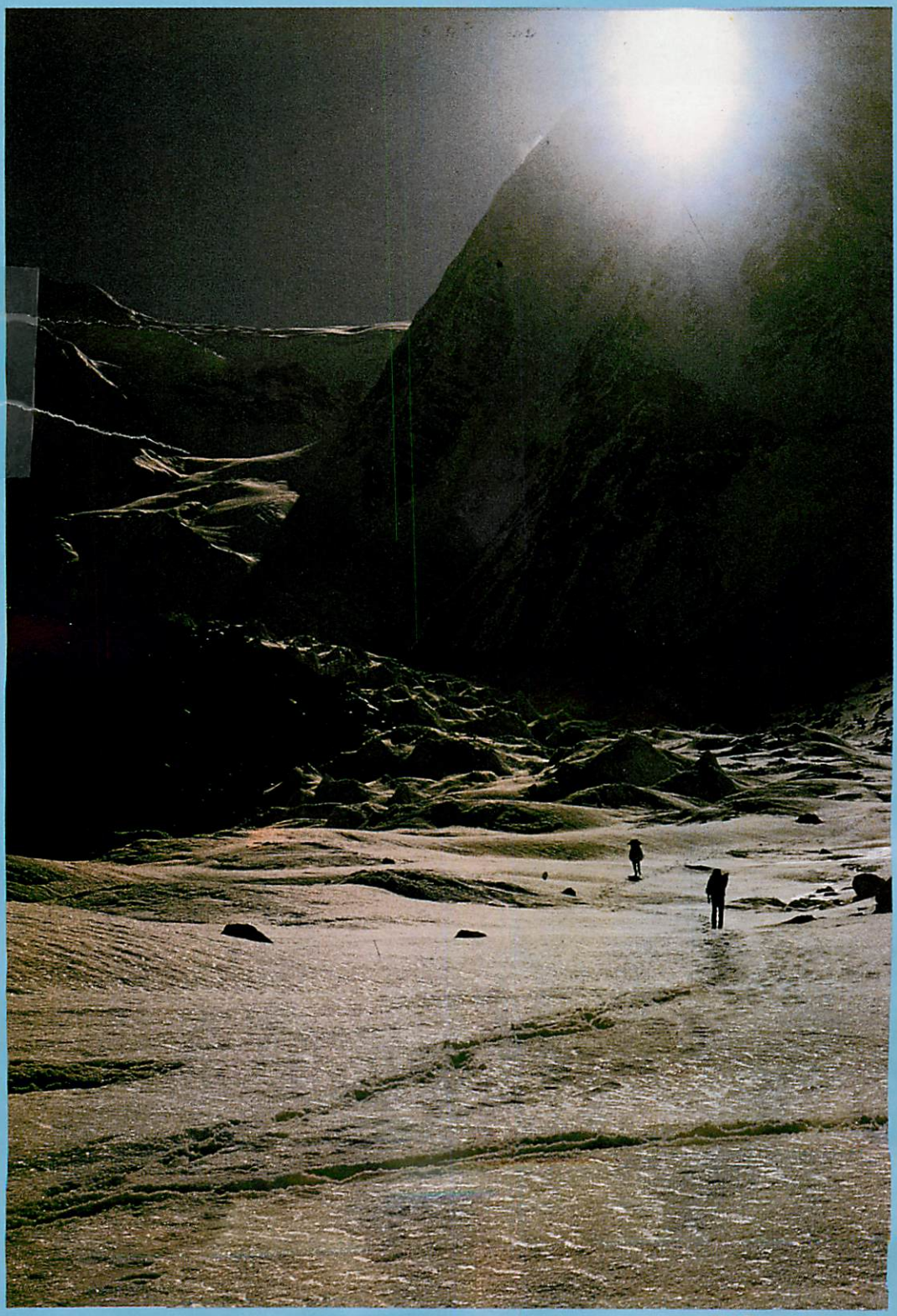
カラコルム　ハイウェイの露店

Gandar Chhish



Base Camp

Shumari Kunyang Chhish



B.C.～Camp 1

C 2～C 3

チベット方面の山々

頂　で

CONGRATULATIONS FOR
SUCCESS

シュマリクンヤンチッシュ

1979年度北海道大学山岳部山の会
カラコルム遠征隊

目　次

あいさつ…… 5
まえがき…… 6
北大山岳部の海外登山…… 7
遠征組織…… 9
参考地図……10
出発するまで……12
記録編
・遠征隊日程……17
・行動表……18
・ラワルピンディにて……19
・インダスバレーからナガールへ…21
・ポータートラブル……25
・ナガールの裏山……30
・キャラバン……32
・主稜に至るまで……37
・登頂……41
・ベースキャンプ始末記……44
・帰り道……47
・おわりに……50
資料編
・装備……55
・食糧……62
・医療……68
・高所馴応……74
・高所医学について……78
・カラコルムの氷河の氷をさぐる…87
・会計……91
紀行編
・北帰行……99
・ザンスカール行……103
・ダラムサラからグルラマンダータへ
……107
・ネパールへ……112
・チョオユー偵察行……116
御協力者名簿……120
英文報告……122
あとがき……124
編集後記……125

あ い さ つ

北大山の会会長　朝比奈　英　三

北海道大学山岳部とそのＯＢの会である北大山の会は，もともと非常に幅の広い山登りをする仲間であり，往時の北海道に特徴的であった沢歩きと頂を連ねる漂泊の山旅から，海外遠征を含む岩と雪氷への尖鋭的登攀まで各種の様式の登山をあわせ持つことをその特色として現在に至っている。

この中にあって，すでに戦前から育まれていたヒマラヤ遠征の夢は，昭和37年５月のチャムラン初登頂によって初めて現実のものとなった。しかしそれ以後，ナラカンカール遠征を始めとする多くの試みはあったが，われわれはヒマラヤの未踏の高峰に至ることなく十数年が流れた。昭和51年北大山岳部創立50周年にあたり，記念事業の一つとして冬期八千米峰登山計画がとり上げられたが，その実現のための最初の試みは失敗に終った。このような挫折にもかかわらず，ヒマラヤを目指す部員の熱意は次々と受け継がれ，昭和53年山岳部現役隊によってカラコルムのドレフェカル（6447M）初登頂がもたらされた。そしてその翌年，現役ＯＢ合同の越前谷隊によってカラコルムのシュマリクンヤンチッシュ（7108M）登頂が成功したのである。本報告書にみられるように，この登山は，単に本峰の初登頂に終るものではなく，その後につづくより高いヒマラヤの山山の厳冬期の登頂を目指す着実なステップを踏みだしたものとして大きな意味をもっており，この歩みは現在も着着と進行している。

本書には，シュマリクンヤンチッシュ登頂が成功するまでの苦心の跡がよく記されており，また不充分ながら現地高所における医学及び雪氷学的調査・研究の報告も含まれている。その文章の中には若者にありがちな，気負いや，難解，稚拙のところもないわけではないが，その中に脈脈と流れる山へのひたむきな情熱をみとめて頂ければまことに幸である。

本書の発刊に当り，このたびの遠征に御協力，御援助を賜った多くの方方に対し，厚くお礼を申し上げたい。また今回のわれわれの遠征隊は，プマリチッシュを目指す北海道山岳連盟のカラコルム遠征隊（佐々木孝雄隊長）と，ラワルピンディ出発以来第３キャンプまで終始前後しながら行動し，この間いろいろな面で温かい数多くの御協力を得ることができた。ここに記して心から感謝する次第である。

（昭和56年４月記）

ま　え　が　き

北大山岳部部長　山　田　真　弓

この報告書は，わが北大山岳部の昭和54年カラコルム遠征隊（越前谷幸平隊長）が，カラコルム山塊のクンヤン・チッシュ北峰（7108m）に無事登頂した時のことを記述したものである。

北大山岳部は，この前年の昭和53年に，石村明也君を隊長とするカラコルム遠征隊を派遣し，幸いにも天候その他に恵まれ，標高6447mの独立峰ドレフェカルに無事登頂することができた。この山はカラコルム山塊の中では特に高峰といえるほどのものではなかったが，メンバーのほとんどが現役の若い部員たちであり，種々の点でわが山岳部のレベルアップにきわめて意義の深いものであったことは間違いない。ヒマラヤの8000m級の山の厳冬期での登頂を，という北大山岳部および同山の会の宿願に向っての，これは着実な第一のステップであったと考えられる。

そしてこの成功を足がかりとして，次の第二のステップとして計画されたのが，この報告書の内容となっている，カラコルム山塊の7000m級の未踏峰への挑戦であった。山岳部の若手ＯＢの越前谷幸平君を隊長にメンバーが編成され，前年の隊のメンバーであった石村，花井の両君も再び参加することとなり，万全の計画と準備がなされた。

5月14日，日本を出発，開通間もないカラコルム・ハイウェイを通ってキャラバンを続け，標高4300m付近にベースキャンプを設け，さらにキャンプを先に進めながら，遂に7月11日，メンバーの8人全員が，目ざすクンヤン・チッシュ北峰の初登頂に成功したのである。

天候その他多くの幸運に恵まれたことも事実ではあろうが，充分な準備のもとに，全員がそれぞれの持ち場で最善を尽した結果であると信じている。このたびの成功が，北大山岳部の将来の発展にとって貴重な経験となったであろうことは間違いないと思っている。

このたびの成功が，国内・国外の多くの方々の心からなる暖かい御援助によってはじめて成し遂げられたものであることは明らかである。ここに心より厚くお礼申し上げる次第である。

北大山岳部の海外登山

越前谷　幸　平

北海道大学山岳部が海外遠征について検討を始めたのは昭和11年頃のことであり，その頃から昭和15年頃まで続けられた山域研究の中にカラコラムのいくつかの山群を見出すことができる。その後，遭難や戦争により一時中断されたものの戦後いちはやく再建された山岳部の以前にも増した活動と，マナスル登山偵察隊への隊員派遣などを契機に部内の海外遠征への志気も昂まってきていた。そして昭和30年には北大山岳部ヒマラヤ委員会が設立され，具体的な海外遠征計画の検討の時期を迎えた。翌年には，後に南極で大きな功績を残すに至った極地研究会が発足し，遠征計画はガルワールヒマラヤヘライトエクスペディションを出す方向に向けて進められていた。更に昭和34年頃には，アラスカ遠征計画が建てられ，大人数遠征主義偏重であった当時の岳界とは趣を異にした北大独特の遠征隊のパターンの礎が築かれていった。

このようにして昭和37年，難産の末に遂にチャムランへの遠征隊が派遣された。登攀困難とされていた同峰の初登頂は，山岳部とそのＯＢ会である山の会に新たな意欲を呼び起す結果をもたらした。このチャムラン遠征隊により取得されたナラカンカール峰の登山許可に基づき，翌年同峰のポストモンスーン期の登頂を目指し再び遠征隊が出発していった。しかしナラカンカールは地図の7000ｍ峰ではなく目標としていた峰は中国領内にあり中国国境警備隊に国境侵犯を指摘され，未知なる地を巡り遠いキャラバンを続けて山麓に到達したこの隊は，目指す山を目前にして引き返さざるを得なかった。その結果，この山はグルラマンダータとして広く人々に知られるようになったが現在残された未踏の最高峰として未だに我々の心を惹きつけて離さない。続いて翌39年には，ダウラギリⅣ峰遠征計画が立案され実行段階に入ったが，ネパール政府の登山禁止令により一時延期とされた。

昭和40年代を迎えた北大山岳部は次の目標を求めて模索を続けたが，昭和43年カラコルムのバツーラ１峰を次の目標として定め，翌年，偵察隊をパキスタンへ派遣した。しかしこの山はパキスタン政府より許可が得られず，登山再開となったネパールに転じた偵察隊は，ダウラギリ山群の登山を申請し，交渉の末ダウラギリⅤ峰の登山許可を得て帰国した。だが山岳部内の事情のためこの遠征計画は中止を余儀なくされ，また比の頃学内では大学闘争が吹き荒れ，現役部員は二重の苦を負って長い時を過した。更に昭和40年代初期に相次いで起った遭難事故もまた，大きな影響を与え部活動はかつてない昏迷の渦中にあった。

昭和47年夏，この年の夏山山行計画のひとつとして現役部員のみによるアラスカ遠征計画が立

案され実行された。この計画は昏迷の中で見失いないがちな自らの位置づけを未知の地で再確認するために行なわれたが，更に次の7000m峰を狙うための訓練の意味も含めて計画されたものであった。これより先に部内の遠征計画検討委員会に提出された若手ＯＢ，現役による海外遠征計画が，検討の段階で実力にそぐわない等の理由で最終的に否とされ，海外登山を目指す現役に，部内で遠征計画の同意を得ることが，如何に困難であるかを印象付けたという過程があった。

アラスカマッキンレー遠征成功の翌年には山岳部内に継続して海外登山を研究していく現役部員中心の集まりである海外登山研究会が結成された。この会は部内に語りつがれた厳冬期8000m峰登頂計画に向って基礎的な研究を進め，最終目標に至る道を求めた。おりしも部は創立50周年を迎え，部内に50周年記念事業の一環として厳冬期ヒマラヤ登頂計画を行おうという声がたかまり，厳冬期アンナプルナ登頂計画が立案され，その準備山行として7000mの未踏峰ラプサンカルボの厳冬期登頂を試みることが決定された。だがネパール政府との度重なる折衝にも拘らず，許可は取得されず，隊は急拠その目標を変え,新たに解禁となったガルワールヒマラヤへ転進した。

1974年厳冬期7,000m峰登頂を目指し，トリスル峰に向った４名よりなる登山隊は，税関トラブルによる計画の遅延，異常降雪によるポーターストライキ等のため，山麓に達しただけで計画を中止せざるを得なかった。この隊の敗退は気運の盛り上っていた部内に，厳冬期8000m峰への道が遠く困難なものであることを知らしめる結果となり,新たな遠征計画の企ては一時停頓した。海外登山研究会は75年以降のこの状況を越えるためにライトエクスペディションによるカラコラムの7000m級未踏峰の登頂計画を立て，山域の研究を行っていた。しかし徒らに時は流れ，未踏峰はネパールヒマラヤのみならず，カラコラム山域からも着実に姿を消していった。

もはや待つことの苦渋に耐えかねた現役部員は自分達の手で確実に落とせる目標を選び，78年６月日本を発った。彼等の選んだ山は，カラコラム，Ｋ６の近くに聳える6,447mの未踏峰，ドレフェカルであった。８月17日，隊長以下７名の同時登頂が成されこの計画は成功した。既にこの遠征隊の出発当時には海外登山研究会の有志により次の7000m峰の計画が机上に載せられつつあった。78年度隊に続き，翌年7,000m級の未踏峰と更にその二年後に春秋季の8000m峰を登るプランがその過程で検討された。これと期を一にして現役と若手ＯＢの海外遠征計画機関的な存在であった海外登山研究会は同じ名称乍ら，広く部内の海外での登山を目指す人々の間で情報の収集と提供を行う組織となって新生した。

遠 征 組 織

隊の名称　1979年度　北海道大学山岳部山の会
　　カラコルム遠征隊
　　Karakorum Expedition of AACH 1979

主　　催　北海道大学山岳部　有志
　　北海道大学山の会　有志

目　　的　パキスタン，カラコルム
　　クンヤンチッシュ北峰（7108m）の初登頂

事務局　〈札　幌〉　小　林　　年
　　平　岡　申　行
　　〈東　京〉　竹　田　英　世

学術調査担当　〈名古屋〉　池　上　宏　一

隊の構成　（1979年5月現在）

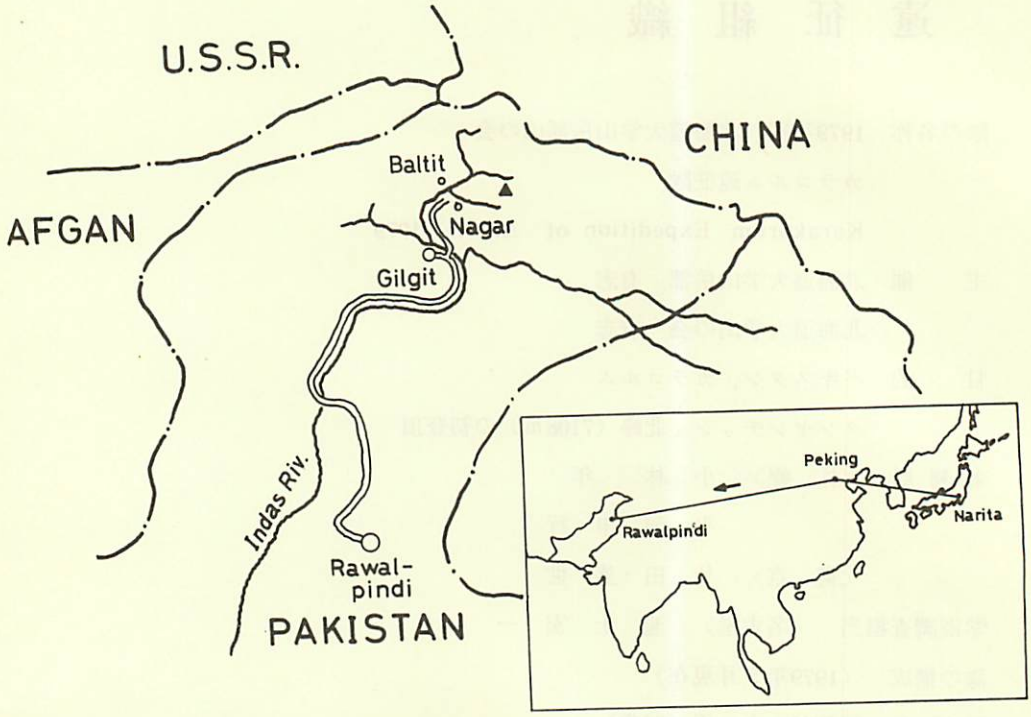
隊　　長　越前谷　幸　平（32歳）

副隊長　下　沢　英　二（31歳）　医　　療

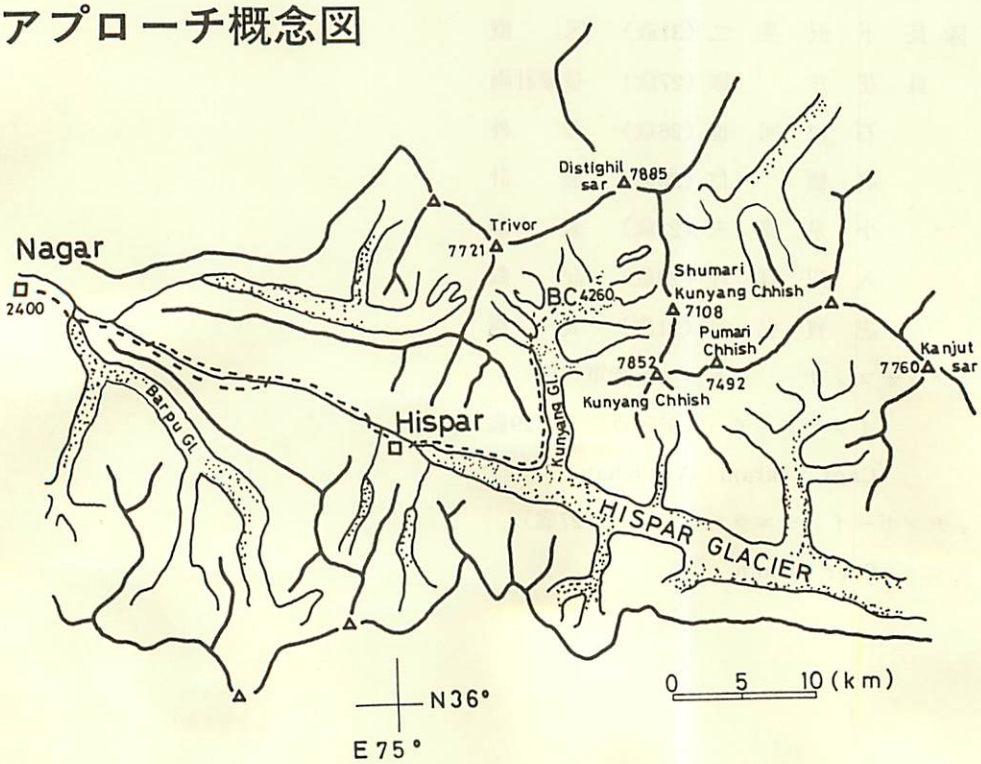
隊　　員　花　井　　修（27歳）　登攀計画
　　石　村　明　也（26歳）　渉　　外
　　高　橋　　仁（26歳）　会　　計
　　小　泉　章　夫（23歳）　装　　備
　　入　川　真　理（23歳）　記　　録
　　志　賀　弘　行（21歳）　食　　糧

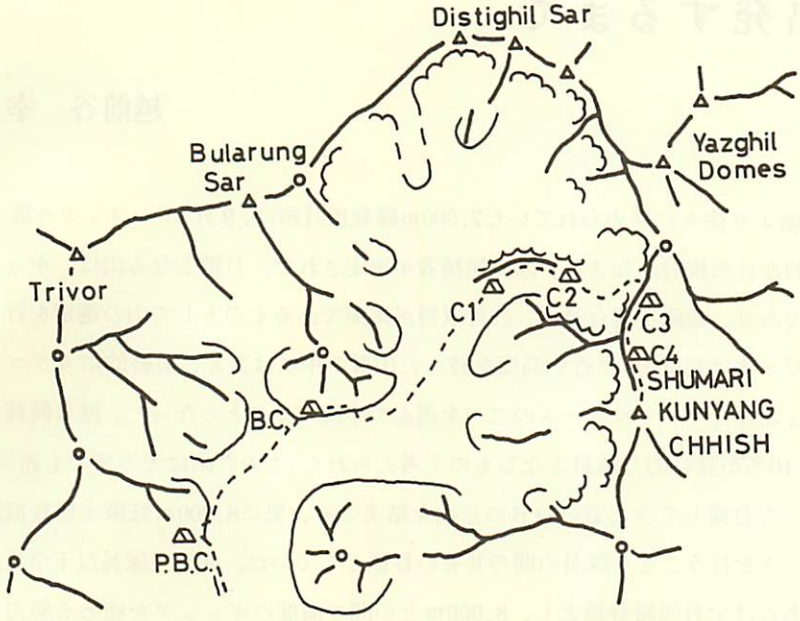
リエゾンオフィサー　パキスタン陸軍大尉
　　イクラム・アーメド・カーン（29歳）
　　Capt. Ikram A. Khan

キッチンボーイ　シエラ・ハーン　（27歳）
　　Sher Khan

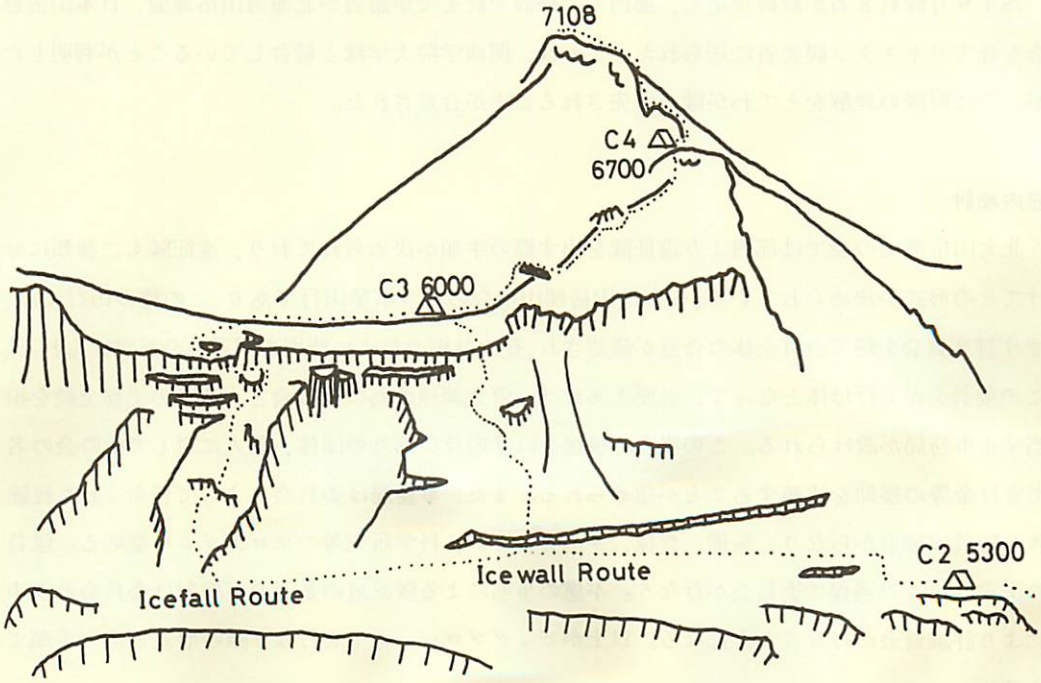

U.S.S.R.
CHINA
AFGAN
Baltit
Nagar
Gilgit
Indas Riv.
Rawal-
pindi
PAKISTAN
Peking
Narita
Rawalpindi

アプローチ概念図


Nagar
2400
Distighil sar 7885
Trivor
7721
B.C 4260
Shumari Kunyang Chhish
7108
Pumari Chhish
7492
7852
Kunyang Chhish
Kanjut sar
7760
Barpu Gl.
Hispar
Kunyang Gl.
HISPAR GLACIER
N36°
E75°
0 5 10 (km)



登攀路図



上部ルートスケッチ

出発するまで

越前谷　幸　平

78年5月頃より徐々に進められていた7,000m峰登頂計画は，9月，ドレフェカル隊々員の帰国と共に具体的な計画検討がなされ，隊員候補者が決定された。目標となる山は，キャラバンが短く，未踏峰であり，他隊と競合せず，許可取得が確実であるものとして山の選定を行った。しかし該当するピークは7,500mに近い高度を持った山群の中にはなく，最終的にカラコルムのクンヤンチッシュ北峰とヤズギルドームの二つを選んで申請することとなった。隊員候補者は10名おり，8名から10名が最終的な隊員となるものと考えられた。この計画は先の章でも述べたように，70年代に入って台頭してきた若いＯＢの意欲を結実させ，更に8,000m峰厳冬期登頂計画に向けたトレーニングを行うことを隊員の間の共有の目標としていた。従って隊長以下全員が必ず登頂し，可能であれば全員同時登頂とし，8,000mとの間の高度のギャップを埋める努力をするものとした。全員が完全な高所馴応をし，7,000m峰を登る技術と経験を得ることで高所登山に対するCapacityを高めるというのがその本意であった。

78年9月隊員8名が最終決定し，部内での検討を終えて申請書が北海道山岳連盟，日本山岳協会を経てパキスタン観光省に送られた。この後，関西学院大学隊と競合していることが判明したが，幸に同隊の理解をえてわが隊が優先されることが合意された。

部内検討

北大山岳部山の会では部内より遠征隊を出す際の手順が決められており，遠征隊も二種類に分けてその形式が決められている。一つは山岳部山の会の行う事業山行であり，この種の山行では，まず評議員会を経て会員全体の合意が確認され，登山計画のために特別専門委員会が設けられる。この委員会が実行母体となって，必要とあれば，資金調達の為の後援会と，遠征の実務全般を担当する事務局が設けられる。この場合，後援会は部内及び部外の団体，個人に対して山の会の名で寄付金等の援助を依頼することが認められる。また，事務局は委員会によって任命された経験者と隊員候補者からなり，装備，食糧，タクティクス，科学研究等のプログラムを進める。隊員の決定は，この過程で委員会が行なう。不慮の事態による隊派遣の是非の再検討は委員会の答申により評議員会が行なうことになる。以上がビッグプロジェクトを行なう際の形式とその手順である。

これに対して現役部員や山の会の有志による個人的遠征については別の手順がとられる。先ず

山へ登りたいと考えている有志により事務局が形成され，内部で計画を煮つめた上で，理事会を介して山の会の専門委員会のひとつである海外遠征委員会に計画が提出される。経験者で構成された，この委員会は，提出された計画について検討を行ない，その上で対外的に登山申請を出してよいかを決定する。従って過去に提出された計画の中には登山対象のある国への申請期限内に検討が終了しないこともあった。計画内容の検討は登攀に伴う危険と資金調達方法の詳細についてなされるが，隊員の承認権も委員会にあり，特に現役部員については親権者の念書が隊に要求される場合もある。資金調達については有志の隊であるので，部内に遠征隊の名で奉賀帳を廻し，賛同者から餞別を集める方法がとられることが多い。部外に対しては個人的なコネクションの範囲で，資金や現物の寄付を依頼することが認められている。また，もし遠征中に事故が起れば小規模な事務局では対処しきれない場合が予想されるため，賛同者の中より遠征経験者等を中心とした非常時の拡大事務局を設定しておくことが求められている。この為，事故処理の実務は隊と本来の事務局の責任であるが，山岳保険の受領者は山の会会長とされる。以上のような手続きを踏んで出たライトエクスペディションの隊によって，もたらされた種々の情報，データは海外登山研究会の中に蓄積され，次の隊のための資料として提供される。

今回のわれわれの計画は，山の会有志と現役部員の合同で行なう個人的遠征として山の会海外遠征委員会に諮問された。この委員会では主に資金面と入山経路による成功の可能性についての検討がなされた。資金に関しては一部有志の間に奉賀帳を廻して援助を仰ぐことが認められたが，援助にあまり頼らず隊員の個人負担金を主として資金計画を進め，不足する場合には，先に話が進められていた海外遠征基金より借入することで充足させるよう指示がなされた。また入山経路については希望通りカラコルムハイウェイを経由してヒスパー氷河に入ることが許可された場合，あるいはヌシクラ経由で入ることが許可された場合以外は，登山許可が取得された段階で計画総体について再検討をすることが条件づけられた。

入山経路を巡って

この時点ではパキスタン政府はカラコルムハイウェイへの外国人の通行を許可しておらず，79年春より許可する可能性が高いと言明しているだけであった。従ってもしカラコルムハイウェイが通行できなかった場合，入山経路はアスコーレからビアフォ氷河を越えヒスパー氷河に再び下りた後クンヤン氷河に入るか，あるいはヌシクラを越えてヒスパー氷河へ下るかどちらかを選ばなければならず，いずれにしろ輸送は困難なものとなりそれに要する日数も大幅に増え，経済的負担も大きいことが明らかであった。ビアフォ氷河経由であれば日数が非常に長くなりポーター代が高くなることが心配され，ヌシクラ越えの場合は特にポーターを連れて，その峠を越えることの危険と困難が増すことが第一の問題であった。従って二つの経路より入山した場合の計画に

ついても同質の検討が平行して行なわれていた。

しかし1月6日実際に取得されたクンヤンチッシュ北峰の登山許可は入山経路を希望通りにすると通達してきており,入山路を巡る数多くの問題に終止符が打たれた。これにより装備,食糧,資金計画の最終的な練り直しが行なわれ，準備は最終段階に入り3月を迎えた。

そして出発

3月27日夜半，装備の梱包が始められようとする矢先に，全く思いがけない凶報がもたらされた。知床山系に入山中の現役パーティが遭難，1名死亡，3名は自力行動不能で山中で救助を待っているというのであった。在札隊員4名は翌朝未明ヘリコプターで現場へ急行，同時に捜索隊が飛行機と車を乗りついで羅臼へと向った。しかし第一報入信の9時間後には現場に到着したものの，3名が不帰の人となり自力で下山中の1名を救出したにすぎなかった。

この時以来，隊は全ての活動を停止した。葬儀も終わり，一段落した頃，山岳部長より現役部員を遠征に参加させるのは望ましくない旨の申し入れがあった。それは出発を1カ月後にひかえ全ての計画を現役4名を加えて進めてきた隊にとっては計画の中止を意味していた。北大山の会では1962年のチャムラン隊以来，数々の遠征計画が試みられ，実際に隊を派遣するに至った計画もあったが，登頂が行なわれた隊は72年マッキンレー，78年ドレフェカルの二隊のみであった。全く何かの因縁でもあるかのように不幸が巡って来て，計画は全うされなかった。思わずその事が頭をかすめ，若い部員の亡くなったことと相俟って，暗澹とした気持ちで隊の行く道を思いやる日が続いた。2週間が無為のままに過ぎ現役隊員は,連日連夜,遭難反省会に忙殺されていた。4月14日現役部員の幹事会は遠征計画に対する最終的な意見をまとめ，隊と山岳部長にその考えを明示した。すなわち,今後の山岳部の発展のためにも今回の隊を派遣することには意義があり，既定の方針通り現役部員を参加させるよう要請するという旨であった。敢えていえば，これは当然のことながら，極めて辛い判断であったろうと思われた。この時点で隊は現役に，ひとつの重い責を負った。それは，8,000m峰の為の登頂隊員の養成だけでなく，現役部員の求めている高い質の山行の維持を保証するような部員の創出の一翼を隊が担うということである。

こうして遂に山岳部長の承認も得ることができ，隊の活動が再開され，最終的な出発準備が整ったのは札幌を離れる僅か1週間前のことであった。出発前の時を過ごす為に隊員は各々の故郷へ向けて離札し，隊荷を全て送り出した事務局はガランとして静まり返っていた。チャムラン以降，3度目の7,000m峰遠征隊の出発であった。

記　録　編

遠征隊日程

１９７９年

5月7日　石村，陸路ラワルピンディ着

5月14日　本隊，空路ラワルピンディ着

5月21日　下沢，空路ラワルピンディ着

5月26日　隊荷，トラックでラワルピンディ発

5月27日　本隊，ラワルピンディ発

5月28日　全隊員，隊荷，ギルギット着

5月30日　ナガール着

6月4日　キャラバン開始

6月9日　仮ベースキャンプをブルンパリ（4,160m）に設置

6月10日　ＢＣへの荷上げ開始

6月17日　ＢＣ（4,260m）建設

6月23日　Ｃ１（4,900m）建設

7月1日　Ｃ２（5,300m）建設

7月6日　Ｃ３（6,000m）建設

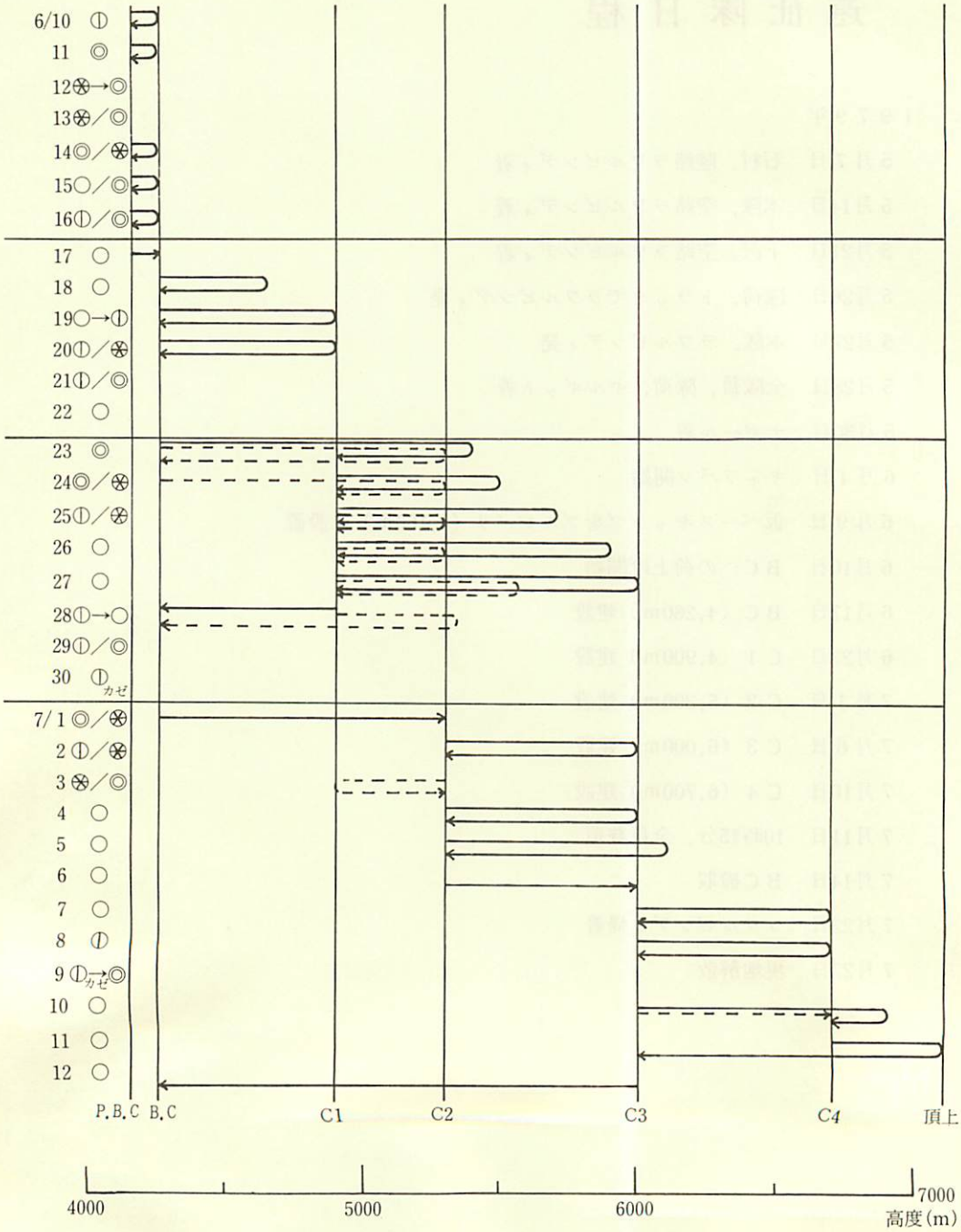
7月10日　Ｃ４（6,700m）建設

7月11日　10時15分，全員登頂

7月14日　ＢＣ撤収

7月22日　ラワルピンディ帰着

7月27日　現地解散



行動表 (6／24～27は2班に分かれて荷上げとルート工作を交互に行なった)

ラワルピンディにて

越前谷　幸　平

日本を発てば遠征の八割は成功したようなものだ，とは人々の口に膾炙している言葉であるが，それは大きな遠征隊についていえることであって，我々のような小規模な遠征隊の場合には必ずしも当てはまらない。ひっそりと千歳を発ち，東京でもう暫くは味わえない痛飲の夜を過した翌15日朝，我々はいつもの早発ちの日の朝の仏頂面で飛行機に乗込んだ。慣れというのか図々しいというのか，遠征隊の旅立ちという晴れがましい気持ちは微塵もない。北アルプスへ行く時だって同じような面子が横に座っていて同じような顔をしているだけだ。いつもより出るまでのゴタゴタが多くて長かったけれども，登って来なきゃならないのも，おそらく面白いルートが出てくれば奪い合いになることが目に見えているのも同じだ。ただいつもより狭っ苦しくて危っかしげな空飛ぶ箱に乗っていなければならない時間が長いだけだ。問題は結局いつも同じ所にある。検討された計画がいかに完璧にこなされるかだ。7,000mへの全員同時登頂という事実だけがそれを満足させる。茫洋として拡がる黄昏のタクラマカンを過ぎカラコルムにさしかかるころもう陽はとっぷり暮れていた。やがて眼下に灯が点在し始めたかと思うと，飛行機はすぐに車輪を下した。

空港のロビーの外にひしめく客引達のなかに，一年前のドレフェカル隊の隊長を務め，そのままネパールで越年した石村の顔があった。

5月15日

確かにここは北海道ではない。このただならぬ暑さは何だ。しかし聞こえてくる人々の声はトーキョーとも確かに少し違っているようだ。天井を走るヤモリの腹が奇妙な鮮やかさで目に映るここはどこだ。

眠気が醒めれば意識回復直後の記憶喪失の患者の様に貪欲に身体と目と心とを動かす日々の始まりだ。日本大使館へ，観光省へ，銀行へ，保険屋へ，八百屋にスーパーに郵便局へ。あー，こりゃ少し違う。まるで商社員か，役所のメッセンジャーになってしまったみたいだ。礼状を書いて書いて書きまくって，汗をダラダラ流して，カードゲームの「大貧民」に浮身をやつせば異国の最初の夜は更けていく。

16日，17日

仕事，仕事，仕事，は続く。

18日

金曜日はお休み。休みはどこでも同じことだ。疲れた時が休みの時，神が6日間仕事をして疲れ，我々が4日間稜線行動をして疲れ，そして休む。暑さに疲れ湖で釣りをして戦果は3匹。遊泳禁止の立て札の傍の水は抜き手を切る腕に心地よく冷たい。夕方からはサッカー。相手がエスキモー青年団であろうと，ラワルピンディ青年団であろうと同じこと，ファイトあるのみ。しかしワンゴールもとれずに夕暮れの中をトボトボと帰る我が北海道開拓青年団の足取りはそろそろ始った「新参者の下痢」のためか心なしか重い。段ボール箱4つの薬屋さんもそろそろ店開きである。

19日，20日，21日

官吏のいうこともまた，日本であろうとどこであろうと同じことだ。「その件についてはあちらの係で。あっそれからこんな書類が必要です。」連日連夜の大貧民の成績もいつも同じ。大貧民が俄然大富豪になり，大富豪が突然大貧民になる。盛者必衰の理，かくの如し。日本へ出す450枚の絵葉書の束はこの3日間でようやく机の上から消えた。道路交通情報は，ここではカーラジオの中からではなく遠くから旅して来た人々の口によりもたらされる。カラコルムハイウエイはまだ塞ったままだ。21日夜，隣り町からでも出てきたようにして，最後のヒゲ面がニッコリ戸口に顔を出し，またまた，大貧民の勝敗は混乱の度を深める。

集った隊荷は荷分けされ，少しづつ壁際の段ボールの山は高くなり終いに全てが箱の中におさまって我々を見下している。うまいものとまずいものと，何処に何が入っているのかは，食糧係のメモ帳しか分らない。無闇に開いたって無駄骨を折るだけだ。よほどクジ運でもよくなければ，真空乾燥の果物や，北大式特上雑炊の素にはおめにかかれない。カラコルムハイウエイは27日頃開通するという。インダスの狭間の鉄門が開いてゆき，遠くに白い憧れが，我々を待っているのが見える。

26日

明け方の涼し気な鳥の声を突き破って，それは爆音と伴にやってきた。あでやかな，はなやかな，いやケバケバしい，とどのつまりは何とも表現の仕様のない塗装をしたパキスタン流，夜明けの一番星は我々の全財産を積んで，目の前から去って行く。そして我が輸送隊長は，荷台のはめ板の上に首だけを出して，トラックに運命と振動とを共にして行った。午後は連絡将校イクラムに引っぱり出されてＴＶ出演。アナウンサーが男で，しかも外国人とあっては，あまり緊張することもない。故郷の札幌テレビの，かわいいアナウンサーにインタビューされる時の方が余程コチコチになってしまう。とにかくも，こうしてラワルピンディ最後の日が過ぎた。

インダスバレーからナガールへ

石村明也

5月26日

まだ薄暗い夜明けには，例に似合わず，もうトラックがホテルにやってきた。寝呆け眼で庭に出れば，道岳連・北大共同で雇ったそのトラックは，インド亜大陸ではどこでも見かけるギンギンのサイケデリックなやつで，両隊の荷物を乗せ終わると，荷台に添乗する南さん（道岳連隊）と私の生活空間はわずかなものになってしまった。真夏だけれども朝は涼やかで，もやに霞むラワルピンディの大気の中を，皆の見送りを受けて私達は出発した。今年から外国人も通れるようになったカラコルム・ハイウェイでは，小さな崖崩れはしょっちゅうの様なので，大きなものが起これば困ったことになるのだが，飛行機だってたまには墜落するし，一年近くもインド亜大陸で暮らし「インシャラー」と「バクシーン」の理論に毒されつつある私には，結局どうでもいいことのように思われた。

トラックはアジア・ハイウェイを西に向けて走り，やがて進路を北に向けて丘陵地帯に入っていった。折りからの雷雨で斜面に広がる畑やたんぼもけむって見え，後方に過ぎゆく民家や人々も私には静物画のように映った。揺れ過ぎる程揺れる荷台の上にも飽きて，前の座席に割り込み，迫り来る景色を眺めれば，子供っぽい単純な好奇心が起って楽しかった。そのうち，トラックはなだらかな丘陵を2つ3つ越して立派な鉄橋を渡った。私にはこの意味がすぐには解らなかった。世界の屋根を刻み込み，ガンガと並び称されるインダスの流れも，どこにでもある平凡な河のように思われた。だが北上するにつれて，それは私の錯覚であったことがはっきりしてきた。

5月27日

前日迄の旅ボケも直りつつあった。私達はまだ昨日渡った鉄橋から数時間行った宿場町 BESHAM にいたからだ。次の村 KAMULLA の少し先で道路が寸断され，2～3日不通という情報を聞き，昨日はまだ陽の高いうちに KAMULLA よりも待機するのに都合のよい BESHAM 泊りにした。この町には電話があり，幸いにもラワルピンディの本隊と連絡が取れこちらの現況を説明することができた。あとはギルギットから来る対向車を待つだけとなり，暇にまかせてインダスの河原を散歩すれば，野生大麻の群落が強い陽差しを浴びて印象的であった。昼過ぎ北大隊全員を乗せたミニバスが早々に到着した。ギルギットから来たジープより通行可能の情報を得て，今朝道岳連本隊と共にラワルピンディを出発してきたという。半信半疑ながら寸断されている場所まで行ってみると，昨日来の不通の原因は崖崩れではなく，崖崩れの為狭くなった

道路を故障したトラックが塞いでいるせいであった。それならば情報のくい違いに説明がつく。1時間程待つうちに届けられたプロペラシャフトの取り換えも終わり，待機していたトラックは続々と出発しだした。カラコルム・ハイウェイは， BESHAM を過ぎてからだんだんと河底を離れ，いつしか河音も聞こえないくらい追いあげられてしまった。この辺りが道路舗装の最大の難所だったのだろうと思われた。時折り強く降り続ける雨のカーテン越しに険悪なゴルジュ帯を見下すと，なかなか迫力がある。いくつかの検問所を通過し，闇が周囲を包み込んだ頃，ランプがやけに明るい食堂で，大勢のトラック野郎達とあわただしい夕食を取った。そして，明日の朝にはギルギットに着くつもりで再び出発した。しばらく経つうちにミニバスとも離れ，私達はシュラフに入り浅い眠りについた。

5月28日

時刻は午前2時頃だった。トラックの急ブレーキで眼がさめた。寝呆けなまこで，「どうしたのかな。」と言い合っているうちに，方向転換したトラックは1㎞程戻り駐車した。崖崩れのおかげで，揺れることなく安眠できると思えば腹も立たなかった。

朝起きてみると，草木は極端に少なく，暖かみのない無機質の岩肌が幅のずいぶん広くなったインダスの流れを挟んで聳えたち，私達にもう砂漠気候に入ったことを教えてくれた。道路にはトラックの長い列ができており，一軒だけポツンとある食堂兼路上ホテルにとっては恵みの崖崩れというべきだった。ラワルピンディで入手した道路地図を眺めるまでもなく，もうすぐギルギットだと結論づけてやや安心しているうちに，昨晩は CHILAS に泊った北大隊のミニバスが，10時頃追い抜いていった。散歩ついでに崖崩れの場所へ行ってみると，我が隊員は，パキスタンの兵隊さん達の熱心な修復工事ぶりを見物していた。もう少しで通れるというので引き返し，トラックを崖崩れの手前まで移動させた。ダイナマイトがドドーンと岩石土砂をはねとばし，前日と同様に，我がミニバスは修復終了時刻をピタリと予測し，そして通過していった。

この辺の道路は最早中国人の手によるもので，見慣れてはいるがどことなく違う本家本元の漢字が，昔は三蔵法師も気の遠くなるような長い年月と労苦の末廻り道して通り抜けた西域やカラコルム山脈を，今はいともやすやすと越えてカラコルム山中の道端にペンキで無雑作に書かれている。そして，立派で快適な舗装道路からは，広大な国土に住む10億の中国人達のはじけ出るエネルギーが感じられた。

ギルギットの少し手前で運転手のおじさん達と食事を取った。ラワルピンディを出てからずっとおごってもらっていたので最後ぐらいはこちらがお代を払おうと少し押し問答したが結局押し切られた。食事代を全部もってもらったから言うわけではないが，この3人のトラック野郎達は，役人や軍人ではなく，客扱いに慣れた商人でもなく，日本でヒッチした時に出会うトラックの運転手と同じように親切なばかりの男達であった。

また雨が降り出し，さあ急ごうと出発した。樹々や民家が段々と多くなりギルギットはあと一息だった。私達はやはり疲れていたのであろう。早くトラックから解放されたいという思いが募り，最後の数時間はとても長く感じられた。そして，ミニバスは午後1時頃，トラックは午後4時頃，ギルギットの NAWO . REST . HOUSE に到着した。隊荷を降ろし支払いを終え，運転手のおじさん達に，親切にしてくれたお礼にと使い捨ての安物ライターを受け取ってもらったが，一番年上のおじさんが箱に印刷された赤紐をほどこうとしきりに引張るのを見て，思わず吹きだしてしまった。そのおじさんは髭面に照れ笑いを浮べ，そして，私の心にもこれでトラックの旅は終わったのだなという思いが広がっていった。

5月29日

リーダースタッフとイクラムは， DEPUTY . COMMISIONER と打ち合わせ，ジープの手配などを済ませ，出発は明朝ということになった。私達隊員は，野菜などの購入を兼ね，ギルギットの街をうろついた。なかなか大きな街で，端から端まで歩くと結構時間がかかる。郵便局，電報電話局,銀行,避暑客・外国人大名旅行者用の設備の整ったホテル,軍隊駐屯地などがあり，穀物を扱う店も多く，映画館まであり，トレッカーや一般旅行者が簡単にカラコルム・ハイウェイを利用できるようになれば，好むと好まざるにかかわらず増々繁栄していく街だと思う。

この日はあまり仕事もなく，のんびりとした一日となった。夜は LAST DINNER IN TOWN というわけで，街をすこしはずれたラカポシ・インまででかけて，夕食を取った。この街には似合わないほど豪華な造りで，その名の通り，ラカポシがよく見えるようにと配慮されたレストランからは，漆黒と化しつつある対岸の峰々を楽しむことができた。カラチから避暑にきていたパキスタン人の女の子や男の子とつかの間のお話しや遊びを共にし，なんだかちょっと得をしたような気分で自分達のホテルに帰った。

5月30日

本日は，人力に頼らないで楽に隊荷を運べる最後の行程だった。早朝よりやってきたジープは道岳連隊11台・北大隊4台で，ホテルの庭は人や隊荷でなかなかの混雑ぶりとなり，そのなかでイクラムはジープ料金の最後の交渉に当った。彼は駆け引きがうまく,かなり安くなったようだ。

09：40　出発。街の南端まで戻り，途中何回か一見して中国人とわかる国民服を着た人達と「ニーハオ。」と手を振りあいながら，カラコルム・ハイウェイを北上した。所々崖崩れで舗装道路が見えなくなっており，せっかく快適な舗装道路を建設したのにもったいないと思った。しかし,スケールの大きな岩肌の急斜面に防護処置をほどこすのは不可能に近いし,フンザを越え，そして国境を越えてカラコルム山脈北側の平原に到るまでの行程には，まだまだ難所が存在するだろう。修復維持の為にギルギットに残っていると思われる中国人達は，病院や学校などの設備の乏しいこの地域に家族共々生活している可能性は薄いし,中国側に道路建設の為に街が造られ，

家族もそこまではやってきているとしても，大変な仕事に違いないなあと，勝手に想像して勝手に同情した。

リーダーの乗ったジープは，CHALT に居るナガールのミールに会う為に寄り道をし，ほかのジープは先に進み，フンザの手前で橋を渡ってナガールへの枝道に入った。登降の激しいジープ専用道路となり，ほこりを浴びながらほうりだされないよう手を握りしめなければならなかった。

13：30～15：00には，樹々がおい繁り，畑には麦らしい作物が穂をなびかせているオアシス，いにしえのナガール王国に着いた。今はパキスタンに併合されているが，ミールの権威は保たれており，私達は，ミールと皇太子の好意で，両隊共豪壮な屋敷に設けられたバンガローに泊れることになった。

ポータートラブル

越前谷　幸　平

どの隊においてもポーターとのトラブルは多かれ少なかれ起っており，われわれの隊についても例にもれなかった。土着の人々であるポーターに対して，遠征隊は異質の文化圏から来た異民族であるから，相互の意志は極く限られた形でしか通じない。従って，ある意味ではトラブルは必発といえる。異民族の目で彼等に批判を加えることは確かに容易であるが，それでは問題の本質に迫ることは出来ない。そこでこの項では，まず遠征隊日誌よりナガールにおいてのポーター雇用問題の顚末を抜粋して，この地のポーターを巡る客観的な事実と隊の対応を書きつらねてみたい。

5月28日

AM10：00　ギルギット着

イクラム（連絡将校）は着くなり，Local Administration の Deputy Commissioner の所へ挨拶に行く。

PM5：00　Divisional Commissioner 来たる。

彼はナガール出身であるためか，われわれが既にラワルピンディで雇用したフンザのキッチンボーイを一緒に連れていくのは好ましくないという。更にポーターの希望者を連れて来ており，彼等は優秀でサーダーとして雇用するよう要請された。ナガールのミールに合った後でポーターの雇用を行いたいと退けた。

ジープは30日早朝に集まるとのことであったが，キッチンボーイの聞いてきた街の噂では，彼の声を掛けたジープ業者が車をそろえられるのが30日ということで他のジープならいつでも確保できるとのことであった。

5月30日

AM9：40　ギルギット発

ジープのチャージはイクラムが交渉して，750 Rs／day となった。ナガールのミールを Chalt に表敬訪問，彼の子息がわれわれと同行してナガールへ。

PM1：30　ナガール着

ミールの邸宅の庭にあるバンガローに泊めて貰うことになった。庭は広く，幅50m，長さ60mもあろうか。

周囲にウルタル，スパンティクが臨まれる。ウルタルは高く岩壁を配して頭上に聳え，スパン

ティク（土地の人は Gennish Chhish; Golden Throne の意，と呼んでいる）は鋭利なナイフの刃のようなバットレスをみせて鎮座している。早速わけの分らない人間達がゾロゾロ集まってきた。イクラムは張切ってミールの子息とポーター希望者を相手にして日当の交渉を始めた。向うの言い値は（往80＋食糧10，復20＋食糧10）で往路５日450Rs，復路2.5日75Rs，計525Rs　であり，こちらの言い値はレギュレーション（往30～40，復15）である。明朝ポーターの雇用をし，１日朝出発の予定である。

５月31日

ＡＭ７：00起床，気温６℃

昨夜の交渉でポーターがなかなか強硬であることを理由にイクラムは２つの日本隊とドイツ隊と共同で，Sub Divisional Majestrate にジープで人員を派遣して，Deputy Commisioner にこの事態を解決するためオフィサーを１人派遣してくれるよう依頼することを提案，昼頃より天気は崩れ全天雲。気圧は760mb　へと下った。ドイツ隊が訪れポーターの日当について話し合い。ＰＭ２：00より再びミールの子息を仲介にポーターとの交渉再開。言い値変わらず。

ＳＤＭのオフィサーがＰＭ５：00頃来たが彼はポーターの言い値が正しいことを主張するのみで，われわれの言い分を認めようとしない。ポーターと彼の言い分は昨年は60Rs　であったが今年は物価が上がっているので80Rs　であるといい，登山のレギュレーションは中央政府が地方のいい分を聞かずに決めたことで手直しされねばならぬと主張する。昨年の日本隊は120Rs　出した（実際には緊急事態で100Rs　出した隊があった）と嘘をいい出す始末で手に負えず。金が少ないとポーターは隊荷を盗んだりするから多く支払うべきだともいう。更にヒスパーから日本の２隊合わせて70名雇用し直せという。保険を盾に拒んだが，証書の届くのが遅れるから大丈夫だという。

これらの交渉をしていて全くこの人間と話をしていても埒があかぬことが解ったのでレギュレーションを信じてやってきた外国隊としては金をそれほど持っておらず，いずれにしろ全てを雇えば80Rs は払えないといって席をたった。

その後，ドイツ隊はＳＤＭの様子をみて交渉続行を断念し，ポーターのいい値通り払って出発することにした。

夜，道岳連隊の佐々木隊長とＬＯ（連絡将校）達と話し合い，結論としてＳＤＭにポーターと相談して決めさせるよう指示したＤＣのところへ行って指示を改めてもらうべくギルギットへ向かうことにした。もしＤＣで話が通じなければこの地域を統治している　General（知事職をしている）と話をしようとイクラムが提案。そろそろ先を急ぎたいと考えている道岳連の方にも同意してもらってイクラム，私，道岳連隊の小笠原氏の３人でギルギットへ向かうことにした。

6月1日

6：00起床，全天厚い雲。雲底3200m。今にも降らんばかり。7：00発，ミールの子息が見送ってくれる。ミールも彼も発言力はあるが，こういう問題に関しては発言しにくいというのが現状であろうと思う。11：00ギルギット着，ＤＣ不在にて待つ。この間にイクラムはＳＰ（Superintendent Police）の所へ行き窮状を訴え，ＳＰのギルギットの長官が Resident Commissioner に連絡し，すぐに他の街へ遊びに出かけていたＤＣを呼び戻してくれることになった。ＤＣが戻るまでの間にＳＰは Chalt の Subdivision のＳＰのオフィサーを派遣することに決定。ＤＣは戻ると，まずレギュレーション通りに呈示し，それから値を相談して上げていくよう指示したと弁明した。ＳＰのオフィサーはナガールの治安を維持するため警官隊を派遣するよう指示。ＰＭ6：20ギルギット発。

Alliabad で夜食をとりＡＭ0：30ナガールへ。

6月2日 曇り。

ＡＭ10：00よりＳＤＭのところで交渉が再開されるはずであったが病気を理由に出て来ず。ＳＰはどうしても出てくるよう指示。ＳＤＭのオフィスは警官隊により包囲された。10：30より交渉再開。

ＳＤＭはＤＣの指示通りのことをしたと主張。イクラム，ナザール（道岳連隊のＬＤ）は強固にレギュレーションを守るよう主張。ナザールが激昂して殴りかかる一幕もあった。

最終的に（往：50＋食10）（復：15＋食10Rs）で決定し，往路はこの他に extra の食費を5 Rs 足すことで話がついた。

決定後，あまり安くなったのでポーター達が申し合わせてボイコットを決めたがミールの子息が仲介をして彼のところへ一度名簿を集め，それを雇用することにした。キッチンボーイの話では60Rsでも行きたい者は沢山いるのだが村八分になるのを恐れて出て来ないのだという。

6月3日 快晴，766 mb.

小泉，入川，志賀，ヒスパー氷河を見るため裏山に登り3,600mの雪線に達し昼帰着す。報に曰く「ダルタナスまでアブレーションバレーつづく。雪なく問題なし」と。高橋，バルプ氷河偵察，昼帰着。下沢，越前谷バルプ部落へ散歩。花井風邪のため休養。

ポーターの雇用条件最終的に決定。ＳＰ，ＬＯ，ＳＤＭ，ポーター代表，ミールの子息の間で合意が成された。昨年の決定分の他に1.5 Rs のアタ代を支給してほしいという要望があり，これを認めた。ＰＭ4：00より雇用。300人位集まった中より道岳連隊と合わせ164人を選び，更に booking を行なった。

6月4日 晴，16℃ 766 mb.

6：00起床。ポーターが集まり出し，騒々しくなってきた。ポーターは更にアタを買うのにか

かったジープ代総計58 Rs を要求→諾。

ポーターを番号順に庭の中に入れ座らせて待たせているうちに25kgの他に更に荷を背負いたくないと言いだした。イクラムがなだめたが駄目で全員引き上げてしまった。最後にまた彼等の言い値は往80復20，食糧は彼等持ちということに戻った。

ＰＭ２：00頃より再びポーターが集まり始めた。ナザールもイクラムも疲れ果て（あるいはあきれ果て）もう１日待てば，ポーターは近郊にある家へ帰ってしまい雇用できなくなる恐れが大きく，これは最後のチャンスだと思うと言ってきた。しばし熟考したが受け入れることにした。

ＰＭ４：00出発。途中落石で１名ポーターが負傷。ＡＭ２：00フラ着。

６月５日

ＡＭ９：00フラ発。ＰＭ５：45ヒスパー着。一部のポーターは途中泊。

６月６日

ポーターのうち10名解雇。すぐヒスパーのポーターを雇用して出発しようとしたが，ヒスパー側はポーター全員を入れ替え更にメイルランナーを１名雇用することを要求。結局，道岳連隊と共同でメイルランナーを１名雇用することで全て解決した。ＰＭ２：30発。

以降ベースキャンプに着くまでの間，同様のトラブルが延々と続き，われわれを辟易させた。

これらの事実をみて解るのが，ひとつにはパキスタン国内における中央政府と北部辺境地域の住民との間の政治的なギャップであり，更にこの住民の共同体意識の強さである。これらは非常に重要な背景に裏打ちされた問題点であり，今回の隊でのポーター雇用問題で敢えてわれわれが前面に立たなかったのはその背景をおもんばかってのことであった。

北部辺境地域に住む民族は，ヒンドスタン平原の北辺を占めるウッタルプラデシュに住み政治経済の中枢部を握っている人々とは明らかに異なっている。彼等はシルクロード史をひもとくまでもなく，古来からその地で幾多の興亡の中で融和し，あるいは頑なに孤立を守ってきた人々である。彼等の風貌をみても，ある者は果てしない戦いを繰り返してきた彼等の父祖を思わせて見るからに猛々しく，またある者たちはその純粋な遠い血の流れを思わせて驚くほど端整である。われわれの通ったナガールやフンザといった村も古くから歴史に登場しており，アレクサンダーの軍勢がこの地に足跡を印した証拠を彼の名の付いた「イスカンドラバード」という地名に認めることができる。フンザの岩山の上に立つ城塞は13世紀に建設されたものであるが，その頃はもとよりつい18世紀に至るまで，彼等はその貧困な土地生産性故に山を越えて略奪に出かけて生活を成り立たせていた。更にフンザとナガールの間の抗争もよく知られているようにイスラム教の中の宗派の違いとも相俟って，土地や富の分配を勢力均衡の上に成り立たせようとした結果であるといえる。

だが，このような独特の王国（土侯国）の維持は19世紀末になり英印軍のロシア牽制のための進駐に伴って崩壊し，一定の従属国家の形態を持つ統治領となった段階で新たな局面を迎えた。更に大戦後パキスタンが独立し統治領は全面的にパキスタンに組み込まれ，統治権は彼等の手から奪われた。しかしほぼ象徴に近い形で存在するミール（藩王）のもとで民族性を背景にした部族共同体意識は強く残っており，生活の規範はもっぱらこれによるところが大きい。未だに彼等にとってパキスタン中央政府は外来の侵略者としての意味を持っており，征服された民族のうっせきした心情を抱いていることに変わりはない。好むと好まざるとに拘らず彼等の上にかかってくる政権交代に伴う経済政策の混乱や，行政上の不安定な状態は，都市部の経済機構の影響を受けるようになってきた彼等には重大な生活問題としてはね返ってくる。こうした不満は常に内在しつつ増大していっているといえる。

政府の登山規則に定められた額でポーターを雇用しようとする中央派遣の連絡将校と，年30％におよぶといわれるインフレに苦しむ地方の実状を訴え，ポーターの言い値が正しいことを説得しようとする地方の行政事務官の言い争いの本質的な問題の根はこういうところにあると言えよう。アフガニスタンとインドにはさまれ，北方に中国とソ連を配するこの国は東西の世界戦略の狭間に生きている。内部では力による政権交代が行なわれ，懸案が次々と蓄積していくこの国としては，北方に住む一部の民族の問題は棚上げせずにはいられないのであろう。更には外国から遊山に訪る登山家たちの提起することも極めて小さな問題であるに違いない。われわれは無知故にレギュレーションを信じて行ったが，結果的には相手国内の実状の変化故にそれ以上の金額を支払った。われわれの懐が寒くなっただけで，それを引き起こした問題の本質には部外者であるが故に触れることができなかったのである。

ナガールの裏山

小泉章夫

僕らが4日釘づけになっていたミールの別邸は，ヒスパー川左岸の段丘の標高約2,400mの頂に建てられていた。広い芝生の庭に植えられたサクランボの花は，もう散ったあとだったが，村のあちこちで見られる黄色いバラは盛りであった。村人達は，その花を折って，帽子にさしたり耳にはさんだりして，それがよく似合っていた。もっとも僕らが見た村人は全て，男か子供達で，女は姿を現わさなかった。邸の北側はヒスパー川に落ち込む断崖で，便所となっている。そして南側には高度差1,000mのガレ場斜面の上縁の水平なスカイラインを仰ぐことができ，更に，奥にあるらしい雪山の頂が丸く顔を出していて眩しかった。それは奇妙な眺めであった。というのは，仰ぎ見ていると，昇る朝日のように，その白い輝きがガレ山の上にだんだんとせり上がってくるような錯覚にとらわれたからである。ナガール滞在中の一日，キャラバンルートの偵察を兼ねて，この裏山へ登ってみた。

邸から南側の薄暗い林の斜面を下って，突然明るく開けた沢沿いの道が村のメインストリートで，これを渡って今度は石積みの家がごちゃごちゃ立ち並んだ間の曲がりくねった急な小径を登っていく。大きな牛とすれ違ったほかは，人通りもなく静かな朝だが，両側の石垣の向こうからは，表で見かけることの少ない女性の声も聞こえてくる。ひどい急登に息切れがひどくなる頃，家並みもまばらになりポプラや果樹もきれてきて，残酷な程の日射しが照りつける裸地となってきた。坂道の両側の石垣は，まだしばらく続いているのだが，その積み方は一重のかなり危っかしいもので，一度，休もうとしてもたれかかったところ見事に崩れおちてしまった。これには少々うろたえ，追いたてられるようにまた上っていくと突然，道は途切れ，あとは乾いた草のまばらに生えた斜面となっていた。

高度計の針は3,000mを越え，息切れでピッチもあまり上がらない。志賀と入川がしきりに高度を気にするのは，彼らの最高到達点，北岳の標高に迫っているからなのだ。登り易いところを捜して落石に気をつかいながら東寄りの尾根状をからんでいくとやがてヒスパー川の荒れ乾いた峡谷が見えてきた。その遙か彼方に巨大な堰堤のようにみえるのは，もうヒスパー氷河の舌端なのだろう。更にその向こうにかぶさっている稜線は，クンヤンチッシュの南稜のようにみえた。バルプ氷河も，その2,400mという異常に低い舌端から白く新雪に覆われた源流まで見えている。青く水をたたえた池が，おやと思うような氷河のまん中にあるのを見て，ああ，氷河を見るのはこれが初めてなんだ，と気づいたりもする。足もと遙か下には，ナガールの緑が段丘上に，べた

りと広がり，その様は怠慢な生きものを思わせた。

北岳の標高もいつの間にか越え，富士山に近づいてきていた。そういえば，このザレ場の登りは夏の富士にも似ていると気がつくと，スカイラインの向こうには噴火口があるんじゃないかとか，ありもしないことを考えはじめる。3人が皆，横に離れて勝手なことを考えながら，自分のペースを守り，それが次第に近づいて一点に集まったところが斜面の上縁だった。

高度3,600mの丘の上で開けた視界は予想とは，かなり違っていた。目の前にはクレーターではなく緑の草原が広がり，その向こうは，ゲストハウスの丘からわずかに見えていた，なだらかな雪山の裾に連なっている。それに，このガレ山の上に住人がいたことも意外だったのだが，眼前の緑をみれば，放牧地であっても何の不思議もなく，向こうの方では羊の群が草を食んでいるし石積みの小舎も見えるし，そしてこのばらばらと集まってきた人達は羊飼いなのであった。

というわけで，初めは少し気抜けした感もあったのだが，それは決して悪い眺めではなく，今度は6月の大雪山のイメージを重ねたりしながら，石の上に下ろした腰が落ちついていくのだった。日はすでに高く昇って頭上に達しているのだが，さすがにこの高度では涼しいくらいで，さわさわ風がわたると汗が冷えていくのがわかる。いつもの習慣で，ポケットから相当いい加減な地図を取り出し，四囲の峰々の名前をみつけてみようとしたのだが，正面に重畳と連なるヒスパー山群の位置関係はさっぱり頭に入ってこなかった。その山なみの，ところどころ高く突き出した氷や岩の塊をさして，あれがルプガルサールでこっちがモムヒルサール，とか口に出してみても何やら実感できぬまま，いよいよ僕の遠近感は狂い始めたようだった。杖を手にした4人の羊飼いは，突然間抜けづらして現われた異人に興味をもったらしく，そのまま丘の端に僕らに背を向けて座り，時々こちらを見ている。彼らは互いに何やらぽつりぽつりしゃべりながら，やはり北方の山なみを見るともなく眺めているのだが，その山を見る眼が僕らと同質のものである筈がないことに気がつくと寂しい気もした。ここは確かに魅力的な眺望に囲まれたところだが，僕は決してここに住みつくことはできないだろうと意識する瞬間には彼らが眩しく見えるものである。物好きに登山にやってきた僕達によってこの村の経済が混乱することになるのかもしれない。そんな事を考えると多少のうしろめたさも覚えた。

キャラバン

入川真理

6月4日

午後4時！こんな時間に出発しようとは全く想像もしていなかった。本来なら，昼頃には出発できたはずだった。早朝から，ポーター達は三々五々ミールの別荘の中庭に集まってきた。そして各々に荷物を渡すところまでこぎつけ，誰もが，さあ，出発だ，と思っていたに違いない。ところが，それから一悶着起きた。ポーター達は皆クモの子を散らすようにいなくなってしまったのだ。まったくアッという間の出来事で，すっかり気が抜けてしまった。2時頃から，またポーターがボツボツと集まり出した。ついさっき部屋の中にしまい込んだ荷物を再び運びながらも，まだこれから出発しようなどとは夢にも思わなかった。けれど物事はなかなか思い通りには行かないもので，結局心の準備が出来ないまま，あたふたと個人装備をかついでポーターと一諸に歩き始めることとなった。こうして，とにもかくにもキャラバンは始まった。数百mの帯となって，ナガールを後にする道岳連と同時のキャラバン隊の上に，西に傾きかけた太陽の赤っぽい，気だるげな光がそそぎかける。こんなところで気負っても何にもならない。というのはポーターは太陽のそういう光に調子をあわせるかのように，すぐさまドッコイショ，と荷物をおいて一休みなのだ。当然こんなペースでは行程がはかどるわけがない。全キャラバン隊がバルブ氷河の舌端を横断し終わらないうちにもうまっ暗になってしまった。さっそくラテルネをつける。けれど明るいのは自分の周囲数メートルだけ。左手は数百mの断崖らしく，漆黒の闇の底から川の音がかすかに聞こえてくる。道が左にカーブする所でうしろをふりかえると，後続の隊員のラテルネの光が，暗闇の中に，鬼火のようにチロチロとゆれ動いている。そんな道の途中で崩壊地点に行きあたった。時おり落石の音が響きわたるが，回りは真暗で何も見えない。石に当たったらと思うとゾッとするが，運を天にまかせ，砂に足をとられながらのトラバース。みんな無事に通過した。しかしポーターが1人落石を受け手首を骨折するという事故がやはり起こった。後でそのことを聞き，冷汗の出る思いだった。そうこうするうち，知らぬ間に月が昇っていた。全く信じられない位明るい月，透明な月の光に導かれるようにして，今日の目的地フラに着く。最後尾の越さんが着いたのは，なんと5日の午前2時。約半数のポーターは途中の道端で泊。花井さんが監視役として，最後尾にとどまることになった。

6月5日

大変な一夜があけて5日の朝がきた。途中で泊ったポーターが早朝から続々とやってくる。そ

れまでの静寂は一べんに破られたちまちザワついた空気が流れ始める。キッチンボーイのシェラハンの作るありあわせの朝食を食べ，8時すぎに出発。9時半すぎヒスパー河の途渉地点に着いた。さすが氷河から流れてくる水だけあって痺れるような冷たさだ。流れもかなり急だ。水がこわいのかどうか知る由もないが，ポーターはしりごみしてなかなか渡ろうとしない。ザイルを張り，一旦渡り始めたら，あっという間だったのに。全員が渡り終えた時はもうお昼をだいぶ回っていた。とは言えここまではほんの小手調べ。これからが本番だった。この後ヒスパー部落までの長かったこと。ずっと川沿いの，まるで道とはいえないような道が続く。午後の強烈な日射がギラギラと照りつける中，緑のほとんどない乾ききった岩と砂の灰色の世界だ。歩いていくと，ところどころに転がっている家程の大石のかげに，ポーターや隊員が日射しをさけて，てんでに休んでいる。景色があまりに単調なのでいつまでも同じ所を歩いているような気がしてくる。まるで時間が止っているような錯覚にとらわれる。もう日の暮れる直前，下沢さん，イクラムと一緒にヒラヒラになって，夢遊病者の足どりでヒスパーにたどりついた。目の前にはヒスパー氷河の小山のような舌端が，夕闇の中に黒々と浮かび上がる。クンヤンチッシュの南稜が恐竜の背のようなゴツゴツしたシルエットで，遙かに見えている。縁も多くて疲れた体には心地よい。本来なら，ここはオアシス的なすごくいい所だと思うのだが，どうもゆっくり落ちつくことができない。というのも僕の頭の中には“ここは有名な泥棒部落だぞ”という先入観が植えつけられているからだろうか。なんとなく村人の目つきがどれもこれも一くせも二くせもありそうに見えてきて薄気味が悪い。さて隊員ポーターもポツリ，ポツリとやってくる。花井さんがすごく調子悪そうだ。風邪のせいだろうか。あたりはもうまっ暗になってしまった。そして，結局この日も落伍ポーターが十数名。今日のエスコート役は石村さんと志賀君だ。適当に食糧ＢＯＸを開けて，食事というには程遠い悲惨な夕食の後は寝るだけだ。やっとのことで鬼のような一日が終った。

6月6日

朝，早々に石村さん志賀とポーターの一行が到着。午前中はポーターの入れ替え。ヒスパーポーターを十人雇うことと相成る。道岳連隊はこの日は休養日，ということで2時すぎ僕たちの隊だけが出発。今日の行程はヒスパー河を渡り，右岸のアブレーションバレーの上をフォロリンチッシュまで。このあたりになると雪をいただいた峻峰が対岸に壁のようにそそり立っていて目を楽しませてくれる。その上，道も平担で歩き易くなった。昨日までのシビアなキャラバンに比べるとまさに天国と地獄という感じだ。花井さんも回復したようでみんな快調に歩く。この日の最大の楽しみは，キャラバン開始以来始めてのまともな夕御飯。久しぶりに満足してシュラフにもぐりこんだ。

6月7日

今日も朝からいい天気だ。広いアブレーションバレーの上をうねうねと伸びている道は快適だ

し，景色はいいし，まだ高度の影響も出ていないようで，自然自然に足は早くなる。まるで遠足にでも来ているようだ。それに対し，ポーター達はいよいよ本領を発揮しはじめた。今日の行程が短いことを知っているのかどうか，歩いている時間より休んでいる時間の方が長い位だ。別に急ぐ必要もないんだろうけどこうまでチンタラやられると，まったくやりきれなくなってくる。クンヤン氷河が出合う手前の200mの登りの途中で，とうとうクンヤンチッシュが全貌をあらわした。なんともはや，すさまじい山容にみとれるばかり。そして今夜の宿泊地ブルンバットはこの200mのサイドモレーンを登り切った所だった。正面はクンヤンチッシュ，南にはガンダールチッシュというきれいな6,000m峰，眼下にはクンヤン氷河のモレーンがのたうちまわりながら視界から消えていく。初めて目のあたりにする氷河。凄絶な感じだ。展望は非常にいいのだが背後は数百mの大岩壁でここに到着した時，落石の雨に見舞われた。テントの回りには上から降ってきたのであろう大石が点在している。怖しい所だ。夜シュラフに入ってからも，怖くてなかなか寝つけない。そのうち，いつ始まったのだろうか。ポーター達が向うで歌っている。その歌とも祈りともつかないような不思議な調べ。それが岩壁にこだまして，えもいわれぬ幻想の世界に僕をひきずりこんでいった。

6月8日

ようやくおそろしい一夜が明け，朝がやってきた。心なしかみんなホッとしているようだ。それにしても，皆の顔がいつもより円くみえる。思わずニヤリと笑ってしまう。だけど僕の顔だってふくれているんだろう。そうだ，もうここは4,000mを越えているのだから。初めて経験する高度の世界に入っているのだ。寒さにふるえながら朝食を食べ出発する。アブレーションバレーはすぐ消えてしまい，手前のルンゼから氷河に降りる。写真などでは非常に美しく見える氷河も実際その上に立つとガレキの山でしかない。歩くとなると全く勝手が違う。実のところ氷河上の歩行がこれ程大変だとは思いもよらなかった。山あり谷あり，悪戦苦闘だ。逆にポーター達はようやく生気がよみがえってきたかのように，なんの苦もなくスタスタ行ってしまう。前年の隊の連中から何度も聞かされていた“ガレ場に強いポーター”というのがどんなものかようやくわかったような気になった。しかしこれではまだ認識不足だった。帰りのキャラバンでは，“ガレ場に強い”なんてものでなく“ガレ場の軽業師”といってもいいようなものを見せつけられたのだった。話がそれだが，氷河上を1km程歩いて，ルンゼを登り返して再びアブレーションバレーの上へ出る。出た所はチプールという名の小川が流れ，緑もある素晴らしい所だった。トリボールが正面に見える。ここで2時間程休んだ後，ポーターはようやく重い腰をあげた。相変らずののんびりペースだ。が，こちらも今までのようには体が動かない。ブラルンの手前で僕たちのピークが，遂にその姿をあらわした。どっしりとした，またどこが最高点なのかわからないような，本峰とは対照的なまっ白い，おだやかな山容だ。高度差にしてあと3,000m。まだまだ遠い。た

め息が出る。昼すぎにはブラルン着。もっと先まで進むはずだったのが，またしてもポータートラブルのためここで泊となってしまった。高度の影響が顕著になってきたのか，動くのがおっくうだ。先を偵察に行った仁さんと志賀が疲れきった表情でもどってきた。

6月9日

僕たちの起き出すころ，ポーター達はもうテントの回りに集まってきた。寒くて寝ていられないのだろうか。キャラバン食が減ってきたことを理由に4人のポーターを解雇してバタバタと慌しく出発。さすがに少しの登りでも息が切れる。歩きにくいガレ場を延々とトラバースし，氷河を一つ横断した所がブリュンバリと呼ばれるところだった。ここから先は氷河上の行動となるので，ポーターは進みたがらない。早速，金を払って解雇した。明日からは僕達だけで行動できると思うとホッとする。午後から，池の畔にプレベースキャンプを設営した。池の対岸には上から落ちてきたらしい高さ数十mのおむすび形の大石が鎮座している。山へやってきたなあ，という実感がだんだんと湧いてくる。夜8時，満月がクンヤンチッシュの肩から昇った。煌々と冴えわたる月の光に，しばしみとれる。6月9日，こうしてキャラバンは終わった。

6月10～16日

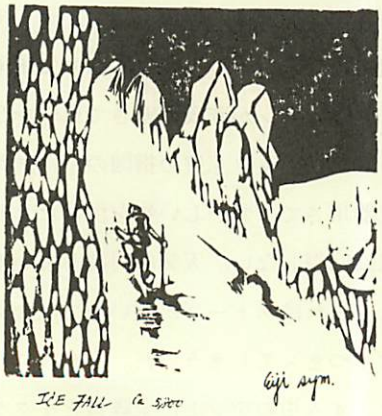
ＢＣへの荷上げが始まった。ＢＣ予定地はクンヤン氷河を歩いていってトリヴォールからの枝氷河の出合のアブレーション台地上である。さすがに荷上げ初日はペースが上がらない。各自，勝手にルートを選んで氷河上の迷路の中を歩く。荷物は12kg位しかないのだが，ここでは，なかなかの重労働だ。歩き初めて，いくらも行かないうちに頭痛がしてきた。こんなことでは先が思いやられる。しかし2日目の荷上げは前日より快調だった。そして3日目は，朝，起きるとあたり一面，真白である。数cmの積雪だ。どんよりと曇っており気圧も下がりつつある。この日は停滞とした。キッチンボーイのシェラハーンが昨夜の寒さで風邪をひいたようなので，2人用テントに寝かせた。それからの数日間は，シェフ志賀の指図の下に隊員が交替でキッチンボーイに変身である。思わぬ人が，意外な器用さで，おいしい物を作ったりして，なかなか楽しいものである。次の日もお休み。まだ天気は回復しない。天気に同調しているのかどうかは知らぬが，石油コンロの調子も悪い。もっとも，これはストーブが悪いのではなく，ラワルピンディで購入した石油の質が極めて粗悪な為，すぐつまってしまうのだ。夕食後には，今後の行動様式，荷上げ計画を決定する為に会議を開いた。4人用のテントに全隊員とイクラムの計9人が，押し合いへしあいして，おさまった。

翌14日からは天候も回復し，荷上げが再開された。皆，この高度には，よく馴応したようだ。荷上げルートも高速道路とまではいかぬが，一般国道並みの，一定の歩き易いルートがとられるようになった。毎日，道路標識がわりのケルンが積まれ，氷河上の小さな池にはドライブインも作られ，もう余裕しゃくしゃくである。1名が体調を崩して1日休んだだけで元気一杯に荷上げ

が続けられた。

6月17日

ＰＢＣを撤収する日がきた。不要なものをデポして，１週間を過ごしたＰＢＣをあとにＢＣへ最後の荷を背負って移動した。荷上げ初日には真白だったＢＣ付近も，今では雪が融けて，かなり地肌が露出している。これからは当分ここで暮らすことになるので，居心地を良くする為，シアにピッケルを振って整地した。テントを張ったあとは休養。読書，散歩，昼寝と各自，好きなことをしてくつろいでいる。いつも昼を過ぎると湧いてくる雲も，今日はその気配さえない。抜けるような，吸い込まれそうな青空だ。さあ，明日から，いよいよ「山登り」が始まる。



主稜に至るまで

小泉章夫

6月18日　快晴

C1へのルート偵察と荷上げに全員で出発。しばらくBCとつながっている右岸のアブレーションバレーを辿ってみたが、すぐに途切れ，落石帯に入ったので，氷河上に降り中央モレーン伝いに進んだ。巨大な堆石が立っている根元で休んだ後，目的の雪稜に取り付くべく左岸へ横断を始める。雪稜の下は枝氷河のアイスフォールからのクレバス帯となっていて，大波小波が凍てついている。見通しがきかないので3隊に分かれて迷路にもぐり込んだ。進路を誤った分隊は遅々として進まず，結局，全員が雪稜の基部に辿りついたのは午過ぎになってしまった。尾根上はラッセルがあるうえ，小規模なヒドンクレバスもあり，ロープを100m固定する。時刻も遅いので4,680mで荷物を投げ出し引き返す。帰路，強烈な日射の為に，氷河上は膝までぬかり，くたびれ果てて日暮れにBCへ帰り着いた。

6月19日　晴れ

前日の失敗に懲りて早発ち，といっても6時半。快調に進み，尾根上4,900mの平担な雪面にC1を設けた。前日のデポもここまで運び上げる。3名は更に5,015mまで偵察に登った。主稜に至るルートは，まだ見えてこない。

6月20日　曇り時々晴一時雪

C1へ荷上げ。漸く，午前中に行ってBCに帰ってくるペースが定まってきた。2時間程，雪降り。

6月21日　晴れ一時曇り

休養。今後の行動方針を決定した。隊を2班に分け，交互にルート工作と荷上げにあたることとする。終日，本を読んだり鮮かすぎる山々を仰いでごろごろした。アイベックスの哀調を帯びた鳴き声は，ここの風景によく似合う。

6月22日　快晴

休養。日が射していると天幕内は限りなく熱くなる。といって外にいても，じりじり焦げてきて風でもあればと願うのだが，風が吹くと今度は寒い。そうやって天幕と外を，のろのろ往復し，本を読んだりトランプをしたり。ついでにカードで班の編成を決めた。腹の減った者はキッチンテントの回りをうろついて何やら拵え始める。また，遠征登山という，ひたすらな消費事業に，唯一，生産活動を付け加えるべく，池の畔に菜園を造りハツカダイコン，コマツナ等の種を播い

た。

6月23日　快晴

Ｃ２へ荷上げ。Ｃ１で荷を軽くして，更に退屈な雪面を登りつづけてＣ２予定地，第３プラトーに至る。ここで初めて稜線への展望が開けた。ルートは判然としない。右手の壁のどこかを登るわけだが，手前側は岩混じりの氷壁が連なり，最奥は氷稜状のアイスフォールとなっている。工作隊は一番手前の壁に80ｍ程ザイルを伸ばしてみたあと，Ｃ１に降りて泊。荷上げ隊はＢＣへ下った。

6月24日　晴れのち曇り時々雪

荷上げ隊はＣ１入り。工作隊は主稜へのルート偵察を行なう。まだ5,000ｍの高度に体が慣れていないようで，歩き続けるのに，かなりの意志を要する。プラトーを辿り，氷壁帯の下を行くと，落石が散らばっている。ほんの小石だが，この高度差を落ちてきて当たったら痛いだろう。やがて大きなデブリにぶつかり，これを迂回して最奥の氷稜の基部に至った。結局，最上部を見ることは叶わず，確かなことは何ひとつわからなかったが，氷稜自体は比較的高度差も小さく，ルートとして使えそうである。

6月25日　晴れ一時雪

というわけで工作隊は氷稜へロープを担いで行った。取付きは極めて急だが，100ｍ程登ると傾斜は，ややおちてくる。この日は160ｍ固定ロープを張った。残りの者はＣ２への荷上げ。段ボールの山が少しづつ成長していくのは，満足すべき眺めである。

6月26日　快晴

更に氷稜上の固定ロープを伸ばしていく。時折，対面の壁から鈍い音と共に崩壊が起こり，雪煙が上がった。その度，ぎくりと，頭上のビルディングのようなセラックを見上げる。

最後の急峻な氷壁を抜けて，今日こそ稜線に達したと思った僕達は，またしてもお預けを食わされた。主稜線は確かに目の前なのだが，数十ｍの垂直の段差となって立ちはだかっている。そしてこの氷崖は見える限り，両側に続いていた。左側には僅かばかり段差の低いところがあるが，アプローチはずたずたに裂かれたセラック帯となっている。そして右手には，雪壁越しに目ざす頂が見えた。裏側から見る頂は岩肌も見えず穏やかな山容である。スケッチを何枚か画いて，再たび蟻地獄の底へと下った。

6月27日　快晴

石村，高橋が氷稜ルート経由で偵察。前日の固定ロープ先端より，左にセラック帯を抜けて主稜の氷原に達した。

他の者は，より安全なルートを求めて手前のアイスケーキののった氷壁を試登する。足首が痛くなる程の，のっぺりした氷壁に5,600ｍまで固定ロープを伸ばした。この上は傾斜がおちて，

見える限りは雪面を登っていけそうである。しかし氷に打ったピストン類は日射で忽ち弛んでしまい，この確認が問題だ。この日，Ｃ２への荷上げは完了した。

６月28日　晴れのち快晴

休養の為，Ｃ１よりＢＣへ下山。下沢，志賀は氷壁ルートの取付きに残した登攀用具を回収した後，下山。Ｃ１下のクレバス帯は急ピッチで融雪が進み，あちこちで川が流れはじめた。

ＢＣは地面の出ているところの方が多くなり，草も萌えはじめている。しかしわが菜園は決して芽吹くことがなかった。

６月29日　晴れのち曇り

休養。ＢＣには濁り水の池が２つあるが，上段のものを炊事に使っているので下段の池で頭を洗ったり洗濯したり。水は冷たく頭に浴びると，しばらく痺れたままとなる。

ＢＣ台地の下の氷河からは，こもった流れの音が絶え間なく立ち昇り，時々，堆石の崩れる音が混じる。こうして日が経つにつれ，氷河は秘やかに黒く沈んでいった。

６月30日　晴れのち曇り

夜半から明け方にかけて強風が吹き続けて夢見悪し。最後のＢＣ休養。朝から，たらふく飲みかつ食う。イクラムも彼のとっておきの缶詰を提供してくれるのだが，中身は極めて辛いか甘いかのいずれかで閉口させられる。もっと始末に負えないのが壜入りの真紅の濃縮清涼飲料で，これの味は日本語の味覚表現では形容できないものであった。

７月１日　晴れのち曇り一時雪

Ｃ２に天幕を移動して泊まる。途中，Ｃ１の天幕は融雪で土台が浮いていた上に風が吹いた為か，見事に転んでいた。真白だった付近はガレ場に近い状態になっている。昼前から断続的に降雪。

７月２日　曇り時々雪，一時晴れ

変わりやすい空模様の下，全員で氷稜ルートより荷上げ。気温が非常に低く，おまけに上部に出るまで日が射さないところなので足指が痺れてきた。氷稜を抜けたところから左のセラック帯にロープを伸ばし出す。左右に無言で屹立する氷塔の顔色を窺いながら，すり抜けていくのは，あまり気分の良いものではない。最後の５ｍの垂壁で曲芸を演じて縄梯子を固定したが，ロープが伸びて使いづらい。この上はところどころ，クレバスの走る緩斜面となり，だんだん視界が開けて，いつの間にか主稜の鞍部に立っていた。

5,980ｍ。鞍部といっても日本のスケールで考えれば某ヶ原と名の付きそうな，やたらにだだっ広い所である。従って，ここがコルであるといった場所を見つけることなどできない相談だった。僕達はしばらくクンヤンチッシュの方に向かって歩き，それから荷物を投げ出し，あとは雲の切れ間に顔を見せる峰々を眺めていた。この見渡す限りの雪原は急峻な氷壁の上にあるに相応

しいものだった。

この日，プマリチッシュを目指す道岳連隊も氷壁のルートを伸ばして雪原に上がってきた。下降は比較の為，２つのルートに分かれて降る。帰路，氷稜ルートのセラック帯でスノーブリッジが崩壊し今後の危険も考え，このルートを放棄することにした。可能な限りのアイスピトン，スノーバーを回収しつつＣ２へ下った。

７月３日　雪のち時々晴れ

風が相当強く，雪が降ったり霧が流れたりの天気で停滞。午後，天候も回復してきたので３名でＣ１の荷物の一部を回収に行った。

７月４日　快晴

道岳連隊と一緒のルートなので少しづつ時差出勤する。高橋，志賀は先行して，前日の新雪に埋まった固定ロープの掘り出しにあたった。道岳連隊によって取付きのシュルンドには梯子が，最上部の垂壁にはワイヤー梯子がかけられ，これらはわが隊の縄梯子に比べて格段に使い易かった。

雪原に出てすぐのところにＣ３を設営し，前日のデポもここに移す。越前谷，下沢は頂上より南東に派生する尾根を見に行った。下降は支点の弛みが気になりながらも，ロープに全体重をかけて降りる。

７月５日　快晴

Ｃ３へ荷を上げた後，予定の北尾根に取り付いて偵察。基部に横走するクレバスを迂回して雪稜に出てからは単調な登行だが，初めての高度故か，あまり捗らない。それでも登るにしたがってせり上がってくるアッパーヤズギルの景観は見飽きないものだった。ユクシンガルダンサールの凄絶といっていい山容は圧巻である。その絶嶺はあくまで鋭く天を衝き，胸壁は1,000ｍ以上を一気に落としている。6,110ｍにデポして引き返し，Ｃ２に下る。

７月６日　快晴

この日はＣ３に入る。午後は雪原に広げたブルーシートに寝そべって，雪煙を上げる稜線を眺めて過ごした。この高度には，まだ完全に順応していないのか，ちょっとした動作にも強力な意志を必要とする。しゃべるのも億劫である。順応していないのは人間ばかりではない。頼りの石油コンロも，もはや限界に近く，なだめすかすのに苦労する。

Ｃ３への荷上げは完了した。明日からはＣ４へ向けて荷上げが始まる。そうして上がるものがなくなった時，僕達は頂上に立っている筈だ。

登　　頂

高橋　　仁

7月7日　快晴

ガチャガチャと鉄クズを鳴らしながら，花井，石村，高橋，小泉の4名で先発する。今日は岩を攀じることもあるかもしれないと軽い緊張感を覚える。同時に，それは未知なるものへ対峙する時の幸福な一瞬でもある。途中，前々日にデポしておいた登攀用具を回収した。岩の基部に達し，初めてロックピトンを打ち込む。一息ついて足下を見ると，後発の越前谷，下沢，入川，志賀の4名がC3から符点となって連なっていた。1ピッチ目，岩の基部を右に回り込むと、少々ガッカリし，多分に，ホッとした。上部のルートは，雪面を辿ればよいことがわかった。6ピッチで台地上に出る。ユクシンガルダンサールがその鬼ガ島的姿態を晒け出す。台地上からは，日本の山を想わせる広い尾根が，見上げる角度で続いている。13：00，C3から6時間半で，6,700mのドームに抜け出る。フィックスは全部で500m。高度差2,500mの遙か足下にはクンヤン氷河がうねり，ここはカラコラムであると主張している。このころから風が強くなり，見上げる頂上稜線からは雪煙が飛んでいる。頭痛はするが，気分は上々である。

7月8日　晴れ一時曇り

全員でC4へ荷上げする。ドームには11：00に到着し，少し進んでC4地点を決定し，整地を行なった。ここから上部の主稜は，岩を攀じるところはなさそうであるが，東側には大きく雪庇が張り出し，西側はクンヤン氷河まですっぱり切れおちている。雪庇の根元にはクラックが走っており，必然的にルートは西側をトラバースさせられる。ルート工作に取りかかったが，雪の状態が悪く，又西寄りの風が非常に強くなり，思うようにスムーズには進まない。フィックスを50m延ばしただけで中止とし，C3に引き返した。今日でC4への荷上げは殆んど完了したので，明日はまた2班に分かれて先発隊はルート工作を行ない，後発隊はC3の宿をC4に担ぎ上げて全員C4入りすることになった。順調に行けば，あと2日の頑張りで登頂である。

7月9日　晴れ時々曇り，風強し。

考えはまとまらなかった。テントの天井を眺め，横でストーブがブスブスいうのを耳にしながらもうそうやって1時間以上も同じことを考えていた。今まではほぼ，完全に最初に立てたタクティクス通り事が進んでいた。しかし今，天候は悪い周期に入りつつあるようだ。計算した今年の天候周期からは，それは小さな崩れであるようにも思われる。手許には4日分の食糧と燃料，

最終キャンプには2日半分がすでに荷上げされている。高所衰退を考えねば，たたかれても，6日は持つ。かつて6日間も続けて天気が荒れ続けたことはこの季節には滅多にない。しかし降雪が多くなれば下のキャンプへの退路は絶たれる。そのリスクと高所衰退を考えればここに留っていられるのはせいぜい2日，さらに最終キャンプでは1日半だ。連日の行動はそろそろ隊員を高酸素に曝露させて休養させねばならないことを示している。だが一度下りてまた登って来るのに1日，ルート工作に1日，登頂のために2日。天候の保証はない。降雪があれば登り返しは消耗となり，雪崩のリスクは高くなるだろう。ともかく，今決断を下すべきではない。もう半日待とう。今日は休養だ。行動するよりは衰退は少ないし，おそらくこの風ではあの稜線のルート工作は出来ない。ゴロゴロして旨いものでも選んで食おう。何にしろ，今,断を下すのはうまくない。

夜小便に出た。全天に星が満ち，満月の光が皓皓とコルの大雪原を照している。風は日中よりは僅かに弱まったようだ。全員鱈腹喰ってグッスリ眠っている。故障のある者は1人もいない。また力がみなぎっていくのがわかる。行ける。　　（越前谷記）

7月10日　快晴

暗いうちから眠が覚める。広いコルに満月の光が青白く舞い，見上げる漆黒の空間には星が激しく瞬いている。夜が白むにつれて東の空にユクシンガルダンサールのいつものシルエットが浮かび上がってきた。6：00,花井,石村,髙橋,小泉の4名が先発する。7：15,越前谷,下沢,志賀，入川が家財道具一式を担いであとを追う。日が高くなるにつれて風も弱まり，先発隊は走るようにルート工作を進める。前々日の終了点からはヤセ尾根上に最終コルまで200m，更にそこから頂上稜線の肩をめざして急斜面に200mのフィックスを張り尽くして，16：30にC4に帰った。後発隊がババロアで迎えてくれる。好天は続きそうであり明日はいよいよ頂上アタックである。6,000m以上に今日で5泊目であり疲労蓄積を自覚する。疲れてはいるが頭痛とチェーンストークス呼吸で眠りが浅い。

7月11日　快晴

限りない山の重なりの更に向こうに橙々色の光茫が浮かび上がり，のろのろと出発準備をする我々に熱エネルギーを送り込んでくる。我々は無垢の高みをめざして励起される。6：00に出発する。フィックスの終了点からは，スタカット，コンテニュアスを混じえてのラッセルが続く。9：30，頂上稜線の北端に辿りついた。雪原状の広い雪庇の向こうに，白いスカイラインが空の藍を一段高く切り取っている。その高みに登ると，続く緩やかな斜面が50m先からは下りになっていることがわかった。10：15，我々はポテンシャルエネルギーの極大点に達した。天候は全くの快晴，穏やかな西風が吹いている。東にユクシンガルダンサール，カンジュットサール，そしてその肩越しはるかにK$_2$，ブロードピーク，ガッシャーブルム，チョゴリザ，マッシャーブル

ムとバルトロ氷河の高峰が並び,眼前には数日後,道岳連隊が初登頂するはずのプマリチッシュがある。南西にはラカポシ，西にトリヴォール，北にディスティギルサール，南にクンヤン本峰となかなか豪勢な眺望である。暫く山々を眺めてから，おもむろに凧を取り出し，7,000mの凧揚げと酒落てみた。まさに春の大雪山である。そういえばザックに腰をおろして煙草をプカプカ喫っている輩もいれば，ジャージにロングスパッツでここまで来たものも居る。

全員同時に登頂というのは良いものである。喜びを全く平等に分かち合えるから。隊長がＢＣのＬＯとトランシーバーで交信し「下から双眼鏡で見ていた。おめでとう。」と祝福を受けた。1時間程で下山を始める。途中1名が調子が悪いと訴えたのでアンザイレンして慎重に下る。Ｃ4を撤収しＣ3に帰着すると佐々木隊長をはじめ，道岳連隊の方々の出迎えをいただいた。

7月12日　快晴

疲労の為か気が弛んだ為かC_3の撤収に時間がかかり，氷壁を下り始めた時は大分日が高くなっていた。本日も快晴である。各隊員とも20kg以上の荷物なのでフィックスのピンを打ち直しつつゆっくり下る。先頭の隊員が殆んど降りきるころ，轟音と共に落石があり，思わず観念してしまったが全員無事であった。おかげで，倦怠感が一べんで吹き飛んでしまった。C_2Ｃ1を撤収すると更に荷は重くなって30kgを越え，雪が融けて氷と石が露出した氷河の上の下山は非常に消耗であった。

ＢＣはとっくにトリヴォールの影の中に沈んでいたが道岳連隊のＬＯ，キッチンボーイが祝宴の席を設けて待っていてくれた。皆がその席に着く頃，我々のピークはアーベントロートに染まりつつ3,000mの上空にあり，食卓の上の花束とともにフィナーレに相応しく演出されたゆうべであった。キッチンボーイがわざわざフンザまで下りて買ってきた所謂フンザパニは，胃から吸収されて体中を駆け巡り，疲労感をゆっくりと幸福感に換えてくれる。食事を終えると，あとは眠気に誘われるまま，好意に甘えて道岳連隊のメステントにもぐり込ませてもらった。

Good Night Shumari Kunyang Chhish！

7月13日　快晴のち時々曇り

全身がだるくいつまでもシュラフから抜け出せない。その間に下沢，石村，イクラムは帰路のポーターの手配,ギルギットからの飛行機の予約,日本への連絡の為にとＢＣをあとにしていた。残ったものは終日ごろごろしていた。昼過ぎから何度も小便が出て顔のむくみが忽ちとれてしまった。快晴続きだった空に雲が去来するようになりモンスーンが近づいていることがわかる。天気が良いうちに登れて良かったと思う反面，帰りのキャラバンが心配になってくる。明日はブルンバリのＰＢＣまで頑張ってダブルボッカする予定である。

ベースキャプ始末記

越前谷　幸　平

プレベースキャンプはブリュンバリ，ＢＣはブンバリという現地名で，各々，青い泉，花々の咲く泉という意味である。いずれもクンヤン氷河の支流と本流の分岐部に形成された三角形のサイドモレンの広がった部分の土地であった。両方ともに名の通り，融雪による池が平地の真中に存在しており，特にブリュンバリの池は瓠形をしている長径が100ｍ以上あり，深さも最深部では，おそらく３ｍを越えているだろうと思われた。入山時には，雪に覆われていた池の周辺の緩斜面は，下山の頃には花で埋められ，這松こそないものの，トムラウシの頂上付近のロックガーデンのような雰囲気を醸し出していた。プレベースは，早々にたたんでしまい，ベースキャンプとして使用したのはブンバリの方であったが，隊員は隊長以下，全員が上部キャンプに居ることが多く，このベースキャンプに滞在していたのは，連絡将校のイクラムとキッチンボーイのシェラハーンであった。フランクな隊であったため，この二人についても相互の任務の範囲を越えて，印象深い想い出を残すような楽しい付合いをすることが出来たのは，隊員にとっても幸いなことであった。

イクラムというのは，言わば叩き上げの軍人で，優秀さ故に，若き大尉という現在の地位に登ってきた人間であり，おそらく軍隊の中にあっては，最も部下の信頼を受けるであろうタイプの人間である。彼が，ポータートラブルの際に発揮した手腕は別の項で記したが，登高に際しても同様に積極果敢で，自分の食糧は全て自分で荷上げしながら，5,300ｍの第二キャンプにまで達し，更に頂上までも同行したいと主張した。残念ながら，彼の登攀の技術的な側面は，第二キャンプ上部の氷壁の突破をするには余りに不充分であり，隊自身としても，彼を第三キャンプに上げた後の身の処し方について，登攀が更に先行すれば，大きな負担となるため，ベースに留ってくれるよう説得した。登頂も間近になり，登頂の際に同行することがほぼ不可能な状況が彼にも分ってくると，ベースからトランシーバーで話して来る彼の言葉もまた熾烈を極めた。登頂の前々日の４時のコールでは，彼は「現在の私の選ぶべき道は，登攀か，それとも死かのいずれかしかなく，どうあっても，ひとりで，頂上を目指す他の隊員を追う」と言ってきた。その危険と困難さを説いて30分以上も話をしているうちに，悲痛な声で「私は，今の説明を聞いて，隊の置かれている現在の状況は理解できたが，親しい友に騙されたという気持ちだけは，ぬぐい切れない」と言って，私達を責めた。決して騙している訳ではないと言って説明を加えたが，彼の恨めしさが分って，可哀そうな気がした。しかし一夜明けると，うって変って，「とにかく頑張ってくれ。

登頂成功を祈る。無事下りて来るのをベースで待っている。」と言ってくれ，われわれもどうやら心の重荷を下ろすことが出来た。頂上からの連絡では，早朝から双眼鏡でわれわれの登る姿をずっと追っていたらしく，「おめでとう」を3回も繰り返した後「今，登頂するのを見ていた。一番先は石村のように見えたが違うか。本当におめでとう。」と大きな声で心から祝福してくれた。彼の真意の中には，6,100mを越えて登行した連絡将校にだけ与えられる称号のことがあったことは否定できない。しかし彼と付合った人間としては，真面目で軍人の鏡のような彼が，われわれの隊のために惜しまなかった努力のことを考えてみれば，とにかくわれわれと一緒について登りたい，困難さに対して立ち向いたいという気持ちの発露こそが，彼をして「登攀か死か」とまで言わしめたのだと考えたい。彼を巡る想い出は数尽きないが，日本食に対する挑戦もまたその一つである。イクラムは，果敢にわれわれの持参したいろいろな日本食に同和しようと奮闘した。彼の口に合うものを食べた時には「 excellent 」と喜んでみせるのだが，時には，無理やり喉の奥に食物を押し込んでやり乍ら「 acceptable 」とボソリということもあった。この acceptable という言葉は，すっかりわれわれを喜ばせ，隊員の間でも acceptable という言葉が流行した。さすがにイカの塩辛だけは，口の中に入れるや否やすぐ吐き出して，うがいをした後「 terrible 」と言って，よくそんなものを食べるなあといっと仕草でわれわれの方を見て，おどけた顔をして見せた。それ以来，塩辛には絶対に近づかなかった。

シエラハーンは，29歳なのだが，どう見てもわれわれの隊の中では一番年をくってみえた。一寸見たところ，日本人であれば40歳といっても通用するような顔付きをしていた。しかし，表情はいつも明るく，小柄な身体に似合わぬ怪力の持ち主でもあった。立場のこともあり，いつも控え目で，横柄な口のきき方をして我物顔に命令するイクラムに付合って，よく最後まで少ない食糧を守ってベースの管理をしてくれたと思う。フンザ領内のグルミットで生まれ育った彼の体格は下山後のブレベースでの水泳大会の時に見て驚いたのであるが，われわれの眼には異常と見える程，大きな樽型の胸廓をしており，根っからの高地人であることを彷彿させた。彼は，K2峰の英国隊の際にコック長を務め，その時に7,700mにまで達したというのが多少の誇りであるらしかった。イクラムは隊員と同じテントの中に寝るのだが，彼は，すすめてもキッチンテントに寝た方がいいと言ってそこに寝泊りし，薄い寝袋で寝ているうちに風邪をひいて了った。隊員が気をきかせて自分の寝袋を貸し，二重の寝袋の中にくるまって3日間程寝ていた。心配してのぞいてみると「もうすぐ治る」と震え乍ら元気を装って答えてみせた。ギルギットで買った中古の登山靴に，粗末な（と言っても隊員の衣類を着てもらったのだが）身なりをして，鼻歌を歌い乍ら，適確に氷河の中をルートを選んで歩き，まざまざと土地の人間の強さをわれわれに示した。頂上からフンザパニ（土地のワイン）が飲みたいと連絡すると夜を徹して40キロ下流のフンザまで買いに行き，1日で往復してわれわれに飲ませてくれた。彼は日本へ行って金を稼ぎたいと希

望し,札幌のパキスタン料理店に就職を世話するから履歴書を送るように言ったのだが,帰国後,暫くして彼から来た手紙には,また次の遠征隊に加わりたいから,日本から来る隊に紹介状を書いてくれとあった。

われわれのベースキャンプの近くには,道岳連の隊のベースキャンプがあり,道岳連隊の連絡将校やキッチンボーイもいたため,二人だけを残して上部に登っていたわれわれの隊としては,その面でも随分お世話になった。

ベースキャンプは,ながい遠征の中にあって,振り返ってみると,丁度ハイマートのように思われ,今だにもう一度,あの場所へ行って山を眺めてみたいという想いにかられる。

帰り道

小泉章夫

7月14日　快晴のち晴れ

ブリュンバリ（ＰＢＣ）へ荷下げ。午前，午後各１回。氷河は裸氷が現われ，或いは岩屑の堆積に埋まり，すっかり様子が変わっている。巨大なテーブルストーンも出現し，そんなところは格好の休憩点となった。氷河上の水流も生長し，あるところでは氷を蝕んでゴルジュを形成している。ところどころ，ケルンがまだ残っていたのは懐しかった。

ブリュンバリはお花畠となりＢＣより早く夏が来ていた。我々の行動をずっと見守っていた巨大なおむすび岩も，緑の中で優しく池に映っている。点滴用の補液を飲んで疲労回復。２度目に降りる際，胃潰瘍の悪化した道岳連隊のＬ．Ｏ．，ナザールも一緒に下った。

7月15日　快晴

日が昇ると蝶が飛び出してきた。高山性のキチョウ，シジミチョウが殆どで，ヒョウモンチョウやウスバシロチョウの類は時期が早いのか見かけない。ネットを振って草原を駈け廻った。池で泳いで水質を汚濁させる者も居る。もう１日ゆっくりしたかったのだが，昼頃ポーターがヒスパーより上がってきた。例によって一悶着あって，10名のポーターとともに出発したのは夕方になった。この間，ＢＣより道岳連隊の方がみえてプマリチッシュ登頂に成功したことを知る。２隊共成功，めでたし。

忘れな草の群落を過ぎ，スイートピーの咲き乱れる丘を下ってブラルンまで。カッシュは大きく育っていたが，根の白い部分がネギのようで久し振りの生野菜に舌鼓をうつ。

7月16日　晴れのち時々曇り

ポーターの朝は早い。テントの廻りに座って我々の朝食が終わるのを待っている。すっかり緑になったアブレーションバレーを辿りチプールを経由してブルンバットへ。ここでクンヤン氷河とその峰々に別れを告げて更に下る。途中のロバの親子がいる放牧地で昼飯。ポーター達は頭大の石をつかんで砲丸投げを始めた。我々はその怪力ぶりをぼんやり見ていた。今回のポーター達の飯は茶色の固いパン。カビが生えているが，なかなか旨い。

夕刻，氷河の本流を舌端付近で横断してヒスパーの部落に入った。振り返ると舌端の根元あたりに黒い大穴が口をあけ，そこから膨大な量の濁流が奔り出てヒスパー川となっている。部落は往きと同じくゲストハウスに泊まり，ダヒやチャパティをいただいた。隊長は，早速集まってきた村人達の診察。

7月17日　曇りのち砂嵐一時小雨

今日はいよいよ殺伐たるヒスパー峡谷に入る。ジープの手配の為,志賀が先発する筈だったが,彼は前夜のダヒにあたったのか重症の食中毒。代わって花井がシェラハーンと共に先発した。日中はぐんぐん気温が上がるが，奔流の脇を行く時は冷気が気持ちよく，氷河より吐き出されてきた氷塊をすくってかじることもできる。タルキチャンダースより谷相はいよいよ険悪となる。空模様は砂嵐となって砂塵が舞い上がり視界も悪い。フラの徒渉点は凄まじい増水で，とても使えたものではない。往路，ナガールのポーターが徒渉を恐れたわけが合点できる。ポーターはピッケルのブレードの如き木の刃のついた杖を持っていて，これで足場を切りながら，ぐいぐいザレ場を高捲いていく。1の吊橋上流の岩小舎に着いた時はホッとした。今夜はここで最後の夜営。

7月18日　曇りのち晴れ

吊橋を左岸に渡って高捲きを続ける。やがてナガールの緑が鮮やかに目に飛び込んできた。村は夏の盛り，サクランボ，リンゴ，コバニ（杏）が熟れていて旨い。久し振りのミールのゲストハウスで歓待を受け，また果物などを御馳走になる。ここでヒスパーのポーター達に給料の他，煙草，不要になったものなどを与えて帰した。昼頃，シェラハーンがフンザよりジープを手配して戻ったので，2台に分乗し，ミールの息子に別れを告げて，いざ出発と思ったが，村の中心部で往路に雇ったポーター達に他の隊との給料差額を要求されたりして立往生。結局，ギルギットのD.C.の裁定を仰ぐことにし，村の代表1名を便乗させて出発した。

ギルギット川の橋を渡ってアリアバードのプリンスホテルにジープは着いた。名前は立派だが，2部屋だけのロッジである。ここで我々を迎えにギルギットよりナガールへ向かう途中のイクラムをタイミングよく見つけて合流した。午後は裏でコバニを採って喰ったり，近くを散歩して暇を潰す。コバニはナガールのものより甘い。店は4，5軒，それに歯医者と製材所などがある。南の方角にはラカポシの巨きな山容が見える。夕刻，そのラカポシでパキスタン登山隊が遭難したとの報せが入った。イクラムの友人が死亡したらしい。翌朝，残りの者は自力下山したことがわかったのだが，この時はシェラハーンがヘリコプターに乗って捜索に行く話になったりしてドタバタした。その際，彼にかなりの装備を与えてしまった。夜，久し振りに焼肉を喰う。

7月19日　晴れ

午前中，カリマバードの600年前に建てられたという旧王宮を見物に行く。丘の上にある城塞のような建物の入口を捜してうろうろしていると,どこからか老人が現われ,古ぼけた入場券を売ったあと鍵をあけて中を案内してくれた。見るべきものはあまりない。この辺の山はルビーの産地らく，紅い原石を握りしめた子供達が集まってきてパイサをねだる。やはり年上の子の方が，大きな石を持っているが，どれも割れが沢山入っていた。

昼，カラコルムハイウェイをジープで南下しギルギットへ。途中，イクラムにラジオ局へ連れ

て行かれ，取材を受けるはめになった。猛暑のギルギットは下沢，石村の待つジュビリーホテルに投宿。庭には大輪のひまわりが咲き乱れているのだが，あまりの熱射にどれもこれも太陽に背を向け，よそ見をしている。そして久し振りの電気。扇風機はせっせと回っているのだが，あまり風が来ないのは羽根のかえしがついていない為らしい。このホテルには外人旅行者も多く，日本人も居た。

7月20日　晴れ時々曇り

休養。スイカが大きく熟れていて旨い。そして露店のシシカバブ（串焼肉）も。夜はラカポシインという高級レストランでグルミットへ帰るシェラハーンの送別会を開いた。

7月21日　晴れ時々曇り

午前中，越前谷，下沢，イクラムがナガールの問題を片づけにD.C.のところへ行き，金を払う必要のないことを確認した。

夕方，ハイエースを改造したミニバスをチャーターして荷物と共にラワルピンディへ出発。が，例の如く，ちょっと走ったところで荷台が壊れ，ギルギットへ戻って修理したのち，再度出発。

7月22日　晴れ時々曇り

すぐにオーバーヒートする車に，水をついで励ましながら走り続け，夕刻，懐かしのデイビスホテルに到着した。

ラワルピンディ帰着後，観光省での報告，隊荷の再輸出等の残務整理を済ませた後，7月26日の新月の晩，遠征隊は解散した。それは丁度，今年のイスラムの断食月間「ラマダン」の始まる日でもあった。

おわりに

越前谷　幸　平

われわれを育くんだのは，北大山岳部であり，今回の山行もまた，その一切が同部内の人間によってなされた山行としての域を出ない。多様性，ごちゃまぜをもって鳴る北大山岳部ではあっても，その基盤となる部分には同質のものが存在しており，それは，同一の目標を目指すときにもっとも端的な形で現れる。さらにその根強さは，ほぼ最終的な人格形成期をその中で過していることによりなり，如何に異端的存在であってもその枠を越えた存在ではありえない。われわれ8名の隊は今までの北大山岳部の登り方と別の様式をとっているように見える部分もあるが，やはりその本質から外れたものではなかった。

国内においては遠征隊の形成はさまざまな形でなされているが，形成当初より終了までの隊全体としての人間形成の総和を，対立し，融和せざるもの，時に対立するが融和しているもの，対立せずかつ融和もせざるものの3つに分けて見ることができる。対立することが多く，かつ融和点が存在せぬが故に登るには登ったが，後味のよくない想い出を残してしまった隊もあり，一見トラブルがないように見えていながら内部的な危険をはらんだ隊もある。特に大遠征隊では非対立を掲げれば逆に非融和が目立ち，対立することを前面きの姿勢でよしとすれば，また，融和点から遠ざかるという場合が多い。

しかしこれらに対し，昔からの山仲間によって出された，小さな隊であれば，大遠征隊的な特殊な人間関係を形成するには至らないから，対立することも少なく，当初より融和点が存在していることも多い。これはある意味で望ましい登山の一つの形であるといえる。また大学山岳部においては，先に述べたように共有の人格形成の場を持つが故にアイデンティティを持ちやすく，さらに少し大きな所帯を持つところであれば，プロジェクトとしての登山を行うに足る人的な要素を保持しているから，中規模の遠征隊を送るには最適の場にあるということがいえる。これが，現在も，大学山岳部の衰退といわれながらも，次々と遠征隊を送り続けている理由である。
る。

しかし，時として，対立点が明確にされて，激烈な論議がたたかわせられるべき重要な場であっても，あまりにも共有の認識が成されてしまう部分が多いために，重要な認識のギャップに気付かずに流されてしまうような陥穽が，大学山岳部の隊には宿命的に存在している。したがって大学山岳部の隊の目指すものは，非対立，融和の隊ではなく，対立点を明確にでき，かつそれを越える本来の融和点が生かされる隊ということになる。今回のわれわれの隊が人間関係で心掛け

たのはこの一点であり，それはある程度望み通りになったと考えている。われわれ全員は，今，いくつかの激昂した論議の場を余裕を持って振返ることが出来る。

登山者の山に対する憧憬は，自由な発想に裏打ちされた，いわば最上の恣意であるが，結果として一つの目標の終結を願う時，それは物質的な意味合いに近い「計画の成功」という一点に収斂する一面を持っている。もし大きな望みを持ち，大きな目標に近づこうとするのであれば，否が応でもその収斂点に向って走らざるを得ないが，その過程で，本来の高い精神と，憧憬とが失われてしまうおそれがあることを覚悟しなければならない。より困難な新しい天地を求め，自由に自分の憧憬に向って近付いていく道は，そこにはなく，発想が論理にすり替えられ，極限に近く管理された肉体と精神の使役のみが待ちかまえているかもしれない。

山登りを含めて，冒険とは新たなる自然との対話であり，山登りの最高の価値もまた広い自由な心でそれを満喫することにある。憧憬を計画に表現しにくい時に，手段として経営学的な，あるいは工学的な手法を用いることは確かに一つの楽しみを増やすことにはなるが，それを卓越する心の存在を忘れ，物質的な成功のみに身を委ねてしまうことがあってはならない。

山登りは個人の中では各々の原初的な願望を満足させるための行為であり，遠征は，いわばその行為の巨大な，共同作業である。本来のあるべき姿としては，その願望もまた，可能な限り，各個人において同様に満足されなければならない。

その意味において，全員同時登頂が一番望ましい形であるといえるが，山との関係においてそれが叶えられなくとも，個々人が相互を思いやる，高邁な心を持っていれば，成功を分かちあうことが出来る。全隊員を頂上に送ることが無理な場合には，強い者を立てて，確実な登頂が成されることを願うのは当然のことである。人知れず，自分の食糧だけを携えて上部へと向ったという記録を見ることがあるが，これは本来の登山者の姿ではない。

繰り返していうが，山登りは高い精神から溢れ出た憧憬を満足させる行為であり，管理された大遠征には本来馴染まないものであると思う。

これらはわれわれの山登りの学校であった北大山岳部で学んで得られたところの一部であり，われわれが今回の遠征中，心の内で忘れぬように努めた岳訓でもある。

資　料　編

装　備

小　泉　章　夫

(1)個人装備

目標山域の気象条件を道内の冬山程度と見ていたので個人装備も普段使っているものを個人負担で用意することとし，これで十分間に合った。登山靴はインナーシューズに穴のあいた使い古しのダブルからシングルまであったが，日中行動時は概ね気温高く支障をきたすことはなかった。スキーは輸送の手間に見合わないと考えたので持参しなかった。

(2)登攀装備

メインザイル（φ９㎜×４０ｍ）はコンテニュアスで歩く事を考えて２人に１本の計算で４本用意したが，実際にはルート工作隊しか使うことはなかった。しかし予備を考えるとこれだけは必要である。

フィックス用ロープはダンライン９㎜×200ｍを15本，3,000ｍ分用意し，2,350ｍを使用，残置した。今回は雪氷のルートであったのでシングルで不安を感じる事はなかった。むしろ支点のゆるみに不安があった。

支点として持参したアイスピトン類は殆んど全てを消費した。スクリューピトンはゆるんだ際の締め直しが厄介であった。というのは，ザイルの固定にカラビナを残置せず捨て縄によるプルージック固定を用いたからである。黒色の打ち込みスクリューピトン等は，太陽の直射熱を吸収して弛み易かった。これに限らず全てのピトンは日中の直射熱によって下を向いてしまい，毎回のように打ち直しを必要とした。

スノーバーは，アルミアングル材（３㎜厚）38×38×650㎜を加工して持参した。1972年AA-CHマッキンレー隊のものをモデルにしたが，特に引き抜けを防ぐ為に，深さ６㎜の鋸歯を２ケ所ずつ入れたが，有効であったと思う。

雪のルート故，ロックピストンは殆んど使わなかった。

ユマールは各人１台ずつを支給した。

梯子代用としてアブミプレートとφ６㎜ロープを持参し，現地にて５ｍ程のものを作り雪壁部に使用したが，やはりロープが伸びて使いずらい。今後は金をかけてもワイヤーバシゴを持って行くべきである。

背負子を用いた組立式のフィックスドラムを考案し持参したが，事前の準備，検討不足であまり快調とはいえず一度使用しただけに終った。

(3)露営装備

隊員用としてドーム型天幕，4張を持参し，足りないところは残置せず担いで移動することとした。内張は用意しなかったが特に寒さを感じることはなかった。ペグはアブミプレート，スノーバーで代用した。シートはウレタンシートを用いたが，梱包用緩衝剤にもなり便利である。

コンロはＢＣ～Ｃ３でスベア（石油）を使用したが，ラワルピンディで購入した石油の質が極めて悪く，数日に一回の掃除及びヘッド部の空焼きを必要とした。この際，ノズルの掃除に荷札の針金が重宝であった。ノズル掃除針は一台に３本ずつを用意したが不足であった。Ｃ４ではブタンガスを使用したが，低温では気化が遅く火力不足であった。スベアもＣ４に上げてみたが，やはり6,700ｍでは使用不能であった。

ポリタンクは25ℓ容のものと半ガロン容のものをラワルピンディで購入したが，半ガロン容のものはキャップ内側のゴムパッキングが全て石油で劣化してしまい，またタンクの色も溶け出していた。石油用の小ポリタンクは日本から持っていくべきである。

現地米用に，圧力釜一台をラワルピンディで購入しＢＣまで使用したが快調であった。

ＢＣ用にキッチンを兼ねた大型天幕があった方が良いと思う。

(4)その他

荷上用に背負子を持参したが，最上部のバーが後頭部にあたる欠陥があり不評を買った。

ラジオは短波放送がよく入り，リエゾンオフィサーの暇潰しとなった。

カメラは個人装備としカラーフィルムを支給したが白黒フィルムも用意すべきであった。

リエゾンオフィサー，キッチンボーイには隊員に準じた個人装備を支給すべきであった。今回はリエゾンに用意した靴が安物で雪上で使い物にならなかったが，こんなところで金を惜しむべきではない。

ポーター支給装備はゴーグルと４斗袋（合羽用）を用意したが，ポーターが現金を希望したのでいづれも支給しなかった。またブルーシートを８枚持参したが，これはポーター用の他，ＢＣ以上ではキッチンのフライや各キャンプの装備食糧デポのフライとして大いに役立った。

(5)予備品

主として個人装備の予備を持参したが殆んど使用しなかった。病人用として用意した唯一の羽毛服はキッチンボーイの防寒着となった。

(6)梱包

基本方針として，装備，食糧は各々キャンプ毎の梱包を日本で済ませ，現地での再梱包を最少限に留めるよう配慮した。

外装は大小２種の段ボール箱とし，各々の重量を12.5kgにして２個でポーターの負荷25kgとなるようにした。

外装の防水加工として段ボールにホットメルトのワックスを塗り加熱処理を施したが，封印に用いたガムテープの付きが悪く，ラワルピンディでうけ出す前に継目より浸水していたものがあった。全ての箱を２斗，４斗袋で内包するべきであった。

段ボールは一重のものを使ったので強度は大きくなく，ＢＣに着いた時には全壊していたものがかなりあった。これはポーターの担ぎ方が悪いことにもよる。

現地購入の「ボリ」（ズタ袋）は案外丈夫で特に野菜類の輸送に便利であった。

ブルーバック（背負皮のないサブザックの如きもの）も重宝した。これは色を変えて作れば種類分けができて便利であろう。今後の梱包手段として，この２斗～４斗袋＋ブルーバッグ梱包を基調として，空輸時のみ無処理段ボール箱づめという方法も良いと思う。但しバックの封印手段を考える必要がある。

ラワルピンディでは丈夫な紐は入手困難である。今回，日本への再輸出の際，梱包用のひもが足りず隊員の靴ひもまで使用した。

ガムテープは足りなかった。日本から10巻位持ち出すべきであった。

輪ゴムは輸送中に劣化して切れ易くなっていた。他に一袋，隊員が持参した方が良い。

ポーターの荷物照合札としてプラスティックプレートを用意したが有効であった。

以上簡単ながら，各装備について簡条書きにまとめてみた。以下に装備表を付す。

装 備 表

1)個人装備

品　　目	数量	備　　考
毛下着（上，下）	1	全て個人負担
毛セーター	1	
毛カッターシャツ	1	
ワイシャツ	1	
ズボン	2	
ヤッケ	1	
ジャンパー	1	
オーバーズボン	1	
毛靴下	2	
毛手袋	2	
毛ミトン	1	
軍手	1	
オーバーミトン	1	
日出帽	1	
靴下	2	キャラバン用
運動靴	1	キャラバン用
合羽	1	
ショートスパッツ	1	
ロングスパッツ	1	
サングラス	1	
ゴーグル	1	
登山靴	1	
シュラフ	1	
シュラフカバー	1	
断熱マット	1	
アイゼン	1	
ピッケル	1	
ゼルプストバンド	1	
カラビナ	3	
ナイロンロープ φ6mm	10m	
サブザック	1	
ヘッドランプ	1	
単3電池	8	
ナイフ	1	
磁石	1	
地図	1	
食器，スプーン	1	
傘	1	
ローソク	2	
ライター	5	
マッチ	2	
ビニールテープ	2	
時計	1	
筆記具		油性マジックを含む
裁縫具	1	
タオル	1	
防水油	1	
ヘルメット	1	

2)登攀装備

ザイル φ9mm × 40m	4	
フィックスロープ φ9mm × 200mm	15	ダンライン
サブロープ φ 6 mm × 200m	1	ナイロン3打ち 支点用
φ6mm × 30m	1	ナイロンあみ
ロックピトン	42	各種，隊員供出
アイスピトン平型	25	一部隊員の供出

コの字	12	
V字	23	
スクリュー	16	
スノーバー	30	
カラビナ	50	隊員の供出による
アイスハンマー	4	借用
アイスバイル	2	借用
ユマール	10	一部借用
ジャンピングセット	1	隊員の供出による
ボルト	10	隊員の供出による
アブミ	3	隊員の供出による
アブミプレート	20	
フィックスドラム	1	

3)露営装備

ドーム型天幕(4人用)	4	一部借用
夏用天幕(5人用)	1	キッチン用
同ポール	1	
ツェルト(4人用)	2	
断熱マット	2	寄付による
ウレタンシート	1.7m×50m	寄付による
スコップ	3	ジュラルミン製
ノコ		
スノーソー	1	借用
石油コンロ(スベア)	4	一部借用
同修理具	2組	
オイルフィルター	2	
石油ポンプ	2	
ポリタンク25ℓ	3	
ハーフガロン	8	
2ℓ	1	
1.5ℓ	2	
1ℓ	1	
0.5ℓ	1	
石油	60ℓ	現地購入
ブタンガスストーブ	1	寄付による
同カートリッジ	10	
ローソク	50	現地購入
メタ	15箱	
圧力釜	1	現地購入
おたま	2	現地購入
茶コシ	2	現地購入
ヤカン	1	現地購入
コップ	8	現地購入
テルモス	1	
コッヘルセット	2	
缶切	5	
折りたたみ式水タンク	1	

4)その他

赤旗	60	
トランシーバー	3	借用
背負子	4	一部借用
温度計	3	借用
高度計	1	借用
ラジオ	1	借用
電卓	1	
双眼鏡	1	借用
タイプライター	1	借用
カセットテープレコーダー	1	借用
カセットテープ	8	借用
乾電池 単1	32	

単3	400	
修理具		
粘着布テープ	1	
ビニールテープ	1	
針金 φ1.2㎜	11m	
φ1.6㎜	6 m	
細引	3 m	
リード線	少量	
ハンダ	少量	
ドライバー(＋－)各	1	
キリ	1	
ラジオペンチ	1	
プライヤー	1	
ヤスリ	2	
アマニ油	1	
ゴムひも	1 m	
リベット	10	
あて布		
瞬間接着剤	1	
接着剤	1	
マジック(赤,黒,青)	10	
布テープ	2	
ポリ袋0.03㎜厚10号	600	
2斗袋	20	
1斗袋	10	
ロールペーパー	80	
ＡＡＣＨ部旗	1	
パキスタン国旗	1	現地購入
洋凧	3	
カメラ	5	隊員供出
シネカメラ	2	借用
ポラロイドカメラ	1	隊員供出
フィルム 35㎜	80本	寄付による
8㎜		寄付による
ポラロイド	20	
ストック	2組	隊員供出
ブルーシート	8	寄付による
ブルーバッグ	10	借用
ゴーグル	50	ポーター用
4斗袋	60	ポーター用
荷物札	50	ポーター用
バネ秤 30kg秤	1	
釣竿	2	

5)予備品

羽毛服	1	借用
高所帽	3	借用
ゴーグル	2	借用
ロングスパッツ	2	借用
アイゼンバンド	3	
アイゼンジョイント	6	
アイゼン	1	借用
ヘッドランプ	1	
針金	1巻	
羽毛ミトン	1	借用
防水マッチ	4	借用
ピッケル	1	借用
スコップ用ネジ	3	借用
毛ミトン	1	借用
毛手袋	1	借用
テントフレーム	4	
オーバーミトン	3	借用

6)リエゾンオフィサー支給品

マットレス	1	
合羽上下	1	
ジャージ上下	1	
作業ズボン	1	
ズボン	1	
毛カッター	1	
毛下着上下	1	
羽毛服	1	
セーター	1	
ヤッケ	1	
オーバーズボン	1	
日出帽	1	
日よけ帽	1	
登山靴	1	
キャラバン用靴	1	
靴下	4	
オーバーミトン	1	
サングラス	1	
ゴーグル	1	
ロングスパッツ	1	
オーバーシューズ	1	
ヘッドランプ	1	
ダクロンシュラフ	1	
シュラフカバー	1	
２人用テント	1	借用
アイゼン	1	借用
化繊シュラフ	1	キッチンボーイ用

食糧

志賀弘行

方針

喰うことをいかに楽しむかに主眼をおいた。軽量化や栄養補給の面は国内山行の食計を少し強化することで解決可能であり，現地食をいかに取り入れるかについては前年度の隊の方針を踏襲した。今回は限られた予算内で食生活にどれだけ変化をつけられるか，作ること食べることの楽しみをどれだけ引き出せるかを考えてみた。

具体的には国内では現物の寄付をいただいたり乾燥食品を自作することで質の向上をはかった。上部キャンプの夕食やＢＣでの食事はインスタント製品をさけて，少し手間がかかり，作る人間の個性が反映するように考えた。そのために乾物，調味料などはできるだけ多くの種類を用意した。

金のない我々としては暇と旺盛な食欲，そして旨いものを作ろうという執念を武器にするしかないと考えたのだが，余裕あるタクティクスがそれを可能にしてくれたようだ。加えて隊全体に料理に腕をふるうことを楽しむ雰囲気があったことで予想以上にバラエティに富んだ食事ができたと思っている。

食糧の寄付をいただいた国分札幌支店，佐藤食品工業，土野商店，東洋水産札幌工場，丸二物産，雪印食品，雪印乳業にはこの場を借りて感謝の意を表させていただく。

内容

○主食

キャラバン中とＢＣでの朝食は粉食が主でチャパティ・プラタ（チャパティを油で揚げたもの）が中心となった。その他にハルワ（荒びきの小麦と油で作った菓子）や日本より持参した冷麦・インスタント麺を使った。夕食は現地購入の米・スパゲティを和風・パキスタン風とりまぜて調理した。C1以上では朝はインスタント麺，夜はα米を主体とした。昼飯は行動時はビスケットが主でキャラバン中はチャパティをサンドイッチ風にしたこともあった。休養日や間食としてはホットケーキやお好み焼き，プリ（油で揚げたパイ）などを作った。ビスケットはピンディで購入したが甘みの少ないさっぱりした味のものが好まれたようだ。

α米は１部を除いて熱風乾燥機で自作したが，戻りや粘りの点でも市販品に劣らないもの

ができた。

○副食

蛋白源として日本からは缶詰類，ドライソーセージ，チーズ，自家製の干し肉，F.D.（フリーズドライ）卵，インスタント豆腐などを用意し，現地ではコンビーフを中心とした缶詰類・鶏・卵を購入した。パキスタン製コンビーフは塩がきつくパサパサした感じで料理の材料としては使いにくい。リエゾンの持参した缶詰では魚やエビなど良さそうなものがあった。

野菜類はキャラバンはすべて生野菜でまかなった。チプールやブラルンではノビルに似たカッシュが芽を出したばかりで酢みそあえ・炒めもの・お浸しなどに重宝した。BCでは保存のきくジャガイモ・人参・玉ネギ・大根・カブ以外は乾燥野菜を用いC1以上は全て乾燥野菜とした。乾燥野菜も自作したが玉ネギについては後からF.D.製品をいただいたのでそれを使用した。ニラ・ナス・長ネギ・ピーマンなどが好評であった。当初BCにミニ菜園を作ることを考え小松菜・二十日大根の種子を用意したが全員でBCを離れることが多く，実現できなかった。青ものを確保する方法としては玉ネギを発芽させるのが簡単かつ確実だと思う。

現地食にはギーが欠かせない。融点25℃位のちょっと臭味のある油で5kgまたは7.5kgの缶に入っている。BCでは1日に1kgも使うことがあり重要なカロリー源となった。

香辛料はバザールの店先に何十種と並んでいるのだが使い方がさっぱりわからず残念であった。

○飲み物

1人1日あたり3.5ℓの水分を摂取できるように計算した。BCからC1までは氷河上の流水や太陽熱が利用できた（鍋に雪を入れテント内に置いておくだけ）のでジュース類の消費が予想外に多かった。砂糖は過去の報告書に120g／日・人というのがあり多めに購入したが実際には90gから60g程度の消費であった。紅茶・コーヒーなどはすべてラワルピンディで購入したが日本よりかなり安く買えた。

○嗜好品

アルコール類は薬用と称して日本から持ち込んだがラワルピンディに着いた翌日には空になってしまった。とっておきの粉末酒とメイルランナーが持ち帰ったフンザウォーターはいずれも登頂祝い用となったが旨い酒であった。

梱包・管理

食糧はすべて4人分を1単位としてパックした。4人パーティーで3～4日分の主食・副食・

調味量などを１つのダンボール箱に収め，それに缶切・割箸・ロールペーパーなどの小間物を加えて１箱が12.5kgになるようにした。原則として１つの箱を使いきってから次を開けるようにし，中味をどう料理するかは各パーティーにまかせた。各箱が独立しているので荷上げの管理や消費量の把握は容易になったが梱包とリストの作成が繁雑なので小人数の隊に適した方法と言えるだろう。

現地食メモ

○ジャガイモと玉ネギの卵とじ

ナガールで足止めをくっている間、キャラバン用の副食を少しずつ食いつぶしていくので食糧係としては献立に頭を痛めていた。そんな時にシェラハーンの作った一品。乱切りのジャガイモと玉ネギをゆで、ドライトマト・塩・たっぷりのチリを加え卵でとじたもので、現地米の臭味を消してくれるので皆に歓迎された。材料はどれもナガールで手に入るので出発の日までたびたび食卓にのぼることになった。

○ハルワ

キャラバンの朝は意外に忙しかった。チャパティを一枚一枚焼いている暇がないような時はこれが一番早い。鍋に深さ３cmほどのギーを煮たて、そこに油と同量のライスマイダ（米を荒びきにしたもの）を加え手早くかきまぜる。焦げないうちに砂糖をたっぷり溶かした水を少しずつ加え（油がはねるので要注意）充分ふくらんだら好みのドライフルーツを加えてできあがり。ＢＣでも休養日の朝飯などに登場し、時にはキャプテンが腕をふるってくれたこともあった。

○ダルスープ

たっぷりのギーで玉ネギのみじん切を茶色になるまでいためる。更にニンニクを加え形がなくなるまで気長にいため、チリとドライトマト、時々少量の水を加える。こうして作ったソースを別に圧力鍋でゆでたダルにかける。苦味のきいたおかずになる。

○プリ

ＰＢＣから荷上げをしていた頃シェラハーンが風邪をひいて三日ほど寝こんだことがあった。まったく働くことができず、申しわけなさそうにしていた彼が復帰して最初に作ってくれたのがプリで、我々が荷上げから帰ってくるとアルミの盆に揚げたてを積みあげて満足気な表情をしていたのを思い出す。まずマイダを底の平たい容器にとり少量の塩を混ぜて中央にくぼみを作る。そこに煮立ったギーを流しこみ手で周囲をくずしながら加えこねる。耳たぶより硬めの塊状とし、のばしてはたたむことを繰り返す。適当な大きさにちぎり円盤状にととのえてたっぷりのギーであげる。時によって湯のかわりにミルクと砂糖を加える。

食糧の配置と重量

	日数(日)	国内購入分(kg)	現地購入分(kg)	計	1人1日あたり重量(kg/人・日)
C 1～C 4	27.5	150	73	223	1.0
B C	12.5	60	78	138	1.4
キャラバン	14	24	109	133	1.2
計	54	234	260	494	

主食基本量

	朝食	夕食
現地米	140	160
α米	140	160
アタ	120	—
麺類	150	—
ビスケット	200	

単位は、1人1食あたりのグラム数。

飲料基本量

紅茶	10
コーヒー	9
オバルチン	13
ミルク	24
ジュース	25
砂糖	120

1人1日あたりのグラム数。

食糧リスト (1) 国内購入分

(単位 kg)

	キャラバン用	B C 用	C1～C4用		キャラバン用	B C 用	C1～C4用
α米(自家製)	—	—	30.9	天ぷら粉	0.5	0.5	2.0
味付α米	—	—	8.5	かたくり粉	—	0.3	—
α赤飯	—	1.4	1.1	お好み焼の素	—	1.92	1.92
ビーフン	—	3.6	4.8	魚・肉缶詰	1.0	1.2	2.5
インスタントラーメン	—	6.0	15.6	干肉(自家製)	—	1.2	6.9
〃 ソバ	—	2.4	2.4	F. D 卵	—	—	0.2
〃 焼ソバ	—	2.4	1.2	チーズ	2.0	2.0	4.0
冷麦	2.1	2.4	—	ドライソーセージ	2	4	8
うどん	1.2	—	—	漬物	0.8	1.7	3.1
ホットケーキミックス	—	1.92	2.88	佃煮など	0.2	1.2	1.9
マッシュポテト	—	0.8	1.0	茶漬	0.12	0.12	0.24

	キャラバン用	B C 用	C1～C4用		キャラバン用	B C 用	C1～C4用
ふりかけ	0.4	0.24	0.6	味付のり	1袋	(1袋)	1袋
ドライカレーの素	—	—	0.16	いりごま	—	0.1	0.2
炒飯の素	0.2	—	—	凍豆腐	0.09	0.18	0.6
八宝菜の素	—	0.12	0.12	桜エビ	—	2袋	2袋
ミソ八宝の素	—	—	0.12	かんぴよう	—	1袋	2袋
マーボ豆腐	—	0.6	0.9	ワカメ	0.1	0.3	1.0
鳥釜飯	—	0.24	0.72	ヒジキ	0.05	0.1	0.25
鮭釜飯	—	0.36	0.36	昆布	—	0.1	—
ハヤシルー	—	0.22	—	とろろ昆布	—	0.1	0.2
ビーフシチュー	0.5	0.25	0.5	にぼし	—	0.3	0.3
カレールー	—	0.2	0.2	削りぶし	0.06	0.12	—
すしのこ	—	0.3	0.3	キクラゲ	0.04	0.12	0.3
ミートソースの素	0.4	—	—	F. D. 正油	—	0.1	0.25
インスタントミソ汁	0.8	0.25	1.9	ほんとうふ	—	0.4	0.5
クリームスープ	—	0.6	1.2	ポップコーン	0.2	0.6	0.8
コンソメ	0.3	0.18	0.3	白玉粉	—	0.3	—
うどんスープ	0.2	0.2	—	小豆粉	—	0.2	—
中華スープ	—	—	0.4	塩豆	—	—	0.4
だしの素	0.3	0.2	0.4	ようかん	—	0.7	—
粉末しょう油	0.3	0.2	0.35	きなこ	—	0.2	—
粉末みそ	0.2	0.1	0.35	即席おはぎ	—	0.6	—
ラー油	—	—	小1びん	きびだんご	0.3	—	—
七味	—	1びん	3びん	F. D. フルーツ	—	—	0.25
コショー	—	2びん	3びん	果物缶詰	—	2.4	3.0
さんしょ	1びん	1びん	2びん	干バナナ・リンゴ・パイン	0.6	1.25	2.8
ガーリック	—	—	2びん	甘栗	—	0.4	—
ローレル	—	1びん	1びん	スルメ・干だら・コマイ	0.2	0.3	0.6
マヨネーズ	0.8	0.4	0.3	アメ	0.2	0.9	1.8
ケチャップ	—	—	0.3	インスタントプリン	0.2	0.3	0.45
ゴマ油	—	0.15	0.3	ゼリー	0.1	0.3	0.40
天ぷら油	—	0.25	0.5	ハチミツ	0.25	—	0.25
生みそ	1.5	2.0	—	メープルシロップ	—	—	0.2
酢みそ	0.5	—	—	ジャム	1.0	0.3	—
粉わさび ねりわさび	2 tube	(2缶)	2 tube	緑茶	0.1	0.4	0.1
粉がらし	—	(1缶)	—	麦茶	—	0.15	—
おろししょうが	—	4 tube	4 tube	昆布茶	—	0.1	0.1
おろしにんにく	—	4 tube	6 tube	スキムミルク	—	1.5	3.0
切干大根	0.1	0.1	0.4	粉末ジュース	2	4.2	2.9
割菜	0.05	0.1	0.3	ポッカレモン	—	0.1	0.5
F. D. 玉ネギ	0.5	1.5	3.3	ホイップクリーム	—	0.1	0.15
その他乾燥野菜(自家製)	0.5	1.5	3.5				
干しいたけ	0.05	0.15	0.39	粉末アルコール	—	—	1.2
もみのり	1袋	(2袋)	2袋				

食料リスト (2) 現地購入分

品目	購入場所・量 (kg)			用途
	ピンディ	ギルギット	ナガール	
米	27	3.2		キャラバン・BC
アタ	14			〃
スパゲティ	6			〃
ダル	2			〃
ビスケット	64			全行程
ギー	12			キャラバン・BC
塩	8			全行程
カレー粉	0.6			キャラバン・BC
チリ	0.5		0.5	〃
コショー	0.2			〃
その他スパイス	?	?		〃
ソース	0.25			〃
バター(缶入)	1.8			〃
サラダオイル	0.5			〃
ビネガー	0.6			〃
トマトペースト	1.0			〃
ケチャップ	1.5			〃
乾燥トマト			0.5	〃
マヨネーズ	1.0			〃
砂糖	55			全行程
紅茶	3.9			〃
コーヒー	2.0			〃
オバルチン	3.6			〃
全脂粉乳	5.4			〃
粉ジュース	5.4			〃
スープ	1.0			キャラバン・BC
コンデンスミルク	0.8	2		C1〜C4
玉ネギ	4	10	2	キャラバン・BC
ジャガイモ	5	1		〃
大根	2		2	〃
人参	4			〃
キャベツ	2			〃
ナス	1			〃
ニンニク	0.5			〃
赤カブ	3			〃
トマト	1	2		〃
カボチャ		2		〃
キュウリ		2		〃
菜っぱ		?	?	キャラバン
コンビーフ	6.4			全行程
チキンカレー(缶)	0.8			〃
ジャム	3.4			キャラバン・BC
マンゴー缶詰	1.3			〃
ナシ缶詰	1.8			〃
モモ缶詰	1.7			〃
アメ	2.3			〃
卵		50ケ	50ケ	キャラバン
鶏			8羽	〃 (2羽はヒスパーで)

医　　療

下沢　英二

〈街で……〉

街につきものなのは，風邪症状と下痢である。原因は幾つか考えられる。われわれの場合，5月17日に，ダムサイトで泳いだ後に，7人中5人が，水様下痢に見舞われた。5月21日にも腹痛と水様下痢を来たし，発熱を来たした者などが3名，この時は，その前後に，生焼きのチキンバーガーを，危いと思いながら果敢に食している。また，個々人の経験から言うと，カレーを食した後に下痢が始まる。

症状が風邪症状と，消化器症状から始まることが多い。原因は，ウイルス感染症，時に細菌性下痢を疑う。感染源は，水と，ひき肉料理が最も多いと推定される。また，インド及びパキスタンのカレーは，唐辛子が多量に入っていることから，腸管粘膜の浮腫，ビラン出血を誘うことも推測される。また発熱を伴うことも多く，日本で発熱を経験したことが少い山男にとっては，熱感，脱力感は，意外に不快なものである。

治療は，対症療法。発熱に，アスピリン，インダシン坐薬，が有効。対下痢として，アドソルビン散剤，1g×60包を持って行ったが，1週間で全量を消費した。効薄し。持って行くなら，日本で，有効と思われる合剤を調整した上で，人数×街の滞在日数×1日3投分を，登山前後に必ず遭遇するものとして用意すべきであった。今回，準備段階で手落ちがあって隊員諸君に気の毒した。抗生物質は，細菌性下痢を想定して，ＡＢＰＣ剤を服用することとしたが，効果判定は出来ない。発熱と上気道炎症状を伴う時には，総合感冒剤ダンリッチを，抗生剤と併用した。ウィルス感染症状であるとするなら無効ではあるが，夜間，扇風器を廻しつづけた寝冷え症状には少しは効くであろう。下痢に対する個人的な好みとしては，正露丸と三共胃腸薬，ビオフェルミンを組み合わせることでコントロール可能であった。下痢の脱水に対しては，ミセス・ディヴィスホテルのアル中ルームメイドのサーヴィスによる，やかん一杯の緑茶が有効であった。

〈ナガール　～　キャラバン〉

ラワルピンディーから，4日かけて，ナガールの部落（2,400㍍）に入る。そこに5日滞在，キャラバンは6日間で4,200㍍のブルンバリに入った。

ナガールでは，ボウフラの浮く井戸水を使用していた。煮沸消毒を徹底した。なおかつ下痢，軟便を来たした者は，個々人の好む整腸剤を使用した。一名が，ＡＢＰＣ（ビクシリン）で効なく，サルファ剤（アプシード）により，水様下痢を回数を少く，かつ軟便に快復することができ

た。

夜間は，矢張り寒気つよく，風邪症状が頻発した。うち一名において，咳，発熱を伴う風邪症状が，キャラバン中も続いた。肺及び上気道に所見を認め，抗生剤を投与することにより，投与後３日間で軽快，体調を復した。

キャラバン中,高度障害と思われる頭痛が4,100㍍から出現,満月様顔貌も一過性に出現した。アスピリンとセデスＧで対処。利尿剤は使用せずに復調。（詳細は別稿）

キャラバン中，隊員側のトラブルとしては関節痛と，街でのフットボールによる捻挫後遺症があり，湿布剤と，弾力包帯，消失剤（ダーセン，インダシンカプセル）を使った他は従来の風邪と下痢であった。

ポーター側の訴えとしては，腹痛，腰痛，咳嗽，皮膚疾患が多かった。初めに訴えてくる者に対しては，基本的症状を確かめた上で対症療法を施した。続いてくる十数人以上のポーターに対しては不親切であった。その不親切さは，しかし，日本の病院の外来でいわれているそれと，大差なかった。

キッチンボーイ（Ｋ２の7,000ｍまでハイポーターを務めた小柄ながらタフな男）が，ＢＣで腹痛と発熱を来たし，２日間ダウンしていた。基本的には風邪であった。

〈登山活動〉

登山期間中，ＰＢＣからはビタミンＣ補給のためのハイシーを毎日１錠，服用した。更にＢＣより上では，野菜不足を補うためパンビタン２錠を，連日服用した。多少の過剰は40日間の登攀で障害となるものではないと判断した。ビタミンＣは，過剰分が排泄されるにせよ，耐寒性を増す上で重要なのでハイシーも連用した。

ＰＢＣで１名が，風邪，発熱で休養を余儀なくされた。一般に風邪気味の者が多かったが重篤なものはなく，また高度障害に依る肺水腫を疑わせる症状はなかった。総合感冒剤は需要が多かった。

高度障害は，一過性の頭痛と，顔面浮腫である。新しい高度を経験して降りてきた日，新しい高度に泊まる時は必発と言って良い。鎮痛剤でおさまる者が殆んどであり，ラシックスは，１名が，２回（１錠と半錠）使ったのみであった。

登攀期間中は，全て日本食であった。この間，街で経験したような下痢症状は，みられなかった。このことから街での消化器症状は水か食事に起因していると考えられる。

今回の隊員は大きなトラブルを起こすことはなく，医療担当としてその生命力の強さに，また怪我もなかったルート判断の確かさと幸運に感謝するのみである。１名が，ＢＣに入る時に腹痛と嘔吐をみた。その前日に，関節痛に対してインダシンカプセルをのんで就寝，その翌朝の行動に支障を来たした。ブスコパン２錠で快復，以後は極めて順調であった。もう１名は，Ｃ２に入

って２日目，初めて6,000ｍを経験して5,300ｍに降った翌日，食欲不振と発熱を伴う症状を呈した。高度障害と思われるが，翌日，空身で6,000ｍに登り行動負荷を与えることで以後の行動に合流することができた。この２回以外，行動に差しつかえたエピソードはない。高度障害については次稿を参照してほしい。

〈帰途〉

高度衰退が顕著にあらわれた。12日間，5,200ｍより上に居て，更にそのうち６日間を6,000ｍで過ごした。この間，休養は6,000ｍで１日のみであった。これによる衰退を如実に示したのは，13日目から下へ連絡に降りた石村，下沢であった。下の部落に下る４日間のうち，３日間の行動は30分休んで40分しか動けない有様であった。同行のリエゾンオフィサーの行動は，ベースキャンプ休養をとった余裕として前記２者と対照的であった。結局，12日間の高度衰退と，ＢＣレベルで休養せずに続けた17日間にわたる連続行動は，明らかな過労であった。本隊もＢＣで１日の休養しかとっておらず，うち数名において，かなり消耗なリターンキャラバンであったようだ。現実的な数字として，体重が８～10kg減少し，行動力は15kgの荷を負って１時間連続して歩き続けられなかった。水分を補給するだけでは回復せず，単なる脱水症状ではない，ビスケットで補えるような低血糖ではない，などと考えながら，フラフラ歩き続けた記憶がある。

〈再たび街で〉

やはり下痢が襲ってきた。しかし，概ね，２～３日の下痢のあとは，その下痢，或いは軟便を当然と考え日常生活に支し障えないように行動を合わせることができるようになってきた。繰り返すなら，正露丸とビオフェルミン，そして好みの胃腸薬で，セルフコントロールは可能である。

携帯医薬品一覧書

分類	医薬名	会社名	準備量	使用量	主な摘要
鎮痛・鎮静催眠剤	ベンザリン（錠）	シオノギ	40T	6T	・キャラバン時、頭痛による不眠
	ネルボン（錠）	三共	60T	—	
	ペンタジン（注）	三共	10A	—	
	ソセゴン（注）	山之内	10A	—	
	ホリゾン（注）	山之内	10A		
鎮痛消炎解熱	セデスG（顆）	シオノギ	120P	50P	・高度障害による頭痛
	アスピリン（錠）	バイエル	200T	120T	〃
	ロナール（錠）	鳥居	100T	20T	〃
	ダーゼン（錠）	武田	100T	28T	・関節炎
	インダシン（力）	メルク万有	50	30T	・関節炎
	インダシン（坐）	〃	100S	20S	・腰痛・関節痛・解熱
	メチロン（注）	第一	20A	—	
鎮咳・祛痰剤	新プロチン・コデイン（錠）	三共	120T	—	
	ビソルホン（錠）	田辺	80T	9T	・喫煙者が6000m以上で喀痰排出が困難であった時。
	アロテック（錠）	田辺	80T	—	
風邪薬	新・ルル・ゴールド（錠）	三共	180T	117T	・街での滞在時の風邪症状
	ダンリッチ（カ）	住友	100C	81C	・街・キャラバンでの風邪症状
	ルル・トローチ（錠）	三共	192T	40T	
	複合トローチ（錠）	明治	196T	40T	
意識障害治療剤	ニコリン（注）	武田	10A	—	
鎮痙剤	ブスコパン（錠）	田辺	200T	20T	・街での急性腹症、他ポーター
	ブスコパン（注）	田辺	10A	—	
胃腸薬	武田胃腸薬（散）	武田	250P	180P	・街での下痢、ポーターにも
	三共胃腸薬（散）	三共	250P	180P	〃
	正露丸（錠）	市販	500T	300T	・街の下痢、歯痛。
	ビオフェルミン（錠）	武田	1200T	600T	
下剤	ソルベン（錠）	小野	100T	—	
	テレミン・ソフト（坐）	フナイ	50S	—	
利尿剤	ラシックス（錠）	ヘキスト	100T	1.5T	・2回のみ、1名に使用。
	ラシックス（注）	ヘキスト	20A	—	
	アルダクトン・A（錠）	大日本	100T	—	
	ダイアモックス（注）	レダリー	10A	—	
強心剤昇圧剤	ネオフィリン・M（注）	エーザイ	20A	—	
	エホチール（注）	ベーリンガー	10A	—	
	ノルアドレナリン（注）	三共	10A		
	イノバン（注）	協和醗酵	10A	—	
	セジラニド（注）	三共	10A	—	
	ボスミン（注）	第一	10A	—	
	ジゴシン（錠）	中外	100T	—	
止痢剤	アドソルビン（散）		60g	60g	・街にいる間に品切れ。大幅に不足。
血管拡張剤	カピラン（錠）	武田	500T	—	
スラロイド	デカドロン（注）	メルク万有	10A	—	
	ソルコーテフ0.5（注）	アップジョン	10A	—	
	〃 1.0（注）	アップジョン	5A	—	
	オルガドロン 0.5（錠）	三共	100T	—	
	デキサ・シエロソン（注）	シエリング	5A	—	

分類	医薬品名	会社名	準備量	使用量	主な摘要
ビタミン剤	アリナミンF (錠)	武田	240T	120T	・ポーターに投与が多い。
	ユベラN (錠)	エーザイ	100T	—	
	パンビタンS (錠)	武田	200T	160T	・2T×8人×10日(上部キャンプで常用)
	ハイ・シー (錠)	武田	600T	350T	・1T×8人×40日(ベースより使用)
	フラビタン (注)	東亜栄養	5A	—	
肝疵護剤	タチオン (錠)	山之内	60T	—	
抗ヒスタミン剤	グリチロン (錠)	鳥居	100T	—	
	プロヘパール (〃)	科研薬	200T	—	
	ポララミン (錠)	シエリング	100T	—	
麻酔剤等	硫酸アトロピン (注)		5A	—	
	ペルカミンS (注)		3A	—	
	サクシン (注)	山之内	10A	—	
	1%キシロカイン (注)	藤沢	5本	—	
	4%キシロカインスプレー (雰)	藤沢	1本	—	
	キシロカインゼリー (軟)	藤沢	5本	—	
サルファ剤	バクター (錠)	シオノギ	100T	20T	・街での下痢
抗生剤	アプシード (錠)	第一	500T	20T	
	クロマイ錠 (錠)		100T	—	
	レダマイシン (C)	レタリー	100C	—	
	ケフレックス (C)	シオノギ	200C	80C	・風邪症状
	ビクシリン (C)	明治	200C	200C	・街での下痢、発熱を伴う風邪症状。
	ペントレックス (注)	万有	10A	—	
	セファメジン 1g (注)	藤沢	10A	—	
	ケフリンP 2g (注)	シオノギ	5A	—	
	ゲンタシン (注)	シエリング	10A	—	
眼用	フラビタン 点眼液	東亜栄養	10本	8本	・山で2本、他はポーターに。
	眼軟膏 3種		3本	—	
外用剤	シエリプロクト 坐薬	シエリング	20本	6本	
	〃 軟膏	シエリング	20本	—	
	ユベラクリーム 30g	エーザイ	3本	—	
	オイラックスH軟膏 5g	チバ・ガイギー	20本	2本	
	ホウ酸亜鉛華軟膏		100g	—	
	ゼラップ 200g	三共	15P	11P	・隊員の関節痛、ポーターの腰痛。
	ゲンタシン軟膏 5g	シエリング	10本	3本	・小外傷
	リンデロンVC軟膏 5g	シオノギ	30本	7本	・陽焼け、外傷
	サンスクリーン 30g	カネボウ	15本	12本	
	リップクリーム	エーザイ	40本	13本	
消毒等	オスバン 500mℓ	タケダ	1本	—	
	イソジン液 250mℓ	明治	2本	少々	
	オキシフル 100mℓ	三共	1本	—	
	70%アルコール 500mℓ		1本	—	・街で飲用に供す。
補液	KN−3B 500mℓ	大塚	2本	—	・ポリパックであることがメリット。
	マルトース10 500	大塚	4本	—	
	ラクテックG 500	大塚	4本	—	
	マニトンS 300	杏林	2本	—	
	ヘスパンダー 500	杏林	1本	—	
	20% G 20mℓ	大塚	20本	—	・ポリパックなので割れない!!
	メイロン 40mℓ	大塚	20本	—	

分類	医薬名	会社名	準備量	使用量	主な摘要
材料	O Q 絆 100本		5P	2P	
	サビオ a,ℓ.		5P	3P	・大中小のパック入り、便利。
	包帯 3袋		6本	1巻	
	〃 4袋		6本	2巻	
	ギプス包帯		2巻	—	
	弾力包帯		5巻	1巻	
	滅菌ガーゼ		—	—	・忘れてしまった。
	脱脂綿 50g		5P	—	
	クランメルシーネ 大		2本	—	
	〃 小		2本	—	
	絆創膏 各種		適当	—	・パッキングに使用。
	採血パック		2P	—	
	チーマンカテーテル		5本	—	・吸引用。
	ネラトン（ディスポ）		5本	—	
	眼帯		2組	—	
	油紙 中		2箱	—	
	点滴セット		10	—	
	輸血セット		5	—	
	注射器（ディスポ） 5cc		15	—	
	〃 10cc		25	—	
	〃 20cc		15	—	
	〃 50cc		2	—	
	注射針（各種）		適当	—	
	ベニューラ針（各種）		〃	—	
器材	喉頭鏡		1式	—	
	エアウェイ		1ケ	—	
	気管チューブ（#34.36）		各1	—	
	舌圧子（ディスポ）		2本	—	
	体温計		5本	＋	・適時使用。
	血圧計		1組	—	
	縫合糸		適当		
	アッペ・トレイ		1式	—	・内容をcheckしてへらし、カットダウンにも使えるようにしてある。
	メス（ディスポ）		2本	—	
	手洗ブラシ		2ケ	—	・大学手術場の協力による。
	手袋		5組	—	・北大２外科詰所の協力による。
	AMBU MASK		1組	—	
	ポータブル吸引パック		1組	—	
	ステト・スコープ		2本	＋	・個人持、ポーター雇用時使ったのみ。
	EKG（ポータブル）		1組	＋	・BCまでのデータ収集。
	腰椎穿刺針		3本	—	北大麻酔科佐々木先生の御協力。

- 薬品は、入国時の量を記す。キャラバン前に一部削除したものもある。
- 使用は入国から登山終了時であり、帰りのキャラバンは含まない。
- 使用量には実際使用量とポーターへの投与、隊員の個人持ちが含まれる。
- 使用量は、登山終了時の残量から類推している。
- 薬品は、日本新薬協会を通じて御協力いただいた。また一部は個人的な協力も得ている。商品名と会社名を記して謝意を表したい。
- 材料・器機は、殆んどを竹山医療機器ＫＫにおねがいした。細かい品まで集めて下さったことを感謝する。

高所馴応

下沢英二

今回は，当初より全員登頂を予定して行動を考えていた。

〈メンバー構成〉

表1の如く，年の多い4人が6,000m以上の経験者である。とくにうち2名は，前年同時期のカラコラムを経験している。更に石村は，そのあと，ネパールに入り，メラピーク隊に参加したり，トレッキングを行ったりしている。4名の若年者は，国内経験のみである。夫々2人ずつのペアが想定できる。

〈行動計画〉

構成要素の異る8人を，ほぼ同じく順応させていく形，荷上げルート工作を，プログラムしなければならない。

基本として，次の項目を設定した。

①キャンプ間の高度を500m～800mの間に設定する。

次のキャンプまで2度以上の荷上げと，それに続く偵察。ルート工作で，そのキャンプを越えた高さを2度以上経験したのちに，初めて，次のキャンプに泊る。

③行動5日に対して，休養を2日間続けてベースキャンプでとる。

④荷上げ重量は，過度にならないこと。

〈キャンプ，荷物，時間〉

結果としては，表2に見るように，キャンプ間の高度差は，ほぼ基本通りであった。ただ，C3—C4が700mと遠かった。これは，コル上C3が6,200mぐらいと予想していたのが，実際は6,000mと低かったこと，C2—C3間のアイスウォールにキャンプ地を制約されたことによる。下の方が，キャンプ間の高度差は小さいが，水平距離が長いためである。

荷上げ量は，概略の数字である，個人装備の多寡により3～4kgは異なる。結果的にみて，4,500m付近では20kg，5,000mへは15kgをこえないこと，6,000mへは12,5kg　6,500mへは10kgが負担とならない量である。これは，極めて少い荷物量と思われるが，われわれが，馴化のための荷上げを行った時の荷物量であって，十分な馴化后の荷上げでないこと，7,000m峰の計画では，上部キャンプの荷上げ量は，たちまち小さくなってしまうことによる。

所要時間は，非常にバラツキがある。個人的バラツキは別として，1回目の荷上げ時間は，非常に長い。2回目はその70%ぐらいでのぼれるようになる。3回目は更に短かくなる。しかしそ

の后は,荷物量で大幅なちがいがあるし,体調で異なる。下のキャンプで休んだあと第1日目は,やはりまた時間が少しかかるようになるが,次には極めて早くのぼれるようになる。

所要時間は,個々人の馴化の良いバロメーターである。

〈行動パターン〉

図の1を参照されたい。BCからC1への行動は,3日間荷上げを行っている。C1は,5,000m未満であるし,PBC—BC間の行動を含めて,7日間行動しているので,休養を2日とっている。次のステージは,C1—C3間の荷上げとルート工作を,2隊に分けて行っている。5日間をかけて,C2建設と,C3までの工作を行って,2日間の休養をとっている。次のステージは,C2に入り,C3への荷上げと,更にC4への工作,荷上げを行うのに7日間要した。予定ではここで,BC,又はC1へ降りて最后の登頂段階を形づくるはずであったが,C3での消耗が少いことから,休養をC3で行い,全員同時にピークを目指した点が,当初の行動予定とずれた点である。行動日数,荷上げ量の配分が,極めてスムーズに行われ得たのが,勝因と思う。

しかし,最后のC2以上の滞在が12日連続であったこと,ことにC3以上に6日連続泊ったことは,消耗を来たした。帰りのキャラバンで,隊員の多くに,体力の衰退,とくに予備力のなかったこととして表われた。頑張って歩くのだが,気力に体力がついていかないという形である。BCにもどった翌日に,直ちに下へ下った隊員には顕著であった。

〈高度障害〉

基本的には,頭痛,浮腫,風邪症状,消化器症状の4種であった。脳浮腫,肺水腫の徴候は認められなかった。表3に主な経過を示したが,そのチェックは不完全で,傾向を示すにすぎない。

PBC(4,200m)に達して全員に頭痛が出た。また,何人かに顔のむくみがあった。1～2日で軽快,行動に支障はない。BCはPBCと殆んど高さにちがいがなく6回の荷上げで完全に馴応しており,以后著明な症状はなく十分休養の場となっている。

C1には2隊にわかれて入った。矢張り頭痛とむくみが出ている。この高度には容易に慣れた。C2でも同様であり,一つの傾向として,新しい高度で泊った夜に,高度障害の症状が出る,と云える。

7月2日～3日にかけて,1名が6,000mに達してC2において来た後に風邪症状,及び発熱を来たし翌日に消化器症状も伴っている。もう一つの傾向として,新しい高度に達した後に高度障害が発現している。

C3以上においては,C3という新しい高度に入った夜,そして翌日6,700mという新しい高度に達した日の夜にも各々,症状が,ほぼ全員に出ている。

しかし,これは,一般に云われている6,000mの一つの壁に依るものであるとも云える。

2～3日の6,000m以上への行動によってC3　6,000mには馴応したものと考えて良い。

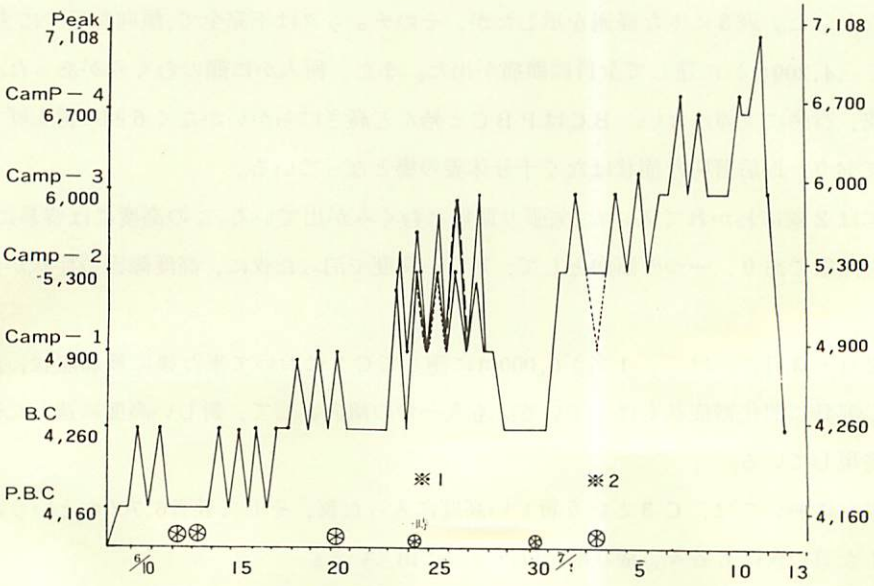
最后のＣ４　6,700ｍには，十分な馴応はなされていないと判断する。最終日の行動時間から推してである。ここでＣ１あたりへおりたなら，次の行動に有利であったことは現地でも考えたが，天候周期と，体力の予備力との兼ねあいで，今回の行動が決定された。

〈高所経験と行動〉

高所経験と行動の間（表１と表３参照）に相関するファクターは見られない。経験者の有利な点は，高所での行動の苦しさを予測できるので，歩行速度と呼吸法に自分なりのやり方を持って歩ける点にある。印象としては，前年の２隊員の行動には，高度の慣れがある。しかし昨年の馴応との関連は判らない。

〈全体に〉全体として，今回の馴応はスムーズであった。最初は遅々としてすすまないように感じても，原則的な５日行動，２日休息のペースを守ることが，上部での馴応を保障するものである。今回は，7,000ｍ級の山であったので，上部での行動をつめることが出来たが，例外と考えるべきである。隊員各自が殆んど障害を出さなかったことは，隊にとってラッキーであったし，個々人の頑張りもまたあったからであろう。これが，画期的な，全員同時登頂の成功因であることは論をまたない。

図１　高度馴化行動パターン



※１：24～27日はＡ・Ｂ２班にわけて交互に荷上げとルート工作。
※２：破線はC_1の食料をC_2からとりに行ったもの（休養日、3名で）

表1・各隊員の高所経験

隊員	歳	年	地域	最高々度	登山経験
K．E	31	1972年 1974年	北米、マッキンリー インド、トリスル	6,194 m Ca 4,000	13年
E．S	31	1975年	ネパール、ヒマラヤ	Ca 5,850	13年
O．H	27	1978年	カラコラム、ドレ・フェ・カル	6,447	8年
A．I	26	1974年 1975年 1978年	インド、トリスル ネパール、ヒマラヤ カラコラム、ドレ・フェ・カル	Ca 4,000 Ca 6,000 6,447	8年
J．T	26		国内		6年
A．K	23		〃		6年
S．I	23		〃		4年
H．S	21		〃		4年

表2　各キャンプ間　行動概要

キャンプ	高度 m	高度差 m	※荷上量 kg	※所要時間 時間	宿泊数 回
PeaK	7,108				
		400	-	4°15′	
C－4	6,700				1
		700	8	3°30′	
C－3	6,000				4＋1
		750	12.5	3°30′	
C－2	5,250				5
		350	12.5	1°15′	
C－1	4,900				5
		640	12－16	2°30′	
B．C	4,260				※※ 7＋3
		100	16－28	2°30′	
P.B.C	4,160				8

※荷物・時間は大体の平均的なものである
※7＋3とは、連続7日及び3日の10日を2期に分けて泊ったことを意味する

表3　行動と各人の高度障害

月/日	発	到達点	泊	K・E	E・S	O・H	A・I	J・T	A・K	S・I	H・S
6/9	—	4160	P.B.C	○	○○	○	○	○○	○	○○	○
10	P.B.C	4260	〃	○	○○	○	○	○	○○	○○	○
11	〃	〃	〃						▲		
12	〃	停滞	〃						▲		
13	〃	〃	〃						▲		
14	〃	4260	〃						▲		
15	〃	〃	〃							□	
16	〃	〃	〃							□	
17	P.B.C	〃	B.C								△
18	B.C	4650	〃								
19	〃	4900	〃								
20	〃	〃	〃								
21	〃	停滞	〃								
22	〃	〃	〃								
23	B.C	5300	C1		○					○	
24	C1	5570	〃						○○		
25	〃	5600	〃								
26	〃	5900	〃								
27	〃	5950	〃								
28	〃	⟶	B.C								
29	B.C	停滞	〃								
30	〃	〃	〃								
7/1	〃	⟶	C2								
2	C2	6000	〃		○			○	○	□	
3	〃	停滞	〃							×△	
4	〃	6000	〃	○	○			○	○		
5	〃	6300	〃		▲			○	○		
6	〃	⟶	C3	○	○	○	○	○	○	○	○
7	C3	6700	〃	○	○			○○	○	○	○
8	〃	6700	〃		○			○			○
9	〃	停滞	〃								
10	〃	6800	C4		○			○	○	○	
11	C4	7108	C3	○	△○	○○	○	○	○	○	○
12	C3	⟶	B.C			○					

○ 頭痛　△ 消化器症状　□ 風邪症状
○ 顔のむくみ　▲ 下痢　× 発熱

高所医学について

越前谷　幸　平

はじめに

以前より研究の進んでいた高所馴応や高山病の病態については枚挙する暇がない程，文献の数は多い。しかしそれらを調べて感ずるのは，実際に即した文献の少ないことである。国内においては翻訳された成書が数冊あるのみで特に予防，症状，治療を含み，医師ならぬ一般登山者が読んで不安なく高所に向うことが出来るような成書にあっては皆無といってよい。山岳雑誌に掲載される高度の内容を持つ論文も仲々に登山者の高度障害を軽減させ，気を休ませてくれる役には立ち難い。本来，高山病，すなわち高度馴応の不適応により引き起こされる病態は，極論すればジョギングを新たに始めた人にみられる，筋肉痛や走行の辛さと同質の意味を持っており，平常健康に生活していた人が，それにより突然死亡する場合があるのも他の一定の負荷を持つスポーツと変わりはない。本質的に人間は，環境変化に対して一定の適応能力を持つものであり，環境の変化が適応能力を越えた場合に異常を引き起こし，病態を創り出すものである。殆んどの人々が適応能力に合った方法で環境の変化に対処していけば，ある程度までは，不適応による種々の病態が重篤になることはない。

この環境への適応限界を越える場合には，誰れしも障害が出現してくるが，更に特殊な訓練を積むことにより，一部の人々にあってはこの限界をある程度引き上げることも出来る。このような考え方に立ち，われわれは今回，登山を始めて数年という若年者も含めて7,100Mの高度に全員同時登頂を試み，成功した。更に過去にわれわれの出した数隊の知見も含め，高所馴応について若干の文献的考察も加えて，現在われわれのとる基本的な考え方を明らかにしたい。更に高所における中枢神経系の病態についても触れるため，今回の文が若干理解しにくくなることは御諒解いただきたい。

適応馴化ということについて

多くの文が高所馴応や高山病について書かれているが，山岳書にみられる論文には正確な語彙が用いられていないことがあり，ある論文と他の論文では，同じことを述べていながら別々の言葉を用いていたり，それと逆の場合があったりする。例えば，今ここで，よく用いられる高度馴化という言葉（正しくは低圧馴化なのであるが）について言えば，「馴化」というのは，広義の「適応」のうち，温度や気圧などの唯一つの環境要因をかえた条件で身体に起こる適応性の変化を示し，「低圧馴化」という言葉は，低圧のみに対するそのような変化を示している。これに対

し，個体に起こる一過性の変化のうち，種々の気候，季節，地理的条件などの複合の要件で起こる適応性変化が風土馴応であり，そのうち，高所に移住した時に起こる馴れを高所馴応というのである。同じことを例にとって，温度について言ってみると，『冬の戸外で飼育した動物にみられる風土馴応と，実験室内で低温に曝した動物にみられる馴化とは異なる』というように用いられることになる。

風土馴応においては，複合の環境要因の変化が，同時に働いている訳であり，実験条件下などで行なう馴化とは，本質的に異ったものである。これは，低圧室内の低圧馴化と，登山における高所馴応とについても，同様のことが言える。

また，文中の「適応」という言葉も，正しくは，死なない程度の異常な環境に継続して，或いは短時間ずつ繰り返して曝露された時，その環境条件下に強くなるということを示す。これも厳密には，個体の「生理学的適応」と，より広い「生物学的適応」とに分かれて使用されるものであるが，われわれはこれを，混ぜて使用している訳であり，多くは生理学的適応の意味に用いている。

動物は，このような馴応では，二つの型をとるが，その一つは，環境条件に応じ身体を変化させて合わせるものであり，他方は身体の内部の状態を調節させて，恒常性を保つものである。人では，主に後者の型をとり，調節反応が働いて，内部の恒常性（これをホメオスターシスと呼ぶ）が保たれるが，ある限界を越えると，この調節は役立たなくなり，内部状態の急激な変化をみる。このようにして，ある特殊な環境に長く曝露して，その環境に対する抵抗が増加した時，別の要因に対する抵抗が強まることがあり，それとは逆に弱まることもある。これはそれぞれ，正又は負の交叉適応と呼ばれる。例えば，寒冷と低酸素は，負の適応反応を示す例として，よく知られている。すなわち，寒さに馴れた動物は，低酸素に対する抵抗力が弱く，低酸素に馴れた動物は，寒さに対する抵抗力が弱いということである。このことは，低酸素と寒冷とを兼ね備えた高所に挑もうとする者にとっては，重要な意味を持ってくる。特に最近の様に，厳冬期のヒマラヤのように両方の環境要因が，極限的に存在している場合の困難さは，春秋季に比して数段勝っていると言える。

生体が急に新しい環境条件に曝露された時の適応性変化は，加えられた刺激―ストレスの質の強さと時間とに関係する。そして，その刺激の種類が，生体の内部環境をより直接的に変化させるものであればある程，適応性変化が起こるまでに必要な曝露時間は短い。寒冷と低酸素について言えば，寒冷よりも低酸素の方が，より直接的に働くことは，論を待たない。これらの事実は，先きに述べた厳冬期ヒマラヤ登山の際の馴応の仕方に，多くの示唆を与えてくれる。より短期間のうちに，強い低酸素刺激を与えるような登攀様式をとって，先に高所キャンプを設営しておき，次いで，時間の許す範囲内で荷上げを完了させ，最後に寒冷に対する充分な防御をしつつ，酸素

を使用して，一気に頂上へ達する，というような一つのヒナ型を考えることが出来る。

高所馴応は，実験的に行なわれるよりも，むしろ登山の際に，副次的にデータを収集してなされることが多いため，サンプリングに難点があるが，それに対し，実験室内の低圧馴化では，データをとり乍ら環境要因を極限にまで高めることが可能であるため，多くの示唆に富んだ知見を提供してくれる。例えば，低圧室内の馴化のパターンは，人においては，大別される二つの型をとることが知られている。即ち，すみやかに低圧に馴化する者と馴化しにくい者とが居り，更に後者の中には，症候学的には，最初は所見がないが，ある程度時間が経った時に，急激に症状が出てきて，馴化が成されていないことを示す者も含まれる。これもまた登山隊を組織して，高所に登る時に忘れてはならない知見である。隊員の低酸素環境に対する馴化は，個別にいずれかの型に含まれる筈であり，更に諸々の他の要因の影響を受ける訳であるから，登攀のパターンは，そのような基礎に立ち,個々の隊員に適合したものでなければ,馴化に失敗する隊員が出てきて，貴重な人命を失うことにもなりかねない。何の症状も出さずに登っている隊員でも，途中で急激な症状の出現をみることがあるから，軽微な症状の変化にも，気を配らねばならない。このような場合には，自覚症状が乏しいために，早い馴応をする隊員と一緒の登攀を続け，症状の変化に対する充分な監視の眼がないうちに，急激に症状が悪化し，しかも高所であることが災いして，早期に収容出来ない事態を生じうる。

高山病について（中枢神経系の変化を中心に）

環境要因の変化が,馴応の速度を越える場合には,それに即応した病態が出現する。ここでは，高所という環境により引き起こされる高山病のうち，中枢神経系の変化について主に述べる。

高山病の病態の本質は，様々な面から検討が加えられているが，主たるものは，呼吸—循環器系，中枢神経系，液性（体液，血液）の変化と，それらを巡る代謝系の変化である。中枢神経系の中でも，脳は特に単位体積当りの酸素消費量が多いため，とりわけ低酸素状態に鋭敏であり，高所に到れば，直ちに症状が出現してくる。平地においても，頭蓋内の圧が亢進した時にみられるような頭痛，嘔気から始まり，血管分布や構築の上で，低酸素に弱い脳幹部の症状が，ふらつき,めまい,呼吸パターンの変化というような形をとって現われてくる。呼吸パターンの変化は，サインカーブを画くようにして，深くなったり浅くなったりする，チェイン・ストークス呼吸として知られているものであるが，高所に行ったことのある人であれば，誰しもこれが，夜間に強いことはよく知っている。更にまた，高度を上げて最初に泊った翌朝の調子が悪いことも，よく経験する事である。これらは，脳幹部の延髄にある呼吸中枢の低酸素状態と，それに基づく脳血流の循環障害によるものであり，眠って了えば呼吸が止ってしまう「 ondine の呪い」として医学的に知られた病態と同一の原因によるものである。これは,延髄に障害のある患者にみられ，覚醒していれば，意識下に努力性の呼吸が可能で，正常の酸素濃度が保たれるが，睡眠時には，

呼吸中枢の機能低下のために，正常な呼吸が出来ず，酸素濃度が低下することが原因となっている。これは，高山病においては，意識下に努力性呼吸をして酸素供給量を高めてやれば，却って高山病の症状が軽くなることを示し，一定の高度に達すれば，病態をすすめないために睡眠時に酸素を使用する方法が正しいことを示している。

このような脳幹部の症状と殆んど時期を同じくして出現するのが，前頭葉を中心とした症状である。これは奇妙なイライラや興奮，不穏状態といった，性格の変化から始まる意識障害の進行という形をとるが，登山隊が高度に閉塞された社会を形成していて，密度の高い人間間の接触が行なわれているため，比較的早期に，その異変には気付かれやすい。しかし，困難さを求める登山者の気質が，偏執的で，反社会的面を多く兼ね備えているという報告にもみられるように，隊の内部には，開放された一般社会とは異った，特異な人間関係が営まれている一面もあり，この異変が高山病の初期症状であるとの認識をもっていない場合もある。特に，普段から山登りを共にしている仲間ではなかったり，長い間，同じ山岳団体に所属していた人間の集団でない隊においては，この様な症状の隊員の方が多くなってくれば，新たに異様な社会関係が成立してしまう場合すらある。ここまで隊総体としての病態が進まなくとも，軽微な症状の総和が，隊の行動様式に影響を与える可能性があることは，予め知っておかねばならないことである。

意識障害の進行は，更に思考能力の低下へと進み，不注意，怠慢，物忘れなどのだらしなさが目立ってきて，終りには，傾眠状態へと陥んでいく。このようにして，変化が進むうちには，常に血液をも含めた他の臓器の変化が，共に進行しており，時によっては，それらが相乗して別の悪い病態をつくり出してしまうこともある。中枢神経の細胞の変化は，漸次に進む限り，急激な症状の悪化をみることはあまりない。しかし，呼吸—循環器系に急激な変化が生じたために，血中の酸素濃度が急に低下した場合や，脳の血流循環に急激な変化が起った場合には，すみやかに意識を消失する。脳細胞が完全な無酸素状態，すなわち循環停止の状態には，わずか4分間しか耐えられないことは周知の事実である。

脳循環に起因する病態は所謂，脳卒中として知られており，その主たるものは，脳出血と，脳血栓であり，前者は素地として存在している脳血管の変化があるが，高所登山をする人々では，このような変化が起きていることは稀れで，高齢の隊長などでなければ問題にならない。しかし脳血栓の起りうるリスクは，平地に比べると高く，それを増す要素として，馴応の結果起こる赤血球の増加や，運動時の過呼吸により肺から多量の水分が失われることなどによる脱水などが挙げられ，これが血液の粘性を高め，凝血しやすい状態をつくっている。更に，これに複合の要素が関与し，凝固系の変化をきたし，血栓が形成されると，それが脳血管であれば，意識消失，麻痺の出現などという形をとり，肺であれば，呼吸困難という症状を呈し，血流遮断による直接的で，かつ急激な症状が出現する。

しかし後者にあっては，高所故に常に一定の呼吸困難感が存在し，またこのような血栓症と考えられる症例の多くに，不調な状態が前駆していることもあって，見逃がされて了うこともあるものと考えられる。このため，二次的に起こった肺高血圧などによる肺水腫の出現時に，改めて病態の重篤なことに気付かれるが，ここまで進んだ病態に対処することは困難なため，不幸な転帰をとる可能性が高い。所謂，高所における急性肺水腫症には，このような病態の進行が深く関与しているように考えられる。

脳血栓について言えば，過去の例で，左片麻痺が完全に改善した例もみられ，これは大脳の中大脳動脈領域などの閉塞，再開通という過程による症状の改善であろう。しかし，椎骨脳底動脈系に閉塞が起これば，突然の意識消失に続く呼吸停止という形をとるであろうから，回復する余地はなく，その場で絶命してしまうものと考えられる。過去の文献中の高所における突然死の例の中には，このような病態が起こったものが，少なからず存在するものと考えられる。

これらの重篤な病態を呈するに至った例は，多くが予め可成り重度の低酸素脳症の症状を呈しており，適切な処置の遅延が招いた悲劇も少なくはない。低酸素脳症は，今まで述べてきたように，脳の低酸素により引き起こされる訳だが，様々な複合の病態により成り立っている。最近，これにより出現する広汎な脳浮腫に注目した論文もみられるようになってきた。筆者ら脳神経外科医の経験する高度の脳浮腫は，血管閉塞により，梗塞巣に一致して出現するもの，交通事故などの脳挫傷によるもの，脳腫瘍や血腫周辺に存在するものなどと多様であるが，特に脳炎などの際には，低酸素脳症の際の浮腫に類似したものがみられることがある。しかし，共通して言えることは，脳浮腫そのものについて言えば，頭蓋内圧が高くとも，それだけでは，突発的に限局した症状や，強い意識障害は出にくいということであり，特に漸次に進行する浮腫の場合は，その程度に比して症状が軽いことをよく経験する。低酸素脳症の病態として，脳全体の機能低下があり，脳浮腫と，更にそれにより引き起こされる脳血流循環の低下が存在することは明らかであるが，これのみで突然，意識障害が悪化すると考えるのは無理があるようだ。強い脳浮腫の進行に伴なう急激な症状の悪化は，脳欹頓（のうかんとん）による脳幹部の圧迫の際にみられるが，この場合にはそれ以前に進行する様々な症状の変化を必ず伴っており，過去の高山病の例の中に，このような例を見出すことは出来なかった。われわれの考える高所における突然死は，やはり呼吸—循環器系に起こった急激で，かつ重篤な変化か，時には脳血管障害に基づくものであり，殆んどは，これらの原因によるものと考えて差支えないように思う。

いずれにしろ，これらの突然に不幸な転帰をとった人々の多くが，長短に抱らず，様々の不調を訴えていることは前述した通りであるが，血栓などの血管閉塞病変は，前駆症状を伴わないこともあり，このような症状はむしろ最終的な病態を引き起こす素地があり，更に何らかの負荷が加えられて症状が出現したものと考えてよいであろう。しかし，これとは別に心機能などの場合

は，前述の内部の恒常性（ホメオスターシス）の崩壊前に，明確な警告症状を発することはよく知られている。低酸素により，心臓の恒常性が危機に曝されると，馴応していないにも拘らず，急激に血圧低下，脈拍減少が起こり，心臓は破綻に対する防御態勢を整えたことを示す。このような状態では，もはやその高度に留ることは危険である。隊の中で，その隊員をすみやかに低所へ下山させるための全ての努力が払われなければならないことは論を待たない。繰返して言えば，出来るだけ早期のうちに，症状を適確にとらえ，すみやかに対処することのみが，悲劇を救うということは，特に高山病に限らず，全ての病者について言える正しい認識である。

高所登山におけるその他の事柄（特に疲労について）

高所における環境要因は，低圧と寒冷がその主たる部分であるが，高所登山に際しては，更にその上に疲労という別の要因が負荷されてくる。疲労の病態は，肉体的な疲労と，精神的な疲労とに分けることが出来るが，高所登山では，その両者が混然一体となって，強く心身に負荷を加えるため，その他の環境要因の身体に対する働きは，相乗される結果を生み出す。疲労が大きくなれば，低圧および寒冷に対する馴化能力は著しく減退し，高所での衰退を早め，高山病は凍傷といった病態を引き起こし易くなる。低地においても，疲労が大きい時には，凍傷に患り易いのはよく知られているが，寒冷に対する負の交叉適応要因である低圧条件下では，特にそれが顕著となる。肉体的な苦痛と，低酸素による軽度の意識障害下では，ともすれば忘れ勝ちになり易いが，高所登攀における精神的な緊張度は非常に高く，このための精神的な疲労の上に更に，隊社会内部における心理的な負担なども加わることもある。この為，重要な判断で誤りを犯したり，人によっては精神的な衰退をすることすらある。心理的に安定した状態を保つためには，精神的な疲労が蓄積していかないことが必要であり，肉体的疲労については早晩，避け難いものとは言え，高所での登攀が長期に及び，精神的にも，肉体的にも衰退してしまう前に，一度疲労を回復させることは重要である。最も重要な頂上攻撃の前にこそ，このような心理的な安定と，余裕が必要である。登攀計画についても，高所馴応のプログラムの中に，疲労からの回復の時間を確実に定めておくことが，不可欠であり，このことが疲労により生み出されるかも知れない小さなミスによって不可逆的な状態に陥って了うことを未然に防ぐことになる。われわれについて言えば，実際的に馴応や荷上げのため，高所で活動する期間は一週間位が最も適していると考えているが，この後の疲労の回復のためには，1日では不充分であり，2日程が必要であると考えて対処している。

高山病の予防や治療について

今まで述べたような病態が起こりうるとすれば，どのように予防すれば，それを防げるのであろうか。高山病の予防については，低地での予防と高所に至っての予防を考えることが出来る。無論，原則的に出発前の健康診断では，全く異常がない場合について話をすすめる。低地での予

防は,低圧室内の低圧馴化訓練などの,限られた状況でしか出来ないものを除き,概して言えば,酸素要求量の多い運動を行ない，組織への酸素供給量と，組織自体の酸素摂取能力を高める訓練をすることにしぼられる。これと共に筋の一定の持久力をも高めるような運動を加味し，更に冬期間には可及的に寒冷に身体を慣らす訓練をすれば，片寄らずに馴応に適した身体的状況をつくることが出来る。このうち運動訓練については約３ヶ月で一定のレベルに達することが知られており，寒冷についても寒冷地に２～３年間居住すると馴化することが，北大生についての寒冷馴化の研究で知られている。運動訓練の方法論については，秀れた論文もあり，よく知られるところであるので，ここでは省略するが，極めて完成度の高い方法もみられている。

高所に至り，登攀活動に入ってからの予防は，一つには個人の馴応の限界を越えた行動様式をとらないということであり，更に隊全体としては，肉体的な，或いは精神的な疲労が過重にならないような馴応―荷上げ計画で登攀に臨むということである。本来,高所登山を行なおうとする人は，高所で起こる病態についても基本的なことを理解し，自分の身体の変化に対して適確な判断をすることが要求される筈であるが，実際には初めて経験する変化に緻密な判断が及ばないことも多く，意識状態の変化が，更にそれを誤らせる原因ともなる。従って隊の中に，必ずいつでも適確な判断を下しうる人間を含めていることが望ましく，それには，高所経験を持った人が登攀隊長のような形で常に隊員と行動を共にしながら，実際的な登攀計画を遂行してゆく形をとるのがよい。このようにして，短期の登攀計画が個人の行動内容や負荷量により決定され，大筋として最終的な長期計画に沿うように，すすめられていけば，事故や高山病のリスクを小さくすることが可能である。これを行うためには，上部キャンプに滞在する期間を短くする努力をしたり，下部キャンプを間引きしたりして，可能な限り，荷上げ量を抑えることが前提となるが，更に確実に多くの隊員を登頂させようとする場合は，主要登攀路にザイルを張りめぐらす，所謂ザイルバーンなどが必要とされることがあろう。われわれは今回の隊については，登路がそれ程困難でないことが予想されたこともあり，ＰＢＣ以上ではポーターを使わなかったが，所謂シェルパレス登山であれば，全員登頂が出来ず，全員登頂をすれば荷上げ必要量が，担送可能量を上まわるような場合には，どちらを選ぶのが本来的な姿といえるのだろうか。

いずれにしても，高山病に対する予防の基本になるのは，個人の高山病に対する心構えと，隊全体の余裕であると言ってよいかも知れない。

治療については，利尿剤や強心剤の使用が知られているが，ここでは高山病の治療の将来的な展望についての私見を述べる。

先ず，中枢神経系に起こる病態に対する治療薬については，低酸素脳症により引き起こされる脳血流の循環障害に対して，脳血流改善剤の使用が考えられよう。これは脳血流の改善を促すことで，引いては脳浮腫についても効果が考えられる。使用される薬剤としては，ジヒドロエルゴ

トキシン（ヒデルギン）や，セロクラールなどが適していようか。更に，前述した「 ondine の呪い」に対するものとしては，副作用の少ない呼吸促進剤の使用が考えられ，これには，塩酸ジフメリン（レフメリン）などを就寝前に飲むとよいのではなかろうか。更に，脳循環の面で，明確にその改善効果が証明されており，呼吸中枢に対する刺激ということでも意味のある3％炭酸ガス加酸素の使用も考えられて然るべきであろう。これについては，われわれは実際に近い将来に出される遠征の際に使用を考えている。

現在，脳血管障害患者の治療に使用されている炭酸ガスボンベの内容の組成は，上記のものと同一であり，装填に関しては，何ら問題はない。

重篤な障害の起こった場合の医学的な対処の仕方は，現在でもなかなか困難であるが，浮腫による脳圧の亢進を改善させ，全身の浮腫もまた，抑えるものとして，現在の利尿剤の使用に加えて，マニトール，グリセオールなど脳圧降下剤が使われれば，救命しうる例が生れてくるかもしれない。また，血中の酸素解離度を高める薬剤や酸素運搬量を増大させるフルオロカーボンのような薬剤の使用，とくに後者に関しては，重篤な高山病のような場合には，市販を待って（57年2月という），積極的に使用すべきであろう。

しかし，あくまでも治療の原則は，高圧（あるいは正常圧）の大気に曝露させることであるから，アコンカグアで75年に試みられたような，簡易加圧テントや，同様にアンデスで80年に試みられたような軽量型高圧治療室も大きな遠征隊向けに，更に改善されて実用に供される日が近いことを期待するものである。

以上，高所登山に対するわれわれの考え方を述べたが，今回の隊ではどのようにこのような考え方を実践していったかについては，別稿の高所馴応報告，登攀のサマリーなどを読んで理解していただきたい。

*「 ondine の呪い」　ondine はギリシャ神話の水の精であり，彼女の愛が人間に受け入れられないため，呪いをかけ，そのためその人間は全ての自律神経の活動が停止して了ったという話を解釈して名付けられた病態である。

主な参考文献：（脳外科関係および特殊領域の文献は省略した）

James , A , Wilkeson ; Medical problems of high altitude ,

In : Medicine for muntaineering , The mountaineerers , Seattle

In : Handbok of phisiology :

Adaptation to the environment ,

chapter 27 : terrestrial animals in cold ;

man in polar regions .

Respiration Ⅱ,

chapter 36; Muscular excersise

chapter 37; Breath holding

Zdzislaw . Ryn. : Psychopathology in alpinism :

Acta . Med . Pol (12) 453～467, 1972.

日本山岳会：『高所登山研究』，山と渓谷社 1975

住吉仙也，中島道郎，広谷光一郎，大森薫雄，辰沼広吉，長尾悌夫：

『1970年エベレスト登山隊報告隊報告書・第Ⅱ部学術報告』日本山岳会，1972

原真，橋本「8,000メートルの高度馴応—マカル—東南稜の実例を基に」

『遙かなる未踏の尾根—マカルー1970』日本山岳会，東海支部茗渓堂P290～298，1972

伊藤真次『適応のしくみ』北大図書刊行会1974,

伊藤真次教授1969年生理学講議ノート

日本大学医学部山岳部，高所医学について，岩と雪31号，P37～41.

永坂鉄夫，高所医学の基本的問題，岩と雪，P20～25,

岩と雪編集部，高山病の体験と高所適応，岩と雪37号，P21～53.

松永敏郎，富士山における高山病遭難，岩と雪51号，P42～48.

中島道郎，高山病の本質を考える，岩と雪56号，P38～43.

御手洗玄洋，私の高所医学登山，岩と雪66号，P40～43.

原真，高所生理学，岩と雪70号，P40～43.

島岡清，高所登山とトレーニング，岩と雪75号，P37～41.

藤江ら，高度25,000フィートにおける低酸素負荷時の有効意識時間と自覚症状について，航空医学実験隊報告6巻4号，P150～157，1966

大島正光，「航空宇宙生理学」『生理学大系，第3編』医学書院1971

「運動の生理学」『生理学大系，第4編』医学書院1971

飯田 誠，「登山のための生理学」『登山教室8健康管理と救急法』山と渓谷社1979

越前谷幸平，「医療報告」『マッキンレー登頂報告書』北大山岳部1973

カラコラムの氷河の氷をさぐる

学術調査報告、氷河氷及び積雪の酸素安定同位体比分析の結果

池上　宏一　花井　　修

高度は8,000mに及び，全長は3,500kmにも達するチベット・ヒマラヤ山塊は，雪と氷の世界であり，大小数多くの氷河の活動する所である。氷河は単に地表面を被うだけでなく，その活動は地表を削り，特徴的な地形を造り出している。よく知られているように，カールもその1つである。

ところで，地球の長い歴史の中で，現在に至る30億年程は，水が気相，液相，固相の3つの相で地球上を循環し，環境の移り変わりに対応してきた時代である。そして，成層圏に迫らんとする高峰を抱えた，ヒマラヤ，カラコラム地域が，地球的規模での水の動きに大きく関与していることは揺るぎない事実である。

この調査の目的は，氷河を構成する水（氷や積雪）そのものの性質を調べることによって，カラコラムにおける水の動き，さらに自然環境を探る一助にしようとするものである。水そのものの性質というのは，それを構成する元素である水素と酸素のうち，酸素の安定同位体比のことである。天然には，酸素の同位体は質量数16，17，18の3種があり，それらの存在比は^{16}Oが約99.76%，^{17}Oが0.04%，^{18}Oが0.20%である。従って，安定同位体比の測定とは^{16}Oに対して^{18}Oがどの程度含まれているか，即ち，^{18}O／^{16}Oの測定を行うということである。

水循環における^{18}Oの濃度変化

ここで，水の動きにともない，天然水中の^{18}Oの濃度変化がどのようにして起こるのか，一般的状況を説明しておこう。地球上の大部分の水は海洋にあるが，そこから蒸発した水は，大気中の水蒸気となる。そして，それは雨，あるいは雪となって地上に降ってくる。直接，海へと戻るものもあれば，湖や河川を経由するもの，土壌に吸収されるもの，生物体へ取り込まれるもの，また，氷河の氷となって数万年にもわたって貯えられるものという見合に，常にいずこともなく移動しているのである。このような水の移動の姿を水循環と呼んでいる。この移動の際に，氷が水に，水が水蒸気にといったように，水の相変化が起こっている。この相変化を起こす時の物理的環境，すなわち温度や蒸発・凝結の速度等によって，それらの水全体の中の^{18}Oを含む水分子の割合が微妙に変動するのである。例えば，水と水蒸気が平衡状態にある時，その時の温度によ

って決まる一定の割合で^{18}Oは水と水蒸気とに分配される。この分配の割合は，温度の関数であり，温度が低い程，水の方に^{18}Oが濃縮される。このようなわけで，降水を含めた主要な天然水は，その水の存在する地域の環境，また，それが経て来た履歴を，同位体比という形で記録しているということができる。

同位体比の測定は，質量分析計を用いて行うが，技術上の問題から^{18}O／^{16}Oの絶対値を測定するより，2試料間の比の相対的な差を測定する方が1桁以上精度が良い。そこで標準試料として標準平均海水（Standard Mean Ocean Water：略してSMOW）を用い，次式を用いて$\delta^{18}O$（デルタ^{18}O）値を決め，千分率（‰：パーミル）で表わす。

$$\delta^{18}O=\frac{(^{18}O/^{16}O)\text{サンプル}-(^{18}O/^{16}O)\,\mathrm{SMOW}}{(^{18}O/^{16}O)\,\mathrm{SMOW}}\times 1000$$

すなわち，$\delta^{18}O$値はサンプル（未知試料）の同位体比が標準試料のそれからどれだけずれているかを示す値である。

先に述べたように，$\delta^{18}O$は水と水蒸気の場合水の方に濃縮され，しかもその傾向は，温度の低い程大きいので，降水の$\delta^{18}O$値の一般的な傾向として，緯度が高い程（その降水のもととなる水蒸気の源が寒い程）小さな値となる。また，海から蒸発した水蒸気が，内陸に入って行く場合，その途中で降水になると^{18}Oは凝結した水の方に多く濃縮されるので，残った水蒸気は，だんだん^{18}Oが少なくなっていく。従って，内陸に入る程，高度が上がる程，降水の$\delta^{18}O$値は小さくなっていく。図1は，北アメリカの氷河の表面積雪の$\delta^{18}O$を示したものであるが，今述べた傾向がよく表われている。ローガン氷河の$\delta^{18}O$が南極点よりも小さいのは，海抜高度が5500mと高いためである。

カラコラムにおける積雪の酸素安定同位体比

今回の試料はヒスパー氷河の高度3,000mにおける氷から，クンヤン氷河を経て，シュマリ・クンヤンチッシュの頂上（7.108m）に至るまで，40数個得られた。ここでは，それらのうち，積雪に関する測定結果を報告する。

試料の採取は，積雪表面の雪をポリ袋に採取し，完全に融けたのち，試料瓶に移した。分析の為に最終的に，必要とされる量は20cc程である。図2は，今回の試料の測定結果を示したものである。横軸に$\delta^{18}O$を，縦軸には採取地点の高度をとってある。図中（N）と添字されているのは新雪である。

この結果は，先程述べた一般的傾向とまったく逆であり，驚くべき結果ということができる。それでは，このような結果をもたらす原因として何があるのか考えてみることにする。まず第1は，低い所と高い所での降雪のもととなる水蒸気の起源が異なることである。この場合，起源

（ということはその水蒸気の履歴も含めて）が異なれば，水蒸気の$\delta^{18}O$も異なるので，降雪・積雪の$\delta^{18}O$が一般的傾向を示さなくても不思議ではない。

これまでのヒマラヤにおける酸素同位体の研究は，きわめて少ないが，西ネパールにおいて，加藤ら（1977）は，高度6,000m以上で，雪の$\delta^{18}O$が,それまで高度と共に減少してきたのに対し，例外的に大きいことを見い出した。そして，この高所の雪は，地中海方面よりもたらされた水蒸気によるとし，これより下部の降雪をもたらした水蒸気とは，起源が異なると考えた。

第二は，積雪表面から昇華が起こっていたり，融けた水から蒸発が起こっている場合である。軽い^{16}Oの方が蒸発しやすいので，残った積雪中には降雪時の同位体組成より^{18}Oの方が濃縮されることになる。前節で述べたようにこの濃縮の度合は気温の低い程，すなわち，高所の方が強くなるということであり，その結果として高所程$\delta^{18}O$が大きくなったと解決される。

今回の結果に関して考察すれば，筆者らは，上記２つの原因が復合したものと考えている。いずれにしても,カラコラム地域は一歩山から離れると非常に乾燥した気候環境を呈する所である。ということは，激しい蒸発が起こっているわけであるが、その蒸発が、高度7,000mに及ぶ高峰において起こっている可能性のあることは，非常に興味深い。

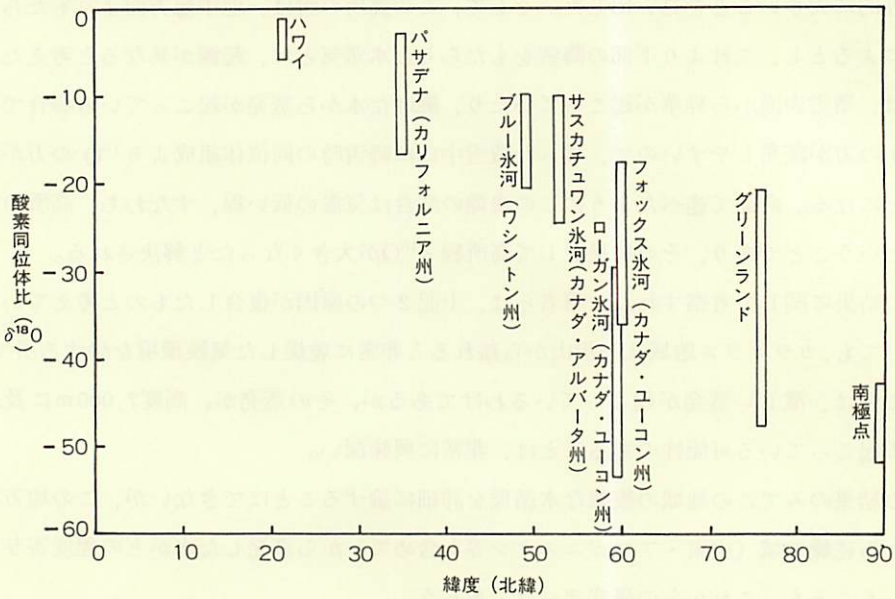
今回の結果のみでこの地域の複雑な水循環を詳細に論ずることはできないが，この地方の降水に，これら乾燥地域（中東・アフガニスタン等も含めて）から蒸発した水がどの程度寄与しているかということも，これからの研究テーマであろう。

カラコルム，ヒマラヤ，チベット高原を含む内陸アジアは，大気水圏の科学にとって，興味深い多くのテーマの豊庫でもある。個々の登山隊や調査でもたらされる成果はわずかなものであっても，それらの集積された結果は，必らずや総合的体系化につながるものである。今，我国の登山家や研究者によって，それらが着々と進められつつある。

参考文献

樋口敬二（1977）氷河と降水．別冊サイエンス　特集大気科学　自然現象に挑む　　Ｐ１０２～１１１．
加藤喜久雄、古川征弘、寺尾宏（1977）Api—Nampa山群chamlia谷の天然水の地球化学的研究．西ネパールの第３の峰、中日新聞社．

図1 酸素同位体比の緯度効果 氷河の表面積雪の重酸素存在量が緯度によってどう違うかをみるために南極、グリーンランド、アラスカ、カナダ、米国太平洋岸の氷河での測定値を米国のシャープ(R. P. Sharp)、カナダのクラウス（H. R. Krouse）らが比較した。参考のために、カリフォルニア州パサデナ、ハワイの降雨の値も示してある。この図から、緯度が高くなるほど $\delta^{18}O$ が小さくなる〝緯度効果〟が明らかに読みとれる。なおローガン氷河の $\delta^{18}O$ が小さくて南極の値に近いのは、緯度よりも海抜高度の影響を受けているためと考えられる。(樋口敬二、1977）による



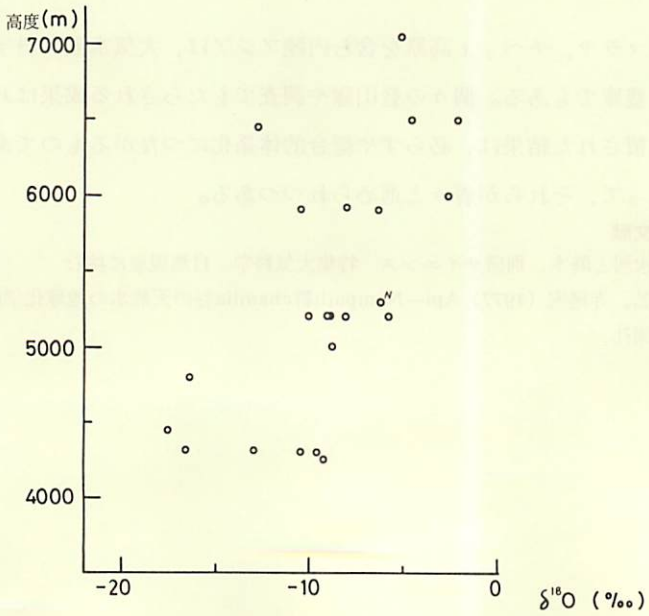


図2シュマリクンヤンチッシュにおける積雪の酸素安定同位体比と高度の関係

会　　計

高橋　　仁

海外遠征においては，資金が十分であるか否かはその成否に関わる重要な要素であると考えられます。そういう点からは，私共の隊は大多数が納税義務免除者であるという典型的な大学山岳部のそれであり，少なからぬハンディを負うものでした。しかし，そういうハンディをハンディとしないのがまた大学山岳部であり，持ち前の図々しさと脚を活用することにより殆んどカバーできたと思っております。勿論この成果はこのような図々しい申し入れに対して気さくに相談にのって下さり，尚かつ快くご援助下さった多くの方々のご協力抜きには考えられないのは言うまでもありません。

このようなご援助のお陰で国内分は予算内で，かつスムーズに準備を完了することができました。しかし国外分では，前年に引き続いてのカラコルムということでパキスタンの状況はわかっていたつもりでしたが，その物価上昇率は予想より激しいものであり，また隊員の体調維持のため食事のレベルを維持するという方針のためもあり,現地での滞在費がかなり予算をオーバーし，入山を前に少々心配になったりもしました。さらに，いざ入山という時にポーター賃金を巡ってトラブルが生じ，結局，法外な額を支払わなければならなくなるという事件もありました。

それやこれやで結局収支は報告書作成までで丁度過不足なく締めることになりました。

今回，会計という役を担当してみまして，自分が多分に井勘定的であることに今更ながらあきれるばかりでしたが，大きな破綻をきたすことなく終えられたのは，ひとえに多くの方々のご協力，ご教唆によるものであると感謝するばかりです。

収入

隊員個人負担	5,300,000
寄付（山の会々員から）	1,283,000
〃（一般から）	553,000
借り入れ金	150,000
計	7,286,000円

支出（国内分）

装備費	536,216
医薬品代	9,850
食糧費	141,260

航空運賃	1,646,520
隊荷空輸費	534,850
保険料	341,836
登山料	142,240
日山協推薦料	20,000
事務費	572,039
報告書作成他雑費	938,522
借金返済	150,000
	小計5,033,333円

支出（国外分・Rs）

装備費	3,910
食糧費	7,608
輸送費	18,174
宿泊費	12,767
滞在費	15,346
保険料	4,368
リエゾンオフィサー経費	5,583
ポーター賃金	39,845
事務費	4,472
	小計112,073Rs
	円換算小計2,252,667円

解説

1，収入について

寄付の内訳は山の会内から92件，一般から8件，および山岳部内からである。

2，支出について

1）国内分

○装備費

天幕，コンロ，スコップ，トランシーバー等，山岳部から借用した物も多いが新規に購入した装備のうち主なものは以下の通りである。

・固定用ダンラインクロスロープ

3,000m　79,500円

・スノーバー用アルミアングル材

20m　9,000円

・ユマール5組　84,000円

・その他登攀用具　60,000円

・天幕2張　56,000円

・その他の幕営用具　55,000円

・リエゾンオフィサー支給装備　80,000円

○医薬品代

隊長，副隊長が医師であるので購入したのは日焼け止めクリームくらいのものである。

○食糧費

殆んどの食糧が自家加工品，および寄付をいただいたものであるので，登攀期間中の隊員1人あたりの1日の食糧費は約550円と非常に安価であった。

○隊荷輸送費

札幌→ラワルピンディの料金は1kg当り740円であり隊荷総量は650kgであった。

○保険料

海外旅行傷害保険は登山の場合非常に割高であり1人あたり42,730円であった。
保険の手続きは航空券とともにヒマラヤ観光開発に依頼した。

○事務費

国外分の事務費も合わせると総支出の10%弱であった。その内訳は文書代，郵便料金，電話料金，交通費が殆んどである。事務局を山岳部員の溜り場である通称「お化け屋敷」におくことができたので，場所代は節約できた。

○報告書作成他雑費

帰国後も，フィルム整理，報告書作成，報告会等の出費が嵩んだ。

2）国外分　（1Rs≒20.1円）

○輸送費

パキスタン国内での隊員と隊荷の移動に要した費用の詳細は，次の通りである。

・ラワルピンディ→ギルギット

ミニバス	1台	1,700Rs
トラック	1／2台	1,050Rs
		（道岳連隊と割勘）

・ギルギット→ナガール

ジープ	4台	3,100Rs

・ナガール→フンザ→ギルギット

ジープ		延3台970Rs

・ギルギット→ラワルピンディ

ミニバス	1台	1,350Rs

以上のように料金は交渉次第であった。

○宿泊費

ディビスホテル（RWP）の料金が殆どであり，その宿泊延人数は143人日，1泊2食付で平均82Rsであった。それ以外に宿泊したところは以下のとおりである。

・チラス	レストハウス	7人日	180Rs
・ギルギット	レストハウス	16人日	325Rs
・ヒスパー	レストハウス	16人日	60Rs
・フンザ	プリンスホテル	8人日	200Rs
・ギルギット	ジュビリーホテル	20人日	315Rs

○滞在費

予算の丁度倍額出費した。前述のように，そのうち主なものは昼食代が約4,000Rs，他の遠征隊やリエンゾンオフィサーとの親睦会費が約3,000Rsであり，飲み代，食い代の占める比重が大きかった。

○保険料

リエゾンオフィサーとポーターの保険は，ラワルピンディのアルファインシュアランスで手

続きをした。手続きは簡単であるが，ポーターの人数分の書類をコピーして山中に持ってゆく必要があった。

○リエゾンオフィサー経費

リエゾンオフィサーには1日当り60Rsの食費を支給し，要求する用品を買い与え，交通費を支払わなければならないとレギュレーションに明示してある。

○ポーター賃金

次のような法外な賃金を支払わざるを得なかった。

・往　　路	90Rs×314.5人日	28,305Rs
・復　　路	100Rs×60人日	6,000Rs
・キッチンボーイ	1人	5,500Rs

○ラワルピンディ→札幌の荷物別送費は，

261kg×35Rs／kg	9,135Rs
手数料	200Rs

であったが交渉次第であった。

○事務費

主なものは，交通費，通信費であった。

紀　行　編

北帰行

高橋　仁

眼下には，レンガの面にエッチングしただけのような，カブール郊外の茶一色の眺めが拡がる。ツポレフ旅客機が上昇するにつれて，視界の隅に土くれのような山々が現われ，やがて，ヒマラヤ西端，ヒンズークシュの白い連なりがやけに麗々しく見えてくる。志賀と顔を見あわせて，期せずして2人同時にため息をついてしまった。イスラムの気違い連中の中からやっと抜け出すことができたという安堵感に，思わず眠気まで催してくる。

7月27日，隊はラワルピンディで現地解散した。志賀と小生はアフガニスタン北部，パキスタン南部，インドと回る予定であった。隊長，副隊長はカトマンズで彼らの山の神と待ち合わせており，石村はネパール，花井，小泉は一度アフガニスタンへ行ってからネパールへ，入川もアフガニスタンから何処かへと各々勝手に放浪するのであり，彼等は昼前にはすでに各々ラワルピンディを離れていた。

小生らは雑用整理で明後日まで残らなければならない。隊から離れたら只の貧乏学生なのでその日は，ミセスディビスホテルに近いサッカーグラウンドのスコアボードの台上にツェルトを張って寝ることにした。ところがその日に限って夕刻からドシャ降りの雨であった。その上，その日からイスラム教の断食月間，ラマダンが始まり昼から何も食べておらず，しかもひどい下痢の再発と悪いことが重なって，非常にみじめな気分を味わされた。乞食旅行初日にして，もう日本が恋しくなった程であった。野宿の印象が悪いので，次の日は，サダールバザールの安ホテルに泊ることにした。暑い一日が過ぎ，屋上からバザールの混沌のかなたに大きな夕陽が沈むのを眺めていると，ホームシックはたちまち雲散霧消してしまい，逆に一刻も早く出かけたいという例の虫が騒ぎ始めた。実に単純なものである。下痢もおさまり，ラマダンの為に夜になってから活気づくバザールをうろうろしてみた。暑さが少し和らぐためか，夜のバザールは一段と活気に溢れている。喰い物屋も急に多くなったようだ。

7月28日，やっとラワルピンディを離れることができる。「スズキ」に乗ってピールハダイという一大バスターミナルに行き客引きの呼び声と，呼びクラクションの喧騒の中で，できるだけ年寄りの運チャンのバスを選んで乗り込み，後方左側の席に座る。これには理由があって，むこうはなにしろ運転がムチャクチャなのである。であるから，年寄りということは生き残っているということであり，後方左側の席は，正面衝突の際に一番安全だかである。4時間でペシャワールに着く。ペシャワールは氷で冷やしたヨーグルト，オクラとじゃがいもの煮つけ，牛乳，コロ

ッケ，果物類が豊富で安く，ピンディよりもはるかに居心地が良い。又，仏教博物館，城跡，モスク等，見る物も多い。全体にピンディに比べて，人々に余裕があるのが感じられる。長く滞在してみたい所であるが，暑さはあいかわらずであり，ホテルでは水牛のように水風呂につかってばかりいた。

カイバル峠を越えるアフガン国営バスは，粗末な乗車券とは裏腹に最新鋭のメルセデス製であり，あの貧しい国がどうしてと不思議な思いである。とにかく快適なことはいいことである。カイバル峠手前の検問所は二丁挙銃に弾帯をたすき掛けというマカロニウエスタンばりの連中がゴロゴロしていて緊張させられる。アフガンゲリラはペシャワール近郊にアジトをかまえ，パキスタン政府が影で援助しているという話を思い出した。峠を境に，景観は一変し，インダスの沃野から，砂漠状となる。この眺めとともに，検問毎に乗り込んでくる武装兵士と，要所要所で睨みをきかしている戦車，装甲車がわれわれの気持ちに圧迫感を与える。こんな砂漠でゲリラは一体どうやって戦うのだろう。アラビアのロレンスを思い出すが，昔ならいざ知らず今はあれではどうにもならないだろうと無責任なことを考えてしまう。

カブールは何事もなければ居心地は良い。第一に，高原性の気候が爽やかであり，シャワーを浴びるのが冷たくて辛いくらいである。美しい工芸品をゆっくり見て歩けば，忽ち一週間くらいは潰れてしまうし，食べ物も，パキスタンよりずっと美味であった。生活費も，われわれはホテル代込みで一日400円程度で十分であった。さてアフガンに来た目的は，カブールではなく，バンディアミール，バーミアン，マザリシャリフといった北方を周遊することであった。ところがアフガン内戦は激化する一方であり，当時のタラキ政権が確保しているのは，主要都市とアジアハイウェイだけ，つまり点と線だけという状態であった。実際，旅行者の集ったバスが銃撃されたとか，橋がいくつも破壊されたという情報がどんどん入ってきた。でその結論は，カブールから出歩くことは不可能ということであった。こういう事を聞いてもわれわれはやはり日本人であり，まあ何処かには行けるだろうと，たかをくくっていたのであるが，ある日，そういう全ての緊迫感が現実のものであることを思い知らされた。カブールに駐留する軍内部で反乱が起こり市の南部で市街戦が始まったのだ。機関銃の発射音，砲弾の炸裂する音が響きわたり，やがて武装ヘリとミグ19が上空からロケット攻撃と機銃掃射を始めた。街中を血走った眼をした兵士が走り回り，あたりは戦場と化してしまったのだ。この反乱はやがて鎮圧されたが，数百人の死者がでたということであった。この前日に，花井，小泉の二人が郊外の丘に登ろうとして軍に連行されるという事件があり，その時はすぐ釈放されたが，その日にこの市街戦が起きていたら，彼等はカブールで土と同化していたはずである。この日以来，街中の緊張は高まりわれわれにも現実のものとして感じられ，どうにも落ち着かなくなっていった。それ以前にわれわれ二人はアフガン周遊を諦めた時点でソ連大使館に行き，シベリア経由で日本へ向うチケットを申し込んでおり，そ

の出発予定日が８月23日になっていた。その８月23日はラマダンのあける日であり，この日にゲリラは総攻撃をかけるかもしれないという噂が街中に拡まり，旅行者も次々にカブールを離れていきつつあった。時々夜中にホテルのすぐ近くで機関銃の発射音がして飛び起きることがあった。なにせホテルとは言っても，平屋の長屋であるから一度事が起これば，戦場として巻き込まれるのは必至である。何度もそんなことを考えているうちに，えいっ，どうなってもかまわないと腹をくくることにした。こんなことをしている間には，アナカン発送用に購入したＰＩＡのチケットをキャンセルするために，再びピンディまで往復して来たり，シベリア経由チケット購入のために何度もあちこち駆けまわったりしてどんどん日は経ち，いよいよ出発前日になった。街はラマダン明け前夜のためかなり賑わっており，それがかえって無気味である。明日の朝が無事に来ますようにと思わず祈らずにはいられなかった。

８月24日の朝は平穏であった。早目に空港に行く。機に乗り込むと増々緊張する。今，ゲリラが事を起したらまず第一の攻撃目標は空港であるはずである。

アムダリアを越えるとソ連領空となり，上流遙かにパミール高原の白い山々がかすかに望まれる。いつのまにか眠り込んでしまい，目覚めると機は既に高度を下げ始めており，今までとはうって変って緑の多いシルダリア流域の平野のかなたに，タシケントの街が見えて来た。ロシア語は全くダメなので，他の乗客の後について歩き，入国手続きを済ませる。ここの通関の際，官吏が何を勘違いしたのか志賀の所持品証明書を発行しなかったたため，彼は出国時に一悶着することになる。ソ連を旅行する外国人はその貧富に関係なく最高級ホテルを押しつけられるので，われわれは手持ちのドルを握りしめて戦々恐恐であった。なにせ前日までホテル代は100円程度であったのが一挙に8,000円になるのであるから大変である。そのかわりにお湯の出るバス，トイレ，快適なベッド，17階からの眺望が与えられるが，そんな物は，それが無ければ命に関わるという物ではない。つまり分不相応なのである。というわけでソ連でも行きたい所は，サマルカンド，ブハラ，フェルガナ盆地，イシククル湖，バイカル湖等たくさんあるのに，ただ通過するのみという日程にならざるを得なかった。もっとも暑い思いをしなくて済むのは有難いことである。食事時にもわれわれはホテルの超高級レストランを横目で睨みながら近くの公園に行き，そこのセルフサービスの食堂で食事をすることにあいなった。食い物は当然ながら今までで一番良い。一つ驚いたのは地元の連中が食い物を非常に粗末にすることである。一口食べただけでポイッと捨てられたパンがあちこちに転がり，ひどいのになると，注文したメニューに全く手をつけないで行ってしまう者までいた。ソ連はそんなに食糧事情が良かったかしらと首をかしげざるを得ない。このタシケントは南部であり，食糧生産に余裕があるのかもしれない。インツーリストの係員がいかにもソ連的大迫力の人造物を見せるために，あちこち連れ回して呉れるが，ちっとも面白く

ないので地図を頼りに勝手に歩き回ることにした。ここはモンゴル系の人間が多いためか，口を開かなければわれわれは全く注目されなかった。それをいいことに，動物園に行ったり，映画館に行ったりした。メトロに乗って終点まで行くと，空港かと間違うようなバスターミナルがあり，読めないロシア語を無理やり解読すると，フェルガナ，コーカンド，ドウシャンベ等，パミール北辺の街が行き先であることがわかり，思わず目の前のバスに飛び乗りたい衝動にかられる。タシケントにて2泊したあと，夜行便でハバロフスクへ飛び立つ。われわれは夜間飛行などしたくもないのであるが，向うが勝手に決めてしまうのでどうしようもない。真暗な地表のあちこちに光の群れが散見された。湖をとりまくひときわ大きな光の群れの中に着陸する。北緯55度のノボシビルスクである。気温は5℃前後で薄着のわれわれは震えあがってしまった。同席したアメリカ人の大学教授が熱い紅茶をおごってくれた。ノボシビルスクを飛び立つと前方の地平線が次第に明るくなり，忽ち夜が明けてくる。シベリア上空であるが下は一面の雲海で何も見えない。人工雲発生器でも使っているのではないかと勘ぐりたくなる。それにしても雲の下はさぞかし寒かろうと想像できる。ミグ21が横をかすめて飛び去る。真下の雲の切れ間にバイカル湖の北端が見えた。岸辺はうっそうとした森林になっているのがわかるが，いくら想像力をたくましくしてもそれまでである。所詮，飛行機から眺めるバイカル湖なんて……。ハバロフスクに近づくと雲が切れ眼下には雪をかぶった低い山脈と人の気配のない湿原が拡がっていた。ハバロフスクには日本語の話せるガイドが居て，例によって市内の建造物を見せに連れ歩いてくれる。ここからやっとシベリア鉄道に乗車である。ただしまたもや夜行であった。この理由はシベリア上空よりも現実味をもって理解された。早朝，カーテンをめくってみると朝靄の中すぐ目と鼻の先にミグの尾翼が並んでいたのだ。外を眺められないのは大いに不満であるがそれ以外は食事もベッドも快適である。ウラジオストックから船に乗るのであるがここで例の志賀の出国手続きで一悶着あった。どうやら切り抜けて無事出港となったがさすがに志賀はぐったりしていた。この船旅の楽しみはなんといっても食事である。朝，昼，ティタイム，晩と4日間それだけで満足であった。なんとも無邪気というか，みじめというか，それまでの食生活が偲ばれるというものである。津軽海峡を通過する時，自衛隊のファントムが出迎えにやってきた。仲よくなったオーストリアの大学生が飛び込んで泳いでいけばいいのにと冗談を言っていた。できればそうしたいのだが，全部食べないと……と，最後までいじましいのである。横浜の港に着いてもまわりはアンノン族ばかりで，われわれは肩身の狭い思いである。そういえば，タシケントのホテルで一緒にエレベーターに乗り合わせた日本人が，「この人たちも日本人かしら？」と言っていたっけ。あなたたちは旅行をして来た人たちであり，こっちは放浪してきた人なのですよと言えるくらいもっと徹底して長くあちこちフラフラしてきたかったなあと思いつつ，トンと船から陸へ降りた。

ザンスカール行

入川真理

山登りが終って，はや1月半あまり過ぎた9月の10日，ザンスカールへトレッキングに行くために，それまでしばらく滞在していたレーの町を後にしました。相棒はペシャワール以来ずっとお世話になっている，島根大学OBの福田さんです。そもそもザンスカールに行くことを決めたのは，ほんの数日前のことでした。インド北部の地域でトレッキングをしようという話は前々から出ていて，最初はカシミールを東から西へ横断するつもりでした。ところが偶然福田さんが日本から持ってきていたトレッキング資料の中に，僕たちがやろうとしていたものと同一の記録があったのです。読んでみると，氷河の登降やら雪の峠越えやら，なかなか大変そうです。致命的なことに2人共登山靴もテントも持っていないし，「どうしましょうか。」「大変そうだな。」という風で決心がつきかねている矢先，ザンスカールをトレッキングしてレーにやってきた人に会い，かなりの情報を得ることが出来たのでした。それによると，一番問題の雪は心配なさそうだし，宿のことも，ちょうど一日の行動の終りには村があるようでなんとかなりそうです。食事もそれらの村々で分けてもらえそうです。ということで懸念も吹き飛び，またこの地域は日本ではあまり知られていないようで魅力的であるし話はすぐにまとまったのでした。前日，数日分の昼メシ（といってもビスケットですが）やその他いろいろ買い込み，さていよいよ出発というわけです。レーのバス発着所に止まっていたスリナガール行きのトラックの荷台に乗っけてもらい，胸をふくらませて，またレーとの別れをおしみながら，トレッキング出発点となるラマユルへと向かいます。すさまじいばかりの砂ぼこりと振動（一応舗装道路なのですが）にうんざり。しかし回りのみごとな景観がそれらを忘れさせてくれます。ラマユルには昼すぎにやっと到着しました。

ところでラダックが解禁になってから，はや4年です。今までも，うすうす思っていたのだけれど，この4年の間にラダックも大分変わっちゃったんじゃないのかなあ，という思いがここラマユルではっきりしてきたようです。というのは，ここには有名なゴンパ（ラマ教の寺）があり，そこでホテルを経営しているのです。もちろんホテルなどと言っても，要するに簡易宿泊所みたいなもので，大きな部屋に寝台がいくつも並べてあるだけの，本当にお粗末なものですが，その宿泊費がなんと10ルピーもするのです。さらに驚いたことには，お寺の見学料も10ルピーなのです。うまくやれば1日の生活費を10ルピー程度でまかなえる所で，お寺を見るだけで10ルピー（300円程度）というのは，いくら日本のお寺の拝観料が高いとはいえ，もう確実にその上を行

くのではないでしょうか。なんでこんなに高いか，といえばそれはここが観光地だからに違いありません。毎日毎日多くの団体旅行者がやってくるのです。ラマ僧とていきおい金もうけに力が入るのも無理はないのでしょう。どこかの国では今や坊主は商人みたいなものですが，ここまできて，その商魂を見せつけられるとは思いもよりませんでした。話は前後しますが，トレッキングを始めて5日めLinshatという所でお寺に泊めてもらいました。そこはちょうど僕達のトレッキングルートの中間位の所で，どちらをむいても峨峨たる灰色の山なみしか見ることの出来ない，ザンスカール山脈の真只中で，いわゆる文明とは隔絶された所なのですが，ここのラマ僧に接してみて，ラマユルとの違いに少なからず驚かされたのです。本当に貧しいささやかな暮しをしているここのお坊さん達が，ラマユルのお坊さんと比べて，どれ程人間らしい，生き生きとした，威厳を持った姿で僕の目に写ったことでしょう。あらためて文明が人間に与える影響力の大きさ，というものが莫然とながらもわかったような気がしました。彼らの生活，生き方に対して，僕は何も口をさしはさむ資格はありません。だけれども，ラマユルに限らず，ラダックがこれ以上外からのおしきせの文化に毒されてほしくない，と身勝手ながらも思ってしまうのです。

さて次の日，ホテルで朝食をとり，いよいよ出発です。村を離れると回りの景色はすぐ荒涼とした，岩と砂だけの世界に変わります。一つの小さな峠を越え，奇妙な，ゴルジュのように狭く切り立った，迷路のような涸谷をうねうねと下り，広い谷に出ました。きれいな川が流れていて，この川沿いに1時間程下った所にある村が今日の行動の終点でした。うまい具合にこの村で医療に携わっている若者の家に泊めてもらいました。夕方になって従者を連れた男が1人やってきました。聞くとその人は先生で，ここからさらに2日位歩いたところの奥地まで教育に行くとのことでした。まったく偉いもんだなあ，と感心して話に聞き入りました。

さてさて翌日は，というように書いていったのでは当分終りそうもないので，トレッキングが終った時点まで話を進めてしまいます。僕達はラマユルを立ってから8日後，9月18日の午後やっとのことでゴールであるパダムに辿り着きました。たった8日間というものの実にハードなトレッキングでした。話に聞いていた通り雪は全くありません。雪線は5,000mを軽く越えているようで，とにかく全くの乾燥地帯なのです。道は時には黒部の廊下のような所に岩をえぐってつけられていたり，広い広い谷の中を一直線にのびていたりして若干の変化はあるけれど，原則はあくまでも岩と砂の荒涼とした世界なのです。初めのころこそ回りを見まわしては「すごい，すごい」と新鮮な気持で景色をながめていたのですが，後半になると，飽きてきた，というか，むしろ苦痛に感じるようにさえなってきました。やはりこういう潤いのない，のっぺりとした世界はわれわれにとってはなかなか厳しいようです。しかしさらに厳しかったのは食事の問題でした。村に着くと，早速習ったばかりの片言のザンスカール語とやらで村人に「疲れた」「腹が減った」とぐったりした表情で話しかけ，なんとか一軒の家に上がりこみます。まずはお茶をもらうので

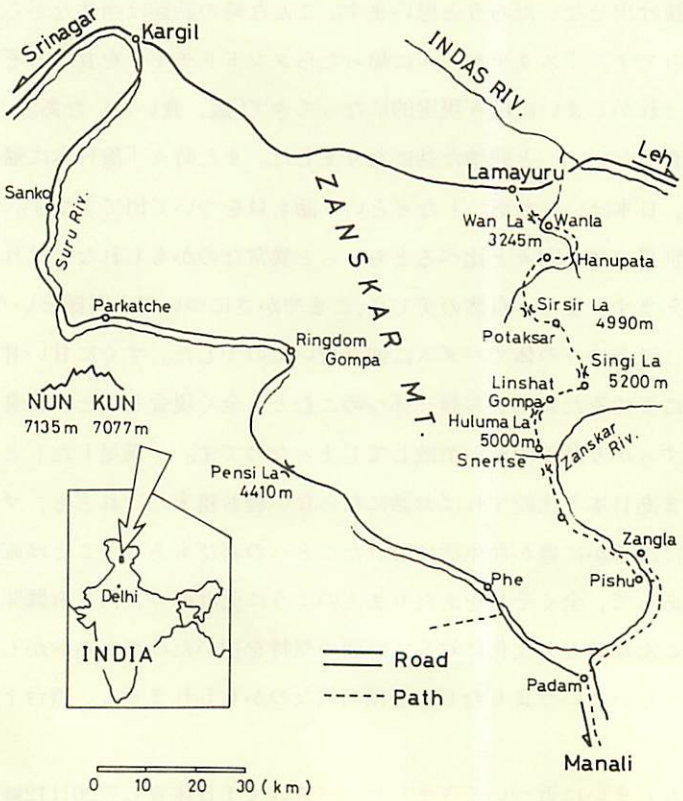
すが，それが塩茶だったりバター茶だったりで，疲れた体にはどうにも馴じめません。当然砂糖などないでしょうし，それではと「ナマークナヒン，ナマークナヒン」とヒンディー語で身振り手振りを交えて奮闘するのですが，結局出されたお茶を飲むとまた塩が入っていたりでげんなりしてしまいます。さて食事の方ですが，歩き始めて3日目位になると，米，野菜，肉はほぼ姿を消してしまいました。いわゆる現地人の主食はツァンパと呼ばれる麦の粉です。どんな種類の麦なのか僕はわかりませんが，いわゆる日本でいうハッタイ粉と同じようなものではないかと思います。その粉を湯の中に溶かし込んだり，湯と混ぜてボール状に練りあげたり（これはパパと呼ばれていました）して食べます。それをヨーグルトにつけて食べたりもしているようですが，毎日毎日こういう単調な食事で彼らは生きているのです。もともと僕たちのトレッキングはポーターなしでやるつもりだったし，荷物も軽くしていこう，ということで食料も昼メシが主体で朝晩は現地談判でなんとかやっていけるだろうという，適当な甘い考えだったことも確かですが，案の定，僕はほんの数日で音を上げてしまったのでした。とても彼らにはついていけません。こんな原始的な生活をしている人々に接したのは初めてだったから，余計にショックを受けたのかも知れないけれど，それでもやはり今まで豊かな文明の中でぬくぬくと育ってきた僕はある程度の枠内からは絶対に抜け出せないだろうと思います。こんな時の話題は当然ながら色気より食い気で食物のことばかりです。「スリナガールに帰ったらタンドリチキンを食べるぞー。」「ビール飲みたいなあ。」それがしまいに段々現実的になってきて「飯，食いたいなあ。」「塩かけただけでもいいから米が食いたい。」と悲愴な話になりました。また時々「俺日本に帰りたくなっちゃった。」「アーア，日本はいいなあ。」などという話も口をついて出てきます。とにかく，食物に関していえば，世界の他の国々と比べるとちょっと異常なのかもしれないけれど，日本は本当に天国のように思えます。また，自然の美しさ，こまやかさについても同様という気がしてきます。

というわけで，ほうほうの体でパダムに辿り着いたのでした。すぐに甘い甘いチャイを何杯もおかわりし，夢にまでみたお米をお腹一杯つめこむと，全く現金なことに，食物のこととか日本のことなんかはすっかり頭の中から消散してしまったのです。「満足した」と言ってしまえばそれまでですが，まあ日本と比較すればお話にならない程お粗末だけれども，ザンスカールの山奥の暮しに比べればはるかに豊かな生活に触れたことへの喜びもあったことは確かです。日本の高度な文化の中にあって，全くそれをあたりまえのように受け取り，何も有難味も感じていなかったのに，それがこんな貧しい文化に対して感謝の気持を抱いたのだからおかしなものではあるけれど。いや，おかしいというよりむしろ至極当然なのかもしれません。燈台下暗し，という言葉にもある通り。

やっと文章がおしまいに近づいてきました。パダムで1日休養し翌20日12km程北にある村まで歩きます。カルギルからトラックがこの辺まで不定期ではあるけれどやって来るのです。結局丸

1日待たされ，21日の午後ようやくカルギルへ向け出発です。このトラックの旅も強烈でした。なにしろ道がひどくて時速10km位しか出せないのです。まったくイライラしてきますがじっと耐える他にありません。しかし最後はヌン・クンの素晴らしい威容に接することが出来，イライラも解消，充分満ちたりた気持ちでカルギルへ到着したのは，22日の夜でした。

こうしてザンスカールの旅は終りました。今これを書きながらいろいろ思い返してみると，あらためて素晴らしい所だったなあ，と思えるのです。トレッキングの一場面一場面は，今でもはっきりと脳裏に焼きついています。またあのツァンパ，パパ，バター茶といったようなものもなつかしく思いだされます。そして今一度じっくりと味わってみたいものだ，などと思ってしまいます。あの時の苦痛はあの乾燥した風土と同様に，僕の精神までもがひからびてしまっていたからなのかもしれません。もしまたいつか訪れる機会があるならば，その時こそは充分にゆっくりと心の準備をしてから出かけたいものだと思います。



ダラムサラからグルラマンダータへ

下沢英二

〈旅〉　異郷に在って，見知らぬ土地の人を尋ねて行く時は，〈旅〉をしているという感じがする。

1965年の中央ネパール学術調査隊の時，伏見さんは，北極の氷島T 3から，ヨーロッパを巡って，そして，ネパールのカルカの石室に隊員を訪ねあてた。降り積む雪の上の足跡が和歌の下の句の如く引き締まっていた。

それが，人でなくて山であっても同じだろう。1963年の西ネパール学術調査隊は，まぼろしの7,000m峰ナラカンカールを目指して，50余日のキャラバンのあと，思いがけず，ニャモナニール（グルラマンダータ）に面前してしまった。ナラカンカールが7,000米でなかったにせよ，幻を見極めて，新たな憧憬の峰に接した。雪のニィンヤルパスを越えて帰ってきたこの隊は叙事詩そのものであった。

〈バス〉　カラコルムの山旅を終えて，僕と越前谷と石村の3人は北インドのダラムサラという街に向かった。ここに，クサン・ノルブ・タワさんがいるはずだ。タワさんは，ナラカンカールの隊に一緒に行ったシェルパだ。今は，カトマンズでトレッキング会社を経営している。タワさんに会って，禁断の地チベットの名峰グルラマンダータのこととか，ネパールと中国の登山交流の中にチベット入域の可能性が探れないかを話し合ってみようと思ったからだ。石村が春までカトマンズで暮らしていた時「この7月から8月にかけては，ダラムサラに居るから」と言っていたそうだ。

ラワルピンディーをミニバスで出発する。カラコラムは，岩と砂と雪の土地であったが，7月のテー平原には緑が満ちている。250kmを一気に走る水平の旅は，緩徐な登りを過ごしてきたあとには，一種爽快である。15ルピー，330円，5時間で国境の街ラホールに着く。ラホールはイスラムの古都。昔，イギリスはここに領事館を置いていた。マルグリッドデュラスの小説「ラホールの副領事」は，インド5部作の一編だ。カルカッタの悲劇の発端はこの街に始まる。が，ここはインドというよりイスラム世界だ。場末のホテルに僅か5ルピーで泊る。名うての安宿，ヒッピーと泥棒のたまり場で，ガイドブックにも載ったため最近名前をかえて，パラダイスホテルとしたそうだ。ラマザーンであちこちの食堂は休む所が多い。夕食を求めて，夜のラホールを歩くと，昼間のイスラムの古都とうってかわって，ここはすでにインドの香りがした。明るい白色電球の夜店，カレーの匂い，クラリネットのような，またサランギーのような音楽，そしてルン

ギ姿でたむろする人々は，ここがもうインドであると言っている。懐しいベタベタさだ。こんなインド世界の中に，タワさんというネパール人を探していくのは，ちょっと奇妙な感じもしてしまう。

翌日バスで国境へ行く。インディアンボーダーは歩いて10分で抜ける。ここからダラムサラへ行くのは一体どうしたらいいのだろう。インドへ入っただけで急に暑くなる。全てがボーッとしている。

国境からアムリッツアまではバスで10分程だ。着くとすぐパタンコット行きのバスが出るという。昼メシも食べずに飛びのる。どのくらいかかるのか，まるで判らないままに揺られてゆく。僕が通路に立っていると，僕のすぐ横の座席の女が，向こうへ行けと手で示す。ムッとしてとなりの男たちを見ると，彼らも，そうだとうなずいて前へすすめと目で示す。そう，僕はアウトカーストに属する〈外国人〉だから。べとつく汗と，ギューギューづめと，茫漠たる緑と大地の代赭,インドの中をバスは3時間余走って,パタンコットのバスステーションに着く。もう3時だ。しかしインドのバス網は良く発達しており，5時頃に，ダラムサラに行くバスがあると言う。バスステーションで揚げ菓子を食べながら，ハエを追う。

これは，旅という感覚の代物ではない。昨日，今日とバスでタイムテーブルを追いながら距離をかせぐ，移動だ。この先に一人の人がいるはずだという4カ月前の情報を実現する。空間の2点を重ね合わせる幾何学だ。16時50分発のバスでまた走り出すと，バスはまもなく山の間の村をぬって進む，地図でみると，ここはヒマチャルプラデシュの西の裾にあたるらしい。これまた3時間余りでようやくダラムサラの街へ着いた。外は意外とヒンヤリしていて，ソラ寒い程だ。ここはスリナガル，シムラなどと並んでインドの避暑地のひとつだそうだ。ヒッピーも7月，8月はここに逃げてくるらしい。標高1,500米ぐらいだが，もう夜の8時には，意外とヒンヤリしてしまう。タワさんのところには，明日行こう。

〈ダラムサラ〉　タワさんの住んでいる，ウーパルは，バスで30分ぐらいのところだ。ここは1959年の中共軍のチベット侵攻で，インドに逃がれた，14世ダライ・ラマが住んでおり，それに随行したチベッタンが暮らしている。今までのインド世界とは打って変わって，こじんまりした明るい村だ。観光にくる人々も多いためか，チベット人の好みか，家も明るく塗られているものも有り，人々の顔もなつかしいモンゴル系だ。タワさんは昔チベットで僧侶の勉強をしていた事があるという。ここには，おばさんにあたる人が居るらしい。

教えられて，黄色く塗られた戸の明るい家に行くと，太った中年のおばさんが出てきた。石村のネパール語もスーッと通じたが，しかしタワさんは，今はカトマンズにいるという。とにかく上がれと言って,僕たちにお茶を出してくれた。塩の入ったミルクティーだ。ミルクは山羊乳なのか，始めはなじみにくい味だ。4～5年前，ターメの部落で飲んだときは，仲々のどを通らなか

った。しかし今度は，妙に口に合って，おかわりをする。やがてマンジュウまで出してくれた。ここの人は自分の親族の友達だとこんなにも親切にしてくれるのだろうか。何か，日本の昔の田舎を思ってしまう。所謂，人情の機微というやつだ。

その17～18の息子が，ダライ・ラマの屋敷と寺に案内してくれた。臙脂と黄色のラマ僧たちが寺に在って，経をあげており，また信者たちは，ひざまづき，体を投げ出して祈っている。

遠くの空から，スコールの雲が迫ってくるのを眺めながら，フッとため息が出た。結局，タワさんには会えなかったが，グルラマンダータを領するチベットの宗主ダライ・ラマのもとにわれわれは来たではないか。そして，グルラ・マンダータはここから500kmの南東に今でもある。どの道を通っていくことになるのか判らないけれど，グルラ・マンダータへの道は，ともかく今，始まったばかりだ。

〈夢の時間，時間の旅〉　その日の夕方，ダラムサラ発17：00のバスで，僕達はデリーに向かった。延々14時間走り続けるのだ。窓から流れ込む夜気は，冷えびえとしている。バスは満席で真の闇の中に道を作りながらのように駆け抜けていく。幾つもの白い光の街を通り抜けてバスは，どこまでも闇の時間の中を走りつづけている。夢は形を結ばないまま，揺られつづけた。グルラマンダータの道はどこにあるのか，誰がグルラマンダータを見たのか……。

1963年のナラカンカール隊の写真こそ東面からの最初の，最も新しい，そしてすでに16年も前の姿なのだ。その前に見たのは誰だったろうか。揺れる意識の下で遠い日本の本棚に思いを巡らす。

そう，「白いクモ」のH・ハラーは，ナンガパルバットの遠征のあと，イギリス・キャンプに捕われた。そして彼は幾度目かの脱走の試みの末に，ついにチベットへ逃げ込んだ。彼は1951年，中共軍の侵攻まで7年をチベットで過ごしている。彼は脱走の時，カイラスの麓，マナサロワールの北岸を西から東へ通っている。彼の見たグルラマンダータは，どんなだったのか。〈まる2日間，私たちはカイラスとグルラ・マンダータの氷河に沿って歩いた。マナサロワール湖にその姿を反映しているグルラ・マンダータはいまだ人間によって登られていない。アルピニストにとってはその誘惑は強い。〉非常に抑えた筆だ。北面から登れるとも，その尾根ひとつについてすら書かない。それは，彼が逃避行者であったからではなく，自分の強い憧憬を抑えていたからではないのか。書かれているのはそれが全てだ。しかし彼は，グルラ・マンダータの北稜をスキーでマナサロワールに滑べり降りる自分の姿を振り返り，振り返り歩いて過ぎた気がしてならない。

バスの乗客は，芯のない人形の様に揺られつづけて，僕の思考もゆらゆらと流れていく。ああ，ティヒーがここへ来たのは，1936年，僅か23，4歳の頃だ。彼は，タクラコートの北，ルンゴンの部落から西稜を試みている。西稜が2本あるうちの北側の方なのだろうか。彼はたった一人の

ポーターと共に5日間のラッシュアタックで，頂上の間近に至ったのだ。しかし，〈……霧がちょっとの間，晴れた。私たちの前には近々と—しかしどうしても近づき難い—頂上が見えた。山の背は，現在の私たちの条件では絶対にのぼることのできない地点で頂上に通じていた。そこには幾つもの嶮しい岩塊が新しい雪を被って絶壁のようにそそり立っていた。ただ唯一の希望は，北方に何の困難もなく頂上へ登れそうに見える別の稜線が見えたことであった。だが，私たちの立っている稜線と向こうの稜線の間には切りたったような氷の絶壁が横たわっているので，直接そこへ行くことはできなかった……〉。

希望と絶望の夢が，ヒタヒタと寄せては返す，バスの中のまどろみ。明るい窓のように長谷川伝次郎のことが浮かんで来る。彼は，1927年の夏にインドから，カイラスへの巡礼路を辿っている。リプ・レク・パスを越えて，グルラマンダータの麓を巡り，マナサロワールを巡って，聖峰カイラスを一巡している。写真家の彼の眼にも，リプ・レク・パスからの眺めは感動的だった。〈澄み渡った青空の下—大殿堂の屋根に破風を四ツ程列べた様な威風堂々たるグルラマンダータ……〉。そして，タクラコートから見上げると，それは〈……チベットの高原に，最も成功した一大建築物の様なグルラマンダータ〉なのである。さらに北行し，5,400米の峠からふりかえると，〈……東南に丸く盛り上がった斜面の上に，手に取るように，グルラマンダータの絶頂が見える。侵食された谷が幾筋も食い込んで，尾根途中で切れていた。若し続いた尾根を探し当てたら，登るのに大した困難はないらしい。スキー登山には最も適当な山だ〉。マナサロワールからふり返るグルラマンダータは，〈昨夜の雨で山麓まで雪のヴエールを被ていた〉。

遠く夢見る思いで時間を遡ると，ヘディンの言葉に出会う。〈……この地上で，マナサロワル，カイラス，グルラマンダータ，この三つの名を帯びた腕環ほど立派なそれはない。それは二つのダイヤモンドの間に嵌められたトルコ玉である。〉

更にその2年前の1905年に，ロングスタッフは，2人のアルプスガイドと5人のポーターでリプレクを越えタクラコートから，その一番近い西稜（南側の方か？）を試みているのである。しかし，彼らはその尾根の6,200米の測量点の向こうの恐ろしい切れ込みに行手を阻まれた。その北側の尾根に望みを託し直して，7月22日から再び新たに登り直した。7月25日は早くも頂上の2,000フィート下，つまり7，０００米を越えていた。しかし対岸がオーバーハングしている一つのクレバスに足を止められたのだ。それを迂回する道を求めるには明るくなるまで待たなければならない。積み重なった疲労で彼も参ってきた。ガイドは，今登らなかったら貴方は後悔するでしょうと言う。それに対するロングスタッフの答えは〈もし直ちに引き返さなかったら，私はとても谷間まで行きつくことはできない〉だった。素晴らしき山，そして潔よい心。

1900年の西蔵旅行で，河口慧海は，マナサロワールの畔から，グルラマンダータを見た筈だ。マナサロワールの南岸を通って，ラカス湖の西からカイラスを巡っている。彼が，マナサロワー

ルを巡っている時見たマンリーという雪峰こそ，グルラマンダータではなかろうか。ニャモナニール，またはメモ・ナム・ニームリ，或いはニモ・ナム・ギャールと通ずるところがあるのかどうかは判らない。彼はマンリー峠について書いている。〈……余り高くない波動状の山脈を5里ばかり進んで参りますと遙かの向こうのマンリーという雪峰が聳えている。これは海面を抜くこと二万五千六百尺の雪峰であって巍然として波動状の山々の上に聳えている様はいかにも素晴しい。その辺へ着きますと閃々と雷光が輝き渡り迅雷轟々と耳をつんざくばかり。同時につぶつぶした荒い霰が降り出して轟々たる霹靂に和し天地を震動する様な雪峰も破裂しようかという勢いであった。……そういう酷い勢いが一時間経たぬ中にパッとやんでしまいまして，後は洗い拭うたごとくマンリーの雪峰が以前の如くに姿を現し，ただ片々の白雲が雪峰の前にちょいちょいと飛んでいるぐらいの事で，元の如く日が明らかに照っているというその変幻の奇なる有様は実に驚かされたです。〉

仏典仏跡を求めた慧海の遙か昔に三蔵玄奘もこの道を辿ってはいないだろうか。大唐西域記では，ティラウラコット，セヘト・マヘト，そしてスリナガルに足を運んではいたが，マナサロワールの畔には足を向けなかったようだ。でも，もしかして彼は人知れずマナサロワールの畔でカイラスとグルラマンダータを仰ぎみていたかも知れないではないか。縹渺たる時間は，印度のバスの旅の闇の中で形のない夢を紡ぎだして，僕の回りで，ヒソヒソと語り続けた。

〈朝〉　見果てぬグルラマンダータへの旅を夢みながら，僕たちは，ニューデリーへ向かうバスにゆられつづけていた。やがて行く手に見えてきたのは，白い輝きだ。それは，瞼の裏の紋様のようでもあって，定かならぬ形は，グルマンダータの北面の，頂上に続く白い稜線となって，僕におおいかぶさってきた。

引用文献

(1) 北大山岳部　；中央ネパール　；北大山岳部　；1965
(2) 高山龍三　；河口慧海の道
（シンポジウム・ネパール＃7＃8）；日ネ協会　；1980
(3) 北大山岳部　；ナラカンカール　；北大山岳部　；1963
(4) H・ハラー　；チベットの七年　；新潮社　；1965
(5) ティヒー　；神々の座　；鎌倉書房　；1944
(6) 河口慧海　；チベット旅行記（全五巻）；講談社学術文庫；1978
(7) ロングスタッフ；わが山の生涯
（世界山岳名著全集）；あかね書房　；1966
(8) 玄奘著　；大唐西域記
（中国古典文学大系）；平凡社　；1971
(9) 長谷川伝次郎　；ヒマラヤの旅（復刻）；図書刊行会　；1975
（以上　私蔵版に依った）

ネパールへ

小泉章夫

西アジアの暑く乾いた地方に居ると，森林の風土で疲労回復をはかりたくなるものである。そんなわけでカトマンズに入る安いルートを捜そうとデリーに入ったのは8月の中旬であった。

この季節だと暑い盛りをとうに過ぎている筈だが，それでも気力を奪い尽くす程の暑熱で，悪事を働いた者に神罰が降って永久に人々に忌み嫌われるよう太陽にされたとかいうインドの民話にも合点がいくものであった。こうなると清涼飲料水が売れるのも，もっともな話で，数年前，インド政府がコカコーラに製法を教えろと迫ったという話を思い出したのだが，あれは単なる脅しではなかったようでインドのコーラは全て，カンパコーラとかリムカ等という国産品になっていた。食欲もすっかり衰えていたが，これは，ラムザーン期間（ムスリムの断食月間）を回教圏で過ごすという誤りを犯して胃袋が小さくなっていたせいもあったらしい。ということで日中は旨くて安いバナナを一房食べて栄養をとっていた。

デリーからカトマンズへ格安の直行ミニバスが出ていることがわかり，これを摑まえようと待機する間，観光名所も若干見て廻った。市内にはいくつかムガール朝時代、即ちイスラムの城址が残っているが，一番大きなものは，オールドデリーにあるRed　Fortと呼ばれる赤色砂岩で造られた城である。ここは大して見るものもないのに物凄い人数が押しあいへし合いしていた。プラナ・キラという崩れかけた古城の隣りには白虎のいる動物園もあるのだが，敷地が広過ぎて一周するだけでくたびれ果ててしまった。囲いも然り。例えば猿山位の広さの囲いの中に狐が2匹ばかり居たりして見つけるのに苦労する。それだけ動物にとってはストレスのたまらない良い環境といえるかもしれない。そのせいかどうかは知らぬが河馬などはやたらに愛想をふりまいていた。観光ついでにアグラのタジ・マハールも見に行ったが，ここのシンメトリー構成は圧倒的なものでその病的な執念ばかりが印象に残る遺跡であった。

デリーでは各種の英字新聞も売られていてこれも良い暇潰しになった。特に三面記事や求人広告欄は見ていて飽きないものである。三面記事はかなり細かい事件も載っていて，マンホールのふたを盗んで捕まった泥棒の話を読んで近頃流行しなくった電線泥棒のことを思い出したりした。

この間，泊まっていた安ホテルはメインバザールの真中にあったが，この小路は終日人通りの絶えない賑やかなところだった。種々雑多な露店，自転車を改造した刃物研ぎ屋，物乞い，クラクションを鳴らし続けながら強引に通り抜けていく自動車，力車，セブ（コブ牛）それに一握り

の外人旅行者とそれを狙うスリ，闇ドル屋……。時々はオレンジ色の服を着た不具の聖者が群がる人々に祝福を与え，なにがしかの喜捨を受けてゆく。

ところで肝心のカトマンズ行のバスは待てど暮せどやってくる気配もないので真面目に汽車に乗って行くことにし，或る朝ニューデリーの駅から，Assam Mailに乗り込んだ。インドの汽車が混み合うのは旅人が大量の荷物を持ち込むせいもある。荷物の制限などはないらしく，なかには羊を連れて乗ってくるのもいるし，金持ちは金持ちで大きな革のトランクをいくつもポーターの頭にのせて旅している。二等車などに乗って立っていると，いつの間にか行李の片側を担がせられていたりもする。駅の構内には切符がなくても自由に出入できるのでホームには沢山の人達が寝たり炊事したりしていた。日本のようにお茶売りも居て，「チャイ，チャイ」と連呼しており，声をかけると素焼のコップになみなみとついでくれる。このコップは円錐形をしているので飲み干すまで置くことができない。飲んだあとは回収するのかと思って見ていると，そうではなく事もなげにホームに落とし紛々に破け散ってしまうだけであった。これは少々意外だったが，考えてみれば材料費はただみたいなもので人件費の安いことを思えば別に勿体ないことでもないらしかった。

朝デリーを発った汽車はカンプール付近で夕暮れを迎えた。この日はラムザーンの明けの新月で暗い晩だったが，代わりに巨大な螢が太い光跡をひいて楽しませてくれた。

目を覚ますともうガンガの鉄橋を渡ったあとであった。車窓の外には相変わらず地平線が広がり，ところどころの密林と集落そして広大な耕作地，泥田，それに水牛と集団で働いている人々が過ぎてゆく。汽車の旅はムザファルプールで終わりである。ここからはバスを乗り継いでラクソールに入る。その先はバスもなくて人力車。力車という乗物は余程念入りに交渉しないと最初の取決めより多い賃金を支払わされる。曰く「あれは乗客の運賃で荷物代は別である」「正規の料金の他にボクシスをつけてもらわなくては困る」等々。しかしこれだけ隙あらばふんだくってやろうという車夫の兄ちゃんも，外人をみつけて力車に寄ってくる物乞い達には自分のポケットから小銭を与えている。実際バクシーシの思想とは徹底したものだと感動させられる。

そうこうしてなんとか夕刻に国境に辿り着きインドの出国手続きを済ませることができた。インドの小役人は外人とみると，何か売るものはないか，Tシャツの一枚くらいあるだろう，としつこく迫ってくる。もっとも〝Anythig for sale？〟という問いかけは〝How are you？〟と殆んど同義のようでもあった。ネパール側の入国手続きは呆気ないほど簡単なものである。観光立国の方針がここまで徹底しているわけでもあるまいが，愛想の良い笑顔で迎えられ，荷物もろくに調べようとしなかった。

この国境の街，ビルガンジからは当然の事ながら偏平な東洋的顔貌のネパール人が生活しており，家並みも切妻屋根の木造のものが見うけられて何やらホッとさせられる。この晩はデリシャ

スホテルという名前倒れのロッジに投宿した。夜中，夢見の際中にロッジの小僧にたたき起こされる。何事かと思えば部屋代の催促であった。インドではチェックアウトの時に宿代を払っていたのだがネパールでは先払いらしかった。

ビルガンジからは乗合バスで前山を越えてカトマンズ盆地に入るのだが、モンスーン期の大雨で橋が流失してしまい不通になっているという。ロッジの小僧はバスは当分出ないから，開通したら知らせてやると胸を張っている。仕様がないので，ドルの一部を動物銀行券のようなネパールルピー紙弊に換えたあと，この日は街をぶらぶらして過ごした。さすがに街道筋の要地だけあって，なかなかに活気のある街である。久し振りにコカコーラやファンタの壜が店頭に並んでいるのを見かけたが，中身は別物らしかった。街はずれには不釣合にモダンな時計塔があって，興味をひかれて見に行くとセイコー製だった。

夕刻,バス会社の窓口へ行ってみると,なんと翌朝のカトマンズ行のバスの切符を売っている。バスは当分発たないという情報は，どうやら客をできるだけロッジに引き留めておこうという小僧の策略だったらしい。座席を予約しようと並んでいるとどこからか件の小僧が現われ，何かわからぬことをまくしたてながら切符を買ってくれたが，よく見るとちゃっかり釣銭を着服している。その商魂のたくましさには呆れかえったが，かわいい顔をしていて憎めなかった。翌朝の出発は早いので小僧が起こしに来る筈だったがバスのエンジン音に目を覚まし起きてゆくと小僧はロッジの入口で高いびきをかいてごろ寝していた。

バスは朝もやの中を出発してタライ平原を真直に北上し，やがて3,000m級の前山へとさしかかる。洪水で道が寸断されていたのはこの辺で2ヶ所で橋が落ちたままになっていた。どうするのかと思っていると，何のことはない，そのまま広い河原を横切り始める。水流の激しいところでは床上まで水が浸ってきたが，そのままエンジンをフル回転させて渡りきってしまった。

昼飯時には小さな宿場の食堂で休憩。すし詰めの乗客がどやどや上がりこむと，手際よく，お代わり自由の御飯とタルカリが運ばれてくる。こういう汁かけ御飯だと手で喰うのも楽である。

七曲がりの道を喘ぎながら登りつめた前山の峠はチサパニというところだが見える筈のヒマラヤ高峰群は厚い雲の中だった。森林帯ではあるが3,000mを越えているのでさすがに冷んやりする。霧の中から漆喰で土壁を塗った入母屋式の民家が忽然と現われたりするのをみていると日本の山峡にいるような錯覚にとらわれはじめた。峠を越えて下り勾配になると晴れ間が広がりはじめ，やがて森林帯から棚田の中腹を切ってつくった水平道に入っていく。数百mの急斜面が全て棚田になっているのは壮観という他はなく，その勤労には頭が下がる思いであった。

うねうねと曲がりくねった高捲き道路は山合いを縫ってどこまでも続いていく。所々に農村の集落があって原色に着飾った大勢の女性達が道路を往き来している。この日はTeejという祭りの日だったのだ。乗客の男達は急に落ち着きを失って興奮しはじめ，誰かが節をつけて歌い出す

と全員が唱和を始めた。バスは女性達が集まっているところで何度も停車し，その度に男達の歓声が上がる。終点に近づくにつれバスの中はいよいよ盛り上がってきて，まだネパール語もわからず，この日が祭日であることも知らなかった僕は何が何だかわからぬままにも，ひきづられて遠足気分にひたってゆくうちに，いつの間にか夕暮れ迫るカトマンズの街中に滑べり込んでいった。

キナ臭い空気の漂いだしたアフガンから東へ向かって開始した旅が終わろうとしている。見知らぬ街，それも或る種の期待を抱いて訪ねる街に入るのは暗くなってからがいい。先づは，街の匂いを嗅ぐだけでいい。明日からゆっくり好奇心を満たし，印象を修正していけばよい。裸電球がともる家並の流れを窓の外にみつめながら僕はすっかり安心していた。

チョオユー偵察行

花井　修

朝，目が覚めると昨夜来の雨はあがっていたが低く重い霧が垂れこめドゥード・コシの流れを白く陰うつなものにしていた。

今日はカトマンズを出発して10日目，いよいよナムチェに入るというので，朝食はいつものタルカリ定食に卵焼きを奮発して出発。しばらく歩くと行手に何やらいかめしいゲートが見えてきた。国境とか，税関とか，チェックポストとかいう所では必ず何か良くない事が起るという今までの経験から，またどういうわけか取調べられるとなると突然挙動不審状態を呈する僕は，直ぐ何処かに捲き道でもないかしらと目で追うが，周りは切り立った崖になっていて，さすがに敵の関所は地の利を得ていた。ひょっとするとまだ朝が早いので兵隊さんは寝ており，あの踏み切りをくぐって黙って通過できるのではないかと思って進んで行くと立て札があって「ＮＥＰＡＬ Sagarmata Natioal Park Entrance　ＲＳ60」と書いてあり，入場料をふんだくられることを悟る。勿論ちゃんと係の兵隊は起きていて，ベランダの上から早発ちの旅人二人を小屋の中に招きよせた。いかに僕たちがあつかましくてもこれはお茶の招待でもなければ，まして朝食をごちそうしてくれるもんだとは思わなかった。結局，５日分の生活費にもあたる，大枚60ルピーもふんだくられ，一片の入域許可書をもらって小屋の外に出た。踏み切りバーの前で，これが開くのを待っていると，あの兵隊がベランダの上から「何やってんだ。早く行け」と言う。結局バーは開かれることなくその下をくぐって通過した。

僕たちはなんだかものすごく損をしたような気がしてすっかり不気嫌になってしまった。ボテコシとドゥードコシの出合いの橋を渡ると道は急登に変り，深い霧の中を喘ぎながら登る。下からは糞を垂れ流しながら牛の群れが追いかけてくる。上からはククリを振りかざしながら村の若者がまき集めに下りてくる。時折，トレッカーとすれちがうがすっかり気分を悪くした僕は，よっぽどかわいい女の子以外には挨拶も返さない。

突然，霧が晴れると足もとにナムチェバザールの家並が浮かび村の入口の仏塔と広場が見えた。どうやらまた道をまちがえたらしい。

ナムチェバザールは思っていたほど大きな村ではなく，馬蹄型の競技場の様な村だ。広場を中心に漆喰の白壁の二階建ての家が，97戸立ち並んでいた。家々の間は霧と種々の動物の糞でよく滑べる石段と狭い路地で結ばれ，猫の額の様な畑では青野菜が植えられている。村のあちこちで

は土木工事が行なわれており観光客用の新しいロッジ、ホテルの新築工事が急ピッチとはいえないまでも，まあネパールのペースで着々と進行していた。村の店々では，食糧，日用雑貨，チベット物産品に混じって，トレッキング用の装備，食料も多い。値段は大分割高だが種類と量はかなり豊富だ。日本のインスタントラーメンは勿論，韓国産のノリとか，ヨーロッパ製の黒パンの缶詰とか，カトマンズでもちょっと入手できないものもある。ほとんど過去のエベレスト登山隊のものがおおく現在登山中のエベレストベースキャンプからの横流し品もあるという。ナムチェの安宿は，殆んどが現役を引退したシェルパの経営するもので，僕たちもそのうちの一軒Tawa Sherpa Lodgeに投宿した。この宿はほぼ村の中心にあるが，まだ本格的なトレッキングシーズン前なのか，宿泊客は少なかった。先客は，エベレスト隊慰問のオーストラリアの女の子と，小屋に居たことがあるというイエティ探検のイギリス人だけだ。一晩，2ルピーのベッドの上に荷物をおろすと，窓から見えるボテコシの対岸の岩壁をゆっくり霧が上がっていった。

10月3日，ようやく天候も回復したのでゴーキョに向けて出発。クムジュンにあるヒラリーの学校に登校するという子どもたちといっしょにナムチェをあとにする。シャンボチェの空港を横切りクムジュンの村を通って聖山クーンビラをまわり込むと正面にアマダブラム，南東にはカンテガ，タムセルクがその姿を現わす。見下ろすとイムジャとドゥードコシの出合が深く切れ込んだゴルジュに消えている。モアーン峠への登りでは先行する章夫に大きく離され，ひとり重いザックに座ってビリばかり喫っていた。章夫は息を切らしながらも蝶々を追いかけまわしている。僕は遠く彼のふりまわす白いネットを眺めて捕獲される蝶々に同情していた。峠を過ぎると道は一度ドゥードコシの河原ポルチェチャンガに下り，再び登りにかわる。シャクナゲの林の中を登っていく。僕たちのトレッキングでは毎日行程が決っているわけじゃないし，朝出発すればどうせ二人共，勝手に歩いていくので，一日の天場の決定も極めていいかげん。水があって，どちらか一人がここで泊りたいといえばそれで決まる。今日の天場はガヤーレ。陽はすでに西に傾き，おきまりの霧が湧き出て来た。

翌日も朝は天気が良かった。テントの前の小川に張った薄い氷を割って出発。陽があたり始めると暖かくなる。処々，石垣で囲ったヤクの放牧場と石造りの小舎が小さな集落を形成しているが，夏の放牧シーズンは終ったのか人気はない。小舎にはどれも中国製の大きな南京錠がかけられ，僕たちのようなよそ者が勝手に侵入するのを拒んでいる。牧柵がわりの石垣は，子どもの積木細工のように危なっかしくも念入りにかつ執念深く構築されており，ヤクの鼻息ぐらいは持ちこたえることができそうだ。こういう無人の集落に入り込むと，枝道が迷路のごとく複雑に入り組んでいて，そのうちどれかひとつだけが行き止りでない奥につづく正規の道なのだが，僕たち

は必ず，袋小路に追いこまれてしまう。そうなると仕方ないので石垣をよじ登り，ヤクのウンチを踏まないように跳びおり，まるで障害物競争のように行手を阻む石垣を乗り越えて直進することになる。マッチェルモを過ぎるとゴジュンバ氷河の舌端である。道は右岸のアブレーションにつけられていて極めて歩きやすい。昼にはゴーキョのポカリに到着した。山は湧き出てきた雲に隠れ，ポカリでは名前のわからない水鳥が所在なげに泳ぎまわっていた。陽は暖いが渡る風は冷たく，ポツンと取り残された無人の石室が，僕たち以外誰もいないゴーキョをいっそう寂しいものにしていた。

深夜から降り始めた雪は僕たちの小さなテントをカサカサと打ち，目覚し時計の役をしてくれた。出発する頃にはすでに止んでいたが，うっすらと積った新雪の為，わかりにくいアブレーションの道をまったく隠してしまっていた。カトマンズで買った安物のフランス製のクレッターシューズは底のビブラムがすり減ってよく滑り，また防水効果はまったくなかった。僕たちの目指すはチョオユーである。チョオユー解禁近しという情報をカトマンズで受けた僕たちはムスタン方面のトレッキングを急拠変更してここまで来たのだ。そのチョオユーは目の前にある。ネパールとチベットの国境をなす稜線は，巨大なカニの甲羅の様なギャチュンカンから高度を下げてゴジュンバカンを経て再び盛り上りチョオユーに到り，ローラに下る。この稜線の向うはもうチベットだ。チョオユーは遠くから眺めるとなんの変哲もない，これといった特徴のない山容だが近づけば近づく程，やっぱりパッとしない山だ。ただ，さすがに8,000mの貫禄はある。東の方にはヌプツェ，ローツェ，それにエベレストがその頂上部分だけ，朝の光に輝いている。今頃はヨーロッパ混成隊がその何十登目かを目指して登攀中だ。高度はすでに，5,000に近い。もっとチョオユーに接近して偵察しようと，カラパタールと呼ばれる5,553mのガレ山に登る。高度差500mを1時間。今まで一点の雲もなかった空に，西の方から小さな雲が流れて来たとみるや，たちまちチョオユーをおおい隠してしまった。お茶をわかして雲の晴れるのを待つが，山肌に張りついた雲は動かない。明日また出直そうとあきらめて下る。登りは忠実に尾根通しに登ったのだが，下りはルンゼを一気に降りてしまおうと，先の見通しのはっきりしない，ガラガラのルンゼを下っていった。調子よく，適当に石を落しながら跳ぶように下っていく。突然，右足をのせた岩がグラリと動き、バランスを崩して墜落してしまった。気がつくと僕は，ジェードル状の岩のくぼみにしがみついて止っていた。墜落するとき引き起したらしい落石が足下100mのスラブを落ちていく。口から大分血が流れ，周りの岩に赤いしみをつくっていた。ふと足元を見ると，かわいそうな僕の前歯が落っこちていた。痛みを感じる間もなく，見事に根も残さず抜け落ちたのだ。僕のその3cmもある歯をポケットに入れ，痛む足腰を引きずってテントに帰った。後日，インドに入った時にガンガの流れに葬ってやったので今頃は成仏しているだろう。

3日後，予定通りチョオユーの偵察を終えた僕たちは，あの有名なエベレストビューホテルのロビーで休んでいた。飛行機で着いたアメリカのお金持ちツアーの団体が入ってきて僕たちにコーヒーを注文する。彼等はハイヒールにスーツケース，首にはネックレス，耳にはイヤリングという典型的な観光旅行団だ。まごまごしていると，食事の準備やお風呂のサービスまで要求されかねないので早々に退散した。

ナムチェのタワ・シェルパ・ロッジはかなり賑っていた。エベレスト隊のノルウェー人がしきりに嫌煙権を主張している横で，ドイツ人のトレッカーが，おいしそうなハッパをこねている。隣のベッドではインドから流れてきた日系アメリカ人の女の子が長い髪にくしを走らせ，自称チベット語研究のイギリス人は喰い逃げのいいわけを声高に弁じている。アイランドピークをやるというシャモニのガイドは明朝の出発に備えてパッキングに余念がなく，コロラドの山奥から出てきたアメリカのおじさんは，ヘパタイティス！ヘパタイティス，と連呼している。章夫は，お気に入りのボイルドポテトをたらふく喰ってシュラフにもぐりこみ，僕は前頭葉の片隅で「迎えのヒコーキはいつくるんやろ」と関西弁で考えながら，ゆらめくローソクの光の下で「オデッサファイル」のクライマックスを読んでいた。

御協力者名簿（敬称略、五十音順）

〈個人〉

秋葉公太
鐙邦芳
石井宇一郎
石田隆雄
今村正克
遠藤高夫
岡沢孝雄
奥田五郎
金井五郎
河合範雄
川上隆夫
木村俊郎
小枝一夫
駒井喬
佐藤弘
鮫島和子
白石和行
関野幸二
高田敦徳
滝沢政治
藤堂利彦
中島秀雄
新妻徹
野島武
橋本巌
初見一雄
平田更一
福尾克也

浅野芳彦
有馬純
石岡希一
石松重雄
上野八郎
遠藤一
岡田勝英
小関幸治
神谷晴夫
川井浩史
勝佳史
沓沢敏
小平俊平
坂本直行
佐藤行郎
芝山良二
白浜晴久
高木均
高橋一穂
竹田英世
戸倉清一
長田進
西信三
野田四郎
橋本誠二
林和夫
平岡申行
伏島信治

朝比奈英三
池上宏一
石島行三
井上晴喜
梅本真
大内倫之
岡本丈夫
小野寺弘道
神谷正男
川上寿一
菅野信夫
熊野純男
小林年
佐々木幸雄
鮫島惇一郎
嶋田健雄
杉野目浩
高篠和憲
高松秀彦
土田直行
冨田ゆきし
中村晴彦
西信博
野村英明
橋本正人
東晃
広田伝一郎
古田進

増井幸雄	前田仁一郎	町田利明	
水上定一	湊正雄	宮崎武	
宮崎義宏	村山林治郎	向山栄	
森康通	森田英和	安田一次	
八木萃	山口健児	山口隆	
山口斌	山田知充	山田真弓	
山谷君代	山崎信男	山口義明	
谷沢正一	山本達雄	吉村啓一	
吉田祐一	渡辺興亜	渡辺千尚	
渡部勇	渡辺憲二	渡会修	

〈企業・団体〉

小樽市立第二病院中央材料部
小樽市立第二病院脳神経外科看護管理室
国分株式会社札幌支店
札幌テレビ放送株式会社
佐藤食品株式会社
塩野義製薬株式会社
株式会社秀岳荘
ダイヤワックス株式会社
竹山医療器械株式会社
東邦キャンピングガス式会社札幌営業所
株式会社トーモク
東洋水産株式会社札幌工場
日本光電株式会社札幌営業所
北都建材株式会社
丸二物産株式会社
三菱アルミニウム株式会社札幌営業所
三ツ和包装株式会社
室蘭製鋼株式会社
富士写真フィルム株式会社
雪印食品株式会社
雪印乳業株式会社

THE FIRST ASCENT OF SHUMARI KUNYANG CHHISH

by Kohey Echizenya

Summary

In 1979, Academic Alpine Club of Hokkaido (Hokkaido University Alpine Club) sent a party to Hisper Mustagh in Karakorum range to scale Shumari Kunyang Chhish (Kunyáng Chhish North Peak, 7108m). On May 14 the main party arrived at Rawalpindi by air where we made various arrangements necessary for the mountaineering for two weeks. Since the PIA-flight to Gilgit was full at that time because of bad weather, we decided to drive along the Indas valley. On May 30 we arrived at Nagar via Karakorum Highway with our total load of about one ton.

The employment of porters at Nagar was extremely troublesome. After four days, in spite of our liaison officer's persevering efforts, we had to pay one hundred rupees per day per porter. The caravan with 54 porters started from Nagar along Hisper valley on June 4. During the troublesome march to Kunyang glacier, talking with both liaison officer and porters, we were aware of the economic crisis in this area and also the importance of the control by the Government. We reached Blum-pari (4160m) after six days where we discharged all porters and set up Pre-base camp. From Pre-base camp all equipments and provisions had to be carried up to Base camp site on the north side morane of Kunyang glacier only by the shoulders of party members.

Base camp was finally established on June 17 at a height of 4260m beside two small ponds named Boom-pari by our liaison officer. After ascending 3 km on Kunyang glacier from Base camp across the glacier full of clevasses and further climbing up along a snowy ridge, we set up Camp-1 at 4900m on June 19. Camp-2 was set up in a small ice basin at 5300m on June 23 after easy climbing on a wide snow slope from Camp-1.

From Camp-2 we could see the climbing route for the first time which led to the saddle between Shumari Kunyang Chhish and Disteghil Sar. The climbing route was, however, barricaded by a dangerous icefall full of huge ice towers, steep ice walls with hanging ice cliffs and a fragile rock gully. At first we attempted to make a route on a small ice ridge in an icefall and fixed ropes of 700m length to the snowy saddle at 6000m but the route among ice towers just below the saddle was so dangerous that we abandoned this one. We tried another route on a steep ice wall, which was once tried by us and then was extended and completed by Hokkaido

Alpine Association party aiming at Pumari Chhish. Camp-3 was eventually set up on the west end of a magnificently wide ice plateau covered with snow on July 4. This ice plateau extended to the foot of surrounding peaks; Pumari Chhish, Kunyang Chhish Main Peak and Yukshin Gardan Sar. All these mountains as well Yazghil Domes appeared climbable from this plateau.

After refreshing at Base camp for two days we accomplished transportation of necessary loads of equipments to Camp-3. The route from Camp-3 to Camp-4 was on steep but wide snow ridge with scattered rocks. Camp-4 was set up at 6700m on the shoulder of a level snow ridge. All members were well acclimatized to the altitude and were in good condition. We gathered at Camp-4 on July 10 for the summit trial.

At 6:00 a.m. on July 11 we left Camp-4 and traced the ropes fixed on the day before to the summit. The route was on a narrow ridge covered with ice and snow which gradually turned to a snow wall. All members stood on the summit at 10:15 a.m. We played with a kite there and then descended to Camp-3. Evacuating high camps, we descended to Base camp on the following day.

We returned the same way as forward journey via Gilgit and dispersed the party on July 26 in Rawalpindi.

Members:

Kohey Echizenya	(31)	Leader	Neurosurgeon
Eiji Shimozawa	(30)	Deputy leader	Surgeon
Akinari Ishimura	(26)		
Osamu Hanai	(27)		
Jin Takahashi	(26)		Student
Akic Koizumi	(23)		Student
Shinri Irikawa	(23)		Student
Hiroyuki Shiga	(21)		Student

Liaison Officer:

Capt. Ikram A. Khan	(29)

あとがき

小林　年

WE SUMITTED 11 TH
JULY AT 10.15 ALL 8
MEMBERS THE SAME
TIME KOHEY

新造語もまじったこの電報が飛びこんできたのは，54年7月19日の夜だった。とうとうやったか！それも全員同時登頂するなんて，大した事をやらかしたものだと，一瞬ぐっと来た。早速，朝比奈会長をはじめ各方面に電話で知らせた。電話が終った後はぐったりとしてしまった。

それ迄のパキスタンからの連絡は，「猛烈な暑さで参ったり，下痢をする者が出た。」とか，「荷物の輸送は順調だ。」とか，「ポーター・トラブルがひどい。」とか，一喜一憂させられるものであった。事務局としては，〝是非，登頂に成功して欲しい。〟、〝絶対に事故を起すな〟と，矛盾した気持で日を過していた。

想えば，この隊は色々と問題を巻き起してくれたものだ。特に，ビアフォ氷河から，スノー・レークを越えてヒスパー氷河からの入山なんてルートは二つの遠征隊を出すようなもので，とても無理であったのが，急にカラコルム・ハイウエイ経由が許可になって安心させられるという一幕もあった。出発直前，知床遭難が発生して，現役部員の参加問題も持上ったりもした。考えて見るとよくもしぶとく生き残ったものだと変な感心もしてみた。

チヤムラン遠征以来，いくつかの遠征がなされた。又，いくつかの計画が出てきては，消えていった。北大山岳部50周年記念に冬のジャイアンツをやろうという，夢のような計画が持ち出されると，まわりがだんだんと熱を帯びてくるようになった。とうとう，熱に浮かされて1973年から74年にかけてネパール迄足を延したりもした。

未踏のラプサン・カルボの計画が走り出し，曲りながら1974年にガルワールのトリスル遠征となり，失敗した時はどうなるものかと心配させられた。しぶとい連中が1978年のカラコルムのドレフェカル遠征の成功をなしとげ，そして，翌1979年のクンヤンチッシュ北峰の全員登頂となった。

この勢いが1980年から81年のバルンツエ登頂，そして，82年から83年のダウラギリⅠ峰の計画と続いてきた。この熱気はどこまで続くのだろうか？ダウラギリ登頂で熱気が納まるのだろうか？まったく空恐しい気がする。この大きなエネルギーがいつまでも続くことを期待するし，また，次の時代の人々に伝えていかなければならないと考えている。

編 集 後 記

カラコルムの山行が終って，はや2冬が過ぎてしまいました。今頃になって報告書を出すことになったのは編集子の怠慢以外の何物でもなく，まことに心苦しく，申し訳なく思っております。

記録，資料編は，各隊員に分担を割り当てて別個に書いたものを寄せ集めた形式ですので統一に欠けておりますが，読みにくい点は御容赦を願います。紀行編は，本遠征と直接関係のないもので，やや散慢の観もありますが，帰国の遅れた隊員のその後の足どりの報告ということで付け加えました。

最後に，本遠征の遂行にあたって御支援，御協力をいただいた多くの方々に，あらためて厚く御礼申し上げます。

1981年4月　小泉記

00700

1981年7月25日発行

カラコルム登山報告
SHUMARI KUNYANG CHHISH

発行所　北海道大学山岳部山の会

印刷　北海道大学生活協同組合北大印刷